26th

RYLA

SEMINAR

第26回
ＲＹＬＡセミナー報告

「人間・自然・科学技術」

2004.3.25～3.28

神戸ＹＭＣＡ余島野外活動センター

Rotary Youth Leadership Awards Seminar

目　　次

ＲＹＬＡセミナーとは
プログラムのねらいと内容
セミナースケジュール

１日目

開講式
　ガバナーあいさつ
　　第2670地区ガバナー　桑原　信義……2
　　第2680地区ガバナー　本山　新三……4

　ディーンあいさつ
　　ディーン　白石　正明……6
　　ＲＹＬＡ顧問 元ＲＩ理事　今井　鎮雄……7

　オリエンテーション
　「ロータリーがＲＹＬＡに期待するもの」
　　ＲＹＬＡ顧問 パストガバナー　深川　純一……8

ロータリアンの夕べ
　　ＲＹＬＡセミナー顧問　深川　純一……16

オープニングパーティー……32
　キャビンタイムと食事……33

　講義「How to say から How to do へ」
　　長崎大学教授　溝田　勉氏……34

　レクリエーションタイム……49
　カウンシルファイヤー……50

2日目

講義「未来の社会へ　～科学と技術の役割～」
愛媛大学名誉教授・前学長　鮎川　恭三氏…… 51

3日目

フォーラム…… 71
講義
神戸ＹＭＣＡ顧問
元ＲＩ理事　今井　鎮雄氏…… 92
閉講式
あいさつ
第2680地区ガバナー　本山　新三…… 104
第2670地区アドバイザー　三宅　洋三…… 105
第2680地区アドバイザー　米谷　　収…… 106
ディーン　白石　正明…… 107

感想文…… 108
受講者名簿…… 136
第26回ＲＹＬＡセミナー運営委員会…… 140

RYLAセミナーとは

ロータリー青少年指導者育成プログラム（Rotary Youth Leadership Awards･･･RYLA）は、若い人々のためのプログラムであり、国際ロータリーが1971年に公式に採用したプログラムです。

ロータリーが青少年を尊重し、かつ、青少年に関心を抱いていることを一層明らかにし、選考した青少年指導者およびその素質ある人に実地訓練を体験させ、責任ある、効果的な自発性に富む指導方法を身に付けるように激励、援助することを主な目的としています。

プログラムのねらいと内容

RYLA セミナープログラムのねらいは、受講生に５つの特色を味わってもらうことにあります。

①高レベルの講義と討論
②キャビンタイム（親睦の熟成）
③自由と規律
④余島の自然
⑤カウンセラーシステム

恵まれた自然に囲まれたなかで「人間・自然・科学技術」のテーマを、講義・キャビンタイム・思索の時間・バズセッション・フォーラムなどを通して徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

セミナースケジュール

3月25日（木）																							
3月26日（金）	朝食（7:30）	カウンセラーミーティング	溝田　勉氏（９：30）	昼食	レクリエーション テニス、ソフトボール ヨット、アーチェリー 釣り、カヌー、他																		
3月27日（土）	朝食（7:30）	カウンセラーミーティング	鮎川恭三氏（９：30）	昼食	思索の時間	バズセッション																	
3月28日（日）	朝食（7:30）	カウンセリングミーティング	今井鎮雄氏（９：00）	閉講式 記念写真 植樹 感想文 昼食																			

3月25日（木）									開講式 オリエンテーション（15：00）								オープニングパーティー				キャビンタイム ロータリアンの夕べ		
3月26日（金）																							
3月27日（土）																							
3月28日（日）																							
	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22								

ガバナーあいさつ

国際ロータリー第2670地区
ガバナー　桑原　信義

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました桑原でございます。ロータリー用語で地区番号を「2670」「2680」と申し上げるので、聞き慣れない言葉ではないかと思いますが、四国地区が2670地区、兵庫が2680地区でございます。日本は34地区に割っておりまして、それぞれに番号がついています。そういうことで、このＲＹＬＡセミナーは2680地区と2670地区が合同でずっと開催しておりまして、今回で26回目になるということでございます。

我々ロータリーと、若い世代と申しますか皆さん方、さらにはもう少し下の大学生、高校生たちとの関係は、いろいろ組織がございまして、高校生ですと「インターアクトクラブ」というのがございます。また、社会人や大学生を含めまして「ローターアクトクラブ」という組織を各地につくっておりまして、この若い人たちと一緒に私たちは活動しているということでございます。ロータリー発足当時はアメリカの資本主義がこれからという時期でございまして、小さな子供さん方の労働問題、あるいは障害のある子供さん方の労働問題などを、ロータリーが初めて取り上げまして、もう少し人道的な側面から若年労働を問題にしていこうという観点から、ロータリーと若い世代の関係が始まったと聞いております。そういうことで、我々も次世代の皆さん方の問題、今後の方向についてはたいへん関心があるわけでございますが、このＲＹＬＡセミナーはそうした若い人たちの中心になってご活動いただける、言うなればその指導者養成講座という感じでいろいろ勉強をしていただいているということです。

今回は３つのテーマを出しまして、そのテーマにしたがって勉強していただくわけでございますが、ロータリーの基本的な考え方、取り組み方につきましても、ぜひ個々のカウンセラーの方や我々のお世話をするロータリアンの方から、いろいろお聞き取りをいただきたいと思います。さらには我々も皆さん方から、今の世代の問題点や本音を勉強するいい機会にしたいと思いますので、お互いに勉強するという４日間にしていただけたら、我々としてもたいへんありがたいと考えております。

今日は、実は挨拶の中に「満開の桜の下で」という文面を書いたんですが、どうも満開にはまだ時間があるようでございます。先ほどここのスタッフの方からのご注意もありま

したが、この余島というのはたいへん冷え込むといいますか、寒さの厳しい所のようでございます。ですからくれぐれもお風邪などひかないように、気をつけて4日間元気に活動していただけたらと思っております。私は勝手をいたしまして、最終日の講義や活動には参加させていただけないんですが、このセミナーを開催するにあたりまして、スタッフの方は2670地区、2680地区とも1年間かけていろいろ準備をしていただいておりますし、たいへんお世話になるわけでございます。そういう方々にも感謝の気持ちを持って、4日間おつきあいいただければと思います。

たいへん長くなりましたが、ご挨拶に代えさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

ガバナーあいさつ

国際ロータリー第2680地区
ガバナー　本山　新三

2680地区ガバナーの本山でございます。ただ今、2670地区の桑原ガバナーからＲＹＬＡ全般につきましての非常に詳しいお話がございましたので、私はちょっと視点を変えてご挨拶申し上げます。

今日のＲＹＬＡは第26回目です。ＲＹＬＡというのは、要するに青少年の指導力、善良な市民の心、そして国際理解と平和に貢献するための資質を伸ばそうというのが目的でございます。しかしそれ以上に、この余島で開かれるということに意味があると思います。余島というのは、向こうに屋島が見えておりますが、あの屋島の源平合戦以来、まったく変わらない手つかずの自然だと思います。その自然に、ここにいらっしゃるＹＭＣＡの今井鎮雄先生が50年前に目をつけられ、電気や水道をひいてこのような施設をつくられました。この余島という所は、非常に心が安らぐ場所であり、他ではどこにも見られないような独特の雰囲気を持った環境でございます。四国にも兵庫県にもいろいろな研修施設があると思いますが、そうした施設で開くよりも、この隔絶された島でＲＹＬＡセミナーを開くことにこそ意味があるのだと私は思っております。

ともかくこの４日間のＲＹＬＡセミナーで、皆さんの人生が変わるかもしれません。と申しますのは、少なくとも指導者としての資質は植えつけられると思います。このように50数名の、全く知らない人たちが集まって寝食を共にし、語り合って一緒に楽しんでいこうという経験は、人生において大事ではないかと思います。この2670地区と2680地区の合同ＲＹＬＡというのは、いわゆる合宿型のセミナーでございますから、よそのセミナーと比べて数段高度な内容になっております。ですから私たちロータリアンが、その全てを皆さんに無償で差し上げるというのがＲＹＬＡでございます。

今年は「人間・自然・科学技術」がテーマです。皆さんお気づきになったかもしれませんが、食堂の前に「人と出会い、神と交わり、愛の灯の灯るところ」という石碑が建っています。その文句に全くふさわしいところが、この島なんです。そんな場所で「人間・自然・科学技術」というテーマで勉強することは、非常に時宜を得たものではないかと思います。私も職業が医師でございまして、自然科学を学んだ者でございます。ですから、自

然とか科学技術には非常に思いもあるわけですが、20世紀は非常に科学技術が発達した時代なんです。代表的なものを挙げると、まずライト兄弟が飛行機を発明しまして、空を飛ぶ夢を実現しました。それ以上に大きいのは、原子爆弾。これは広島と長崎の悲劇を生みました。それから私が挙げたいのは、医者ですからやはり抗生物質。これは、ヒポクラテス以来の人間と細菌との戦いを制したということです。それとコンピューター。これで人間の生活は変わってしまいました。これらによって人間はものすごい利益を得たわけですが、一方で地球破壊を招き、神の領域に踏み込んでしまった。「神の領域に踏み込んだ」とは、例えばフロン技術とか、人工受精の行き過ぎなんです。すでに新聞などでご覧になったかと思いますが、あれは神への冒瀆かもしれません。

そしてこれら以上に、21世紀はますます科学技術が発達すると思います。私の能力ではおそらく理解できないと思いますが、お若い皆さん方は21世紀に生きる方々ですから、少なくとも20世紀のツケを払ってもらわなければいけない。それは地球環境の破壊とか、結核や伝染病の蔓延などです。細菌は制圧したけれど、最近はウィルスの逆襲にあっていますね。ＳＡＲＳや鳥インフルエンザウィルス、ＨＩＶなど、ウィルスの逆襲にも対応しなければならない。ともかく21世紀を文化的な世紀にすること、それがあなた方の肩にかかっているわけです。これから大学の先生の講義を受けられますが、それについて必ず皆さんでディスカッションして語り合って下さい。その時間は無駄かもしれませんが、有意義な無駄だと思うんです。私たちの時代には、旧制の高等学校や大学予科の制度がありまして、今の大学でいうところの教養課程を３年間かけてゆっくり勉強したわけです。だからみんな遊んだり、本を読んだり、話し合ったり、そればかりをしていて、その時間は全く無駄な時間だったと思いますが、今になってみると非常に有意義だったと思います。

ですから皆さん方も、ぜひこの４日間の”有意義な無駄”に没頭してください。思索にふけるこの４日間というのは、人生にとって非常に大切なものとなると私は信じているからです。これをもって挨拶に代えさせていただきます。

ディーンあいさつ

ディーン 白石 正明

皆さんこんにちは。第26回ＲＹＬＡセミナーに参加をいただきまして、誠にありがとうございます。このセミナーは、ＲＹＬＡ運営委員会が、約１年間をかけて運営並びにテーマ設定をいたしまして、兵庫地区、四国地区の各委員会が切磋琢磨して、本日の開催にこぎつけました。

今回は、「人間・自然・科学技術」をテーマに、明日は長崎大学教授・溝田先生、あさっては愛媛大学前学長・鮎川先生をお招きして、講義をいただきます。このテーマに基づきまして、受講生の方々は、余島の自然と高いレベルの講義、またキャビンタイムなどを通じて自由と規律を学んでいただき、カウンセラーとも語り合って、３泊４日を過ごしていただくことになります。この恵まれた環境の中で、人とふれあい、自然と語り合うＲＹＬＡの本質を満喫していただければありがたいと思います。

後ほどご紹介いたします今井先生が、約50年前に瀬戸内海を巡って、この余島にたどりついたとお聞きしております。私も６年ほど前にこのＲＹＬＡに参加をさせていただいたんですが、今井先生や深川先生、このＲＹＬＡの運営を見て、自分自身が非常に感動を覚え、今はＲＹＬＡ委員を務めております。この３泊４日が、受講生の方々にとって本当に有意義な時間となりますよう、スタッフともども心から感謝しながら、これを実行してまいりたいと思います。

ちょっとご紹介が遅れましたが、私、今回ディーンという大役を仰せつかっております、高松グリーンロータリークラブの白石と申します。ディーンというのは、お聞きするところによりますと、学部長とか、校長先生というような役職で、私にとっては全く雲の上の話のような大役なんですが、与えられたものは断らないという性格ですので、つい「わかりました」と二つ返事でお引き受けいたしました。

期間中はこの余島の中を私もウロウロしますので、皆さん見かけたら「何しとんや、そこの太っちょ」というような感じで声をかけてください。私はざっくばらんなタイプですから、どんどんアプローチをかけていただければよろしいかと思います。どうぞこの３泊４日間、よろしくお願い申し上げます。

RYLA顧問
元RI理事　今井　鎮雄

神戸から参りました今井と申します。私は最後の日曜日にお話をする時間がございますので、ここではお話はいたしません。ただ、私がお願いしたいことは、RYLAというのは特別なロータリーのプログラムでして、まず第一に皆さんお一人お一人の費用を各クラブにお願いして出していただき、皆さんは時間だけあけてくださったら結構なんです。しかもここに来られると、大学の先生たちがいろいろな今の問題を取り上げて語って下さる。その今の問題を、皆さんがこのキャビンの中で話し合い、人生の中で少しだけまじめな時間を過ごしていただきたい。今、私たちはどういう時代のどこにいるのか、私たちは次の時代にどのような責任を負っているのか。そういう意味においては、ここでの4日間を、皆さんの人生を豊かにすることのために使っていただきたいとお願いしたいんです。

後でゆっくりまた話す機会がありますが、3日間は皆さんと一緒におります。いつでもお話をしてくださったら結構かと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

私は26回、RYLAセミナーに参加してまいりました。これだけが自慢でございます。ありがとうございました。

「ロータリーがＲＹＬＡに期待するもの」

ＲＹＬＡ顧問
パストガバナー　深川　純一

ご紹介いただきました深川でございます。今日は、「ロータリーがＲＹＬＡに期待するもの」というテーマで、何かおしゃべりをしようということであります。「ＲＹＬＡに期待するもの」というテーマでありますから、まずＲＹＬＡとは何かということを話さなければなりません。それから、ロータリーとは何かということも話さなければならないと思います。ロータリーを知らない人もおられると思います。「ロータリークラブ」という名前を知っている方はいらっしゃいますか。若干は知っておられるようですが、大多数の人はご存知ないようですので、まずロータリーの話から入っていきたいと思います。

今からちょうど99年前、1905年でありますが、２月23日に弁護士のポール・ハリスという人が３人の友達と話し合いまして、アメリカのシカゴで「ロータリークラブ」というものを作ろうではないかという話をしました。これがロータリーの出発点です。当時、シカゴという街は、経済的には今の日本と同じように大変な不況でございまして、厳しい経済状況であったのですが、ポール・ハリスたちはお互いに助け合って、みんなが隆々と栄えていくようなクラブを作ろうではないかといって、出発したのであります。そこでどのような会員を集めるかが問題になったのですが、ポール・ハリスが考えたのは、この資本主義経済社会ではご存知のとおり、自由競争が基本原則であります。自由競争社会では、例えば弁護士仲間とか医者仲間、デパート業界など、同業者というのはお互いに食うか食われるか、いわゆる競争関係になります。したがってお互いに仲良くなれない。もっとも弁護士業界なんていうのは、私も安平先生と同じ弁護士でありますが、競争がほとんどございませんから仲良くやっております。しかし、競争の激しい業界では、まさに食うか食われるかの関係であります。「俺が潰れる前にあいつが潰れてほしい」などというわけのわからない感情の虜にもなります。そういうことでありますから、なかなか仲良くなれない。そこでポール・ハリスは、ひとつの職種から１人だけ会員を選んで、クラブをつくったらよいのではないかと考えました。例えば弁護士から１人、デパート業界から１人、魚屋から１人、八百屋から１人というようにして、同じ職種から１人

だけ会員を選んでクラブをつくれば、同業者がいないのでみんなが仲良くできるだろうと考えたわけであります。当初はそういう形で、ひとつの職種から１人だけ会員を選ぶ「１業種１会員」という原則で出発したわけであります。そして、みんなが仲良くなってお互いに助け合い、だんだん豊かになっていったのであります。

しかし、やがて、反省がやってまいりました。どういうことかと言いますと、弁理士のドナルド・カーターという人がシカゴにいまして、その人にロータリークラブの仲間が「君もこのクラブに入らないか」と誘いをかけたのであります。するとカーターは「ひとつの職種から１人だけ会員を選ぶんだろう。そうすると、会員になれない他の同業者は一体どうなるのか。それに、君たちは職業人の集まりだ。職業を持っていない一般地域社会の人たちはどうなるのか。たしかに君たちは、お互いに助け合って豊かになって楽しいだろう。しかし、地域社会でこのクラブに入れない人や、同業者の中でクラブに入れない人たちは一体どうなるのか。私たちはこの地域社会に生まれてきて、地域社会に育てられ、地域社会でお世話になって暮らしている。そのお世話になっている地域社会に、何の恩返しもしない、何の足跡も残さない、自分のことだけを考えて隆々と栄え、やがてこの世を去っていく、そんなエゴイズムのようなクラブは永続性がない。俺はそんなクラブに入る気はないよ」と言って、きっぱり断ったのであります。この話を聞きまして、いたく反省したのがポール・ハリスでした。「カーターの言う通りだ。クラブの行き方を変えようではないか」と言って、それからロータリークラブは世のため人のためを考えるクラブに変わって行ったのであります。それが今日のロータリーの始まりとなったわけであります。

クラブができてから３年ほどたった1908年、世のため人のためということをある人が「サービス」という言葉で集約いたしました。そこで、世のため人のためのロータリークラブであるならば、それは何もシカゴだけにあるべき筋合のものではない、全アメリカの地域社会にひとつずつクラブがあってしかるべきである。したがって、だからロータリークラブを全アメリカに作っていこう、さらには全世界にロータリークラブを作っていこうではないかということで、ロータリーを拡大しようという運動が始まったわけであります。そして1908年、クラブナンバー２のサンフランシスコロータリークラブができました。その後も次から次へとクラブができまして、今、全世界に31,000を超えるロータリークラブがあります。ロータリアンの数も122万人を超えています。日本のロータリークラブは2,300ほどあり、ロータリアンの数が106,000人余りです。

このように、シカゴロータリークラブが最初にできて、次々とクラブができていきます。そしてロータリアンの数も増えていったのでありますが、ただ、会員の数が増えただけではこれは”烏合の衆”であります。こうして集まってきたたくさんのロータリーの人たちを、合理的に管理する原則をつくらなければ駄目だろうということになり、クラブ創設から５年経った1910年、当時全

アメリカにあった16のロータリークラブをもって連合体を作り、「全米ロータリークラブ連合会」という団体をつくったのであります。それから2年ほど経って、ロータリークラブがカナダにでき、キューバやイギリスにもできて、事は国際的になったということで、「全米ロータリークラブ連合会」という名前を「国際ロータリークラブ連合会」と変えたわけであります。さらに1922年になりまして、今までクラブ間の連絡調整だけを行っていた連合会に、各クラブを直接監督していく機能も加えまして、「国際ロータリー」と名前を変えました。これが現在の国際ロータリーであります。先ほど、紹介された「RI」というのはRotary Internationalの略であり、国際ロータリーのことであります。

現在、この国際ロータリーは31,000を超えるクラブを管理しているわけでありますが、その中でだいたい50〜70クラブずつをグルーピングしまして、それを「地区」と言っているのであります。そして、1地区に1人の国際ロータリー役員である「ガバナー」を置きまして、各クラブの連絡調整にあたらせているわけであります。地区は現在、全世界に530あります。先ほど桑原ガバナーからご紹介がございましたように、その530地区のひとつであります2670地区が、四国全体を管轄する地区になっております。それから兵庫県全体を1地区としているのが、2680地区であります。そしてガバナーというのは、任期1年の無給の役員であります。報酬はいただきません。四国の2670地区が桑原信義ガバナーでありますし、兵庫の2680地区は本山新三ガバナーであります。それから次の年度、すなわちこの7月からガバナーになられる方を「ガバナー・エレクト」と言います。先ほどご紹介がございましたように、兵庫の2680地区は橋本一豊さんがガバナー・エレクトであります。そして、ガバナー・エレクトの次にガバナーになる人を「ガバナー・ノミニー」と言います。先ほどご紹介がありました石井良昌さんが、兵庫のガバナー・ノミニーであります。そしてガバナーを既に終えた人、今井先生や安平先生などを「パストガバナー」と言っているわけであります。ロータリーの組織というのは、だいたい以上のようになっております。

ところでロータリーとはどんな活動をしているのか、皆さん興味があると思うのですが、20世紀の始め頃は全く素朴な奉仕活動をしておりました。例えば、冬の寒空で新聞売り子の少年が新聞が1枚も売れずに困っている、そこをロータリアンが通りかかって「おじさんがいいところに連れていってあげよう」と言ってロータリークラブに連れていき、クラブの連中に「この子が困っているから助けてやってくれ。どんなことをしたらいいかわかるだろう」と言ったら、みんなが「わかった、わかった」と言いながら新聞を買ってやり、中にはジャンパーなど着せてあげた人もいた。少年は「おじさん達ありがとう」と言って嬉しそうに帰っていく、みんなはその姿を見て「世のため人のためのことをした」と納得する、そんな素朴な奉仕活動をしていたわけであります。また、一生懸命勉強しているが学費が足りないという苦学生に奨学金を出したり、身体に障害があるために満足に教育も受け

られない子供たちがいると、これはアメリカ憲法が保障している「教育の機会均等」という理想を無にしている、したがって、身体障害者の養護学校をつくろうという運動もしております。それから、地震や火災など災害が起こった時、義援金を出して被災者を助けるなどして、世のため人のための活動をしていたわけであります。

また、このような困った人を助ける、いわゆる「弱者救済」だけではなくて、ロータリアンは皆職業を持った職業人であります。したがって、職業を通じて、世のため人のために奉仕することも、ロータリーの重要な実践になるわけであります。例えば、職業人として自分の業界を改良していく、そのためには賄賂を使わない清潔な社会をつくろうという運動も、ロータリーではしていたのであります。いわゆる「倫理の提唱」、これはたいへん重要な実践活動になっていたのであります。

それから青少年育成の分野では、先ほどもご紹介がございましたように、高校生年齢の人たちを育てるために「インターアクトクラブ」を作っており、また、18歳から30歳の若い青年男女で「ローターアクトクラブ」を組織しております。これらは全てロータリーが、クラブという組織に若い人たちに入ってもらって、世のため人のためにこのような奉仕の実践方法もあるということを知ってもらおうという気持ちでつくったものであります。そしてこのＲＹＬＡも、青少年を育てるプログラムのひとつであります。

それから、ロータリーの特殊な活動のひとつに「ロータリー財団」というものがあります。これは、ロータリアンが寄付金を持ち寄ってつくった財団であります。この財団の活動はたいへん多岐にわたっておりまして、例えば台湾で地震が起きたときに救援資金を出したり、全世界的にポリオを撲滅しようという運動も行っています。また、全世界の若者たちに国際感覚を身につけてもらうために、ロータリー財団の奨学生を募り、その人たちに奨学金を出して全世界の若者を育てています。通常、このような教育財団というものは財団所在地に来る人にお金を出します、例えば、フルブライト奨学金ならアメリカに来る若者にお金を出す、ブリティッシュカウンシルはイギリスに来る若者に金を出すという具合にその財団所在地に来る若者にお金を出すのが普通でありまして、どこの若者がどこの国へ行っても奨学金を出すというのはロータリー財団だけなのです。ただし、ひとつだけ条件があります。受け取り機関としてのロータリークラブがなければなりません。それだけが条件であります。それ以外は、オーストラリアの青年が日本に来ても奨学金を出しますし、日本の若者がアメリカへ行っても奨学金を出します。このように、たいへん特殊な財団であるということを心に留めておいていただければと思います。

以上申し上げましたように、ロータリーの活動分野は非常に広うございます。そしてこのＲＹＬＡも実は、ロータリーが開発したプログラムのひとつなのであります。ＲＹＬＡとは、英語で言いますと Rotary Yourth Leadership Awards で、この頭文字をとりましてＲＹＬＡと略しているわけです。日本語では「青少年指導者養成計画」

と訳されています。ＲＹＬＡの発祥については、このパンフレットにも若干説明がございます。重複しますが申し上げておきますと、1959年、オーストラリアにクイーンズランドという州がございます。その州の創立100周年の記念といたしまして、イギリスの王女と同年代の青年男女を集めて、社会教育プログラムを実施したのがＲＹＬＡの始まりです。しかし、当初のＲＹＬＡは、その後、全く鳴かず飛ばずの状態でありましたが、1974年になりまして、アメリカのワシントン州タコマという所でＲＹＬＡが開催されました。それが導火線となって、まさに草原の野火のように全世界に広がっていったわけであります。

その４年後の1978年、ここにおられる今井先生がこのＲＹＬＡを企画されました。それから今日をもって、26年目になっているわけでございます。

このＲＹＬＡは、アメリカで始まったオリジナルなＲＹＬＡとは若干趣を異にしております。それはどういうことかと言いますと、アメリカで始まったＲＹＬＡは、だいたい18歳から24歳までの青年男女を集めて教育するというプログラムでした。

しかし今井先生は、18歳から24歳というのは青少年のリーダーとしてはまだ若過ぎる、これは日本的にアレンジをしなくてはならないということで変えたわけであります。したがって、ここのＲＹＬＡは世界中でただひとつであり、他所ではやっておりません。その内容は後で申し上げますが、このＲＹＬＡは、受講生の皆さんが、例えばテントの張り方やロープの結び方といった技術的なことは全てマスターしたということを前提にして、それ以上に高い精神的境地に皆さんを導いていこうではないか、ということが主たる目的であります。

そこで、今井先生の発想は、リーダーの養成計画というのはＹＭＣＡでもありますし、ボーイスカウトやその他たくさんの青少年団体でもそれぞれ固有のリーダー養成計画を持っております。したがって、ロータリーがそれらと同じようなことをやったのでは全く意味がないだろう、ロータリーがやる以上は、どの青少年団体でもできないようなハイレベルなものを目指そう、というのがこのＲＹＬＡのそもそもの目的であります。したがってこのＲＹＬＡは、非常にハイレベルなものとして企画されております。したがって、セミナーの講義も一流の大学の先生に来ていただきます。実を言うと、60名ほどの受講生のために大学の先生にはるばる来ていただくという意味では、たいへん豪華なプログラムなのです。さらに言えば、ハイレベルでありますから、講義を消化する能力を考えまして、受講生の年齢を最低20歳と決めました。これがオリジナルのＲＹＬＡと違うところであります。では上は何歳までかというと、無制限です。今までの経験では、60歳近い方が受講生として来ておられます。したがって、受講生の年齢の幅も広うございます。最近は、割合に若い人たちが集まってきておりますが、基本的には20歳以上であれば何歳でもよい。なぜ20歳以上かと言いますと、ハイレベルな講義でありますから、大学の教養課程を修了した以上の力がなければ、講義の消化能力として不十分だろうという考え方であります。

また、このＲＹＬＡは大人の集まりですから、お酒を飲むこともあるでしょう。それから考えると、未成年者は参加させない方がよいだろうということで、20歳以上という形になっているわけであります。

それで、講義の関係でひとつおことわりしておかなければならないことは、講義というものは、話をする人と話を聞く人との共同作業で成り立つものであります。したがって、講義中に部屋の出入りをすることはできるだけやめていただきたいと思います。これは特に、ロータリアンの皆さんにお願いしておきます。講義の途中で部屋を出たり入ったりしますと、講義の雰囲気をつぶしてしまいます。講義というものはみんなのためのものですから、みんなが一生懸命に聴いているときに、そういう人が出てくると、その雰囲気をつぶしてしまう。この雰囲気は、金銭には代えられないほど尊いものでありますから、その雰囲気は大事にしていただきたい。したがって、講義中の部屋の出入りはしないようにお願いいたしたいと思います。これは、ほかの皆さんにご迷惑をかけるばかりでなく、講師の先生にもたいへん失礼にあたります。また、講義をまじめに聴いておられる受講生の皆さんにも失礼になると思います。私たちはお互い、信頼の世界に生きているわけでありますから、皆さんも自分の良心にしたがって自律していただきたいと思います。

このＲＹＬＡで特に大事にしておりますのは、皆さん方の「自律」であります。したがって、何をするにも基本的には自由であります。食事も、朝７時半から９時までの間であればいつ食べても結構です。好きな時に食べたらよい。前の晩遅くまで議論をしてお腹が空いていなければ、朝食をとらなくても結構です。全く個人の自由にお任せします。それからお酒も、一応自由になっておりますが、本来は、夜遅くまで議論をして、興奮して眠れない時に少し飲むという程度で最初は許していました。最近は、ＲＹＬＡに行くと酒を飲まなければいけないような雰囲気も出ておりますが、その点は誤解しないように。いくら飲んでも結構ですが、明くる日の講義に差し支えることになれば、これはリーダーとして失格でありますから、あくまでも自分の責任において、自らを規律することを忘れないようにしていただきたいと思います。このように、何事も基本的には自由、そして自律に委ねているということであります。

それから、みんなで何かをしよう、例えば、みんなで講義を聴こうという時には、その時間を守っていただきたいと思います。時間というものは、万人の共有物であります。１人が時間に遅れるとみんなが迷惑を被ることになりますから、この点については講義の時、くれぐれも注意していただきたいと思います。

それと、このＲＹＬＡの特徴について申し上げておきます。カウンセラーの方のご紹介が先ほどありましたが、このＲＹＬＡでは、リーダーシステムではなく、カウンセラーシステムをとっております。カウンセラーはどういうことをするかと言うと、この３泊４日、皆さんと同じキャビンに入っていただいて、寝食を共にしていただきます。そして皆さん方のお話や悩みを聞く、いわば相談相手であります。したがってお

互いに心を開き、自由に話し合っていただきたいと思います。カウンセラーの方は、このＲＹＬＡが終った後も、ＲＹＬＡの同窓会やＲＹＬＡ卒業生の結婚式出席など、後々までのお世話をしていただくという人たちであります。どうか仲良くおつきあいしていただきたいと思います。

それからＲＹＬＡには、「思索の時間」というものがあります。このＲＹＬＡのプログラムの中では皆さんは一緒に時を過ごします。ただし、この「思索の地間」だけはそれぞれ１人ぽっちになって、自分自身を見つめ直す時間として設定しております。瞑想に耽っていただくのも結構ですし、何を考えていいのかわからない人は、何を考えたらいいのかを考えていただく。そのようにいたしまして、この玉のごとき時間を大切にしていただければと思います。

それとこのＲＹＬＡの核にある、一番大事なプログラムのひとつに「バズセッション」と「フォーラム」があります。ＲＹＬＡのＲＹＬＡたる所以は何かと言えば、まさにバズセッションとフォーラムと言わなければなりません。バズセッションとはどんなものかと言いますと、４～５人ずつの小さなグループに分かれまして、４時間くらい自由にディスカッションをしていただきます。それが済みますと、その意見を各班でまとめまして、夜7時から3時間のフォーラムを行います。そういう形をとりますから、みんなが必ず何か意見を出す仕組になっています。いきなり多人数でフォーラムをしますと、カラオケのマイクを離さない人と同じように、しゃべる人はいくらでもしゃべりますが、しゃべらない人は全くしゃべらない。したがって、みんなが必ず何か意見を出すために、４～５人の小グループに分け、そこでまず自由に意見を出してもらう。そしてその意見を、最後に夜のフォーラムでまとめていき、そこでまた自由にディスカッションするという形で、ＲＹＬＡに参加している人たちみんなが何かの意見をこの中に出すことができる、というシステムをとっているわけであります。実は、バズセッション４時間、それに続いてフォーラム３時間、合計７時間のディスカッションをしているところは、このＲＹＬＡ以外にはありません。ロータリーのプログラムの中でも、ディスカッションはせいぜい１時間半くらいであります。長くても２時間であります。それをこのＲＹＬＡは、合計７時間とっている。これはまさに、ＲＹＬＡのＲＹＬＡたる所以と言うにふさわしいプログラムであろうと思います。どうか皆さん方、あさっては頑張って意見を出して、自らの心を磨いていただきたいと思うわけであります。

そして最後に申し上げます。先ほど本山ガバナーがおっしゃっておられましたが、この余島にはすばらしい自然環境があります。これは今井先生が、今から50年前にこの島に来られて、まさに手作りで築き上げられた自然環境なんであります。したがって、皆さん方でこの自然環境を守っていただきたいと思うわけであります。それからこの島には、部屋に鍵がありません。私たちはお互いに絶対的信頼の世界に生きているわけですから、鍵などいらないわけであります。そのような形で、この島での生活を存分に楽しんでいただければと思います。

このＲＹＬＡの３泊４日で一番大事なことは、皆さん方が本当に心から仲良くなっていただくことでありまして、これこそＲＹＬＡの出発点であり到達点であります。心を開いて存分に話し合っていただきたい、そしてこの３泊４日で皆さん方の心の中に、何か灯が灯ることがあればという願いを込めまして、私の話を終りたいと思います。

ロータリアンの夕べ

RYLAセミナー顧問　深川　純一

深川でございます。

今日は「ロータリアンの夕べ」ということでございます。どんな話をしようかと思ったんですが、昨年も同じような話をしているかもしれません。ただ、今回は初めての方もおられると思いますので、ロータリーの基本思想や基本原理についてお話しておきたいと思います。

ロータリーの基本原理を説くためには、やはり、まず歴史の話から入っていかなければならないと思います。先ほど受講生の皆さんにもお話をいたしましたが、1905年２月23日にポール・ハリスという青年弁護士が３人の友達と共に「楽しいクラブをつくろう」と話し合いました。場所は、シカゴの下町のノース・ディアボーン街という所にユニティビルという建物がありまして、その711号室で会合を持ったのであります。３人の友達というのは、石炭業者のシルベスター・シール、洋服屋のハイラム・ショーレイ、鉱山技師のガスターバス・ロア。この３人とポール・ハリスが話をしたわけですが、ポール・ハリスはそこでひとつのルールを決めました。それは、クラブをつくるにあたって、ひとつの職種から１人だけ会員を選ぶという「１業種１会員」のルールであります。例えば、弁護士業界からは弁護士を１人だけ選び、２人以上は選ばない。八百屋さんの業界からは八百屋さんを１人だけ選ぶ、デパート業界からも１人だけ選ぶことにしたわけであります。

ではなぜこんなルールをつくったのかと言いますと、私たちが住んでいる資本主義経済社会というのは自由競争が原則であります。したがって自由競争社会では、同業者というのはお互いに競争相手がございますから、食うか食われるかの関係に立っております。したがって、同業者は、ある種の危機感を持ちます。「俺が潰れる前にあいつが潰れてほしい」というような、わけのわからない感情の虜にもなるわけであります。もっとも、仲の良い業界もありまして、競争の激しくない業界、例えば、弁護士業界や医師の業界などは競争が激しくないですから、皆さん仲良くやっておられる。それはそれでよいのですが、競争の激しい業界というのは、どうしても疑心暗鬼になります。また、同業者というものは、同じ業界におりますから、お互いにいいところも知っていますが、汚いところ、醜いところ、悪いところもお互い知り尽くしております。「あいつは俺の欠点を知っているな」という思いがありますから、どうしても心を開いて仲良くなることができない。そこでポール・ハリスは、ロータリークラブをつくるにあたって、まず同業者を排除して、ひとつの職種から１人だけ会員を選び、同業者がいないクラブをつくろうと考えました。洋服屋の業界からは１人だけハイラム・ショーレイを選び、石炭業界からは１人だけシルベスター・シールを選ぶという形で１業種１会員制のルールをつくったわけであります。したがって、ひとつの職種から１人だけ会員を選ぶというのは、同業者を排除してクラブの親睦を守り育てるための原則であったわけで、実はこれがロータリーの魅力の根源と言われているわけであります。そして実は、この原則がロータリーという組織の原点なのであります。

次に、ロータリーの基本原則といたしま

しては、もうひとつ重要なものがございます。「規則的例会出席の原則」というものでありまして、これは最初の1905年２月23日からちょうど１ヵ月経った３月23日、ロータリークラブの創立総会を開いた時に決められた原則であります。この規則的例会出席の原則の内容は、「４回連続して例会を欠席したる者は、自動的に会員資格を失う」というものであります。いわば「例会には必ず出席しなさい」というように、例会出席を強制する原則であります。なぜこのような原則を決めたのかと言いますと、実はこのような原則は、我々法律家の目から見ますと、あまり出来のよい原則ではございません。なぜかと言いますと、誰でも病気をします。それから突発的な事故もございます。病気をした時でも、とにかく４回続けて休むとお前はクビだよ、一切の例外は認めないよという原則は、ロータリークラブのような親睦団体のルールとしてはあまりにも窮屈であります。私ども法律家であれば、必ず例外を設けて但し書きをつけます。「４回連続して欠席したる者は、自動的に会員資格を失う。但し、正当な理由のある場合はこの限りにあらず」とするのであります。その限りにおいて、このようなルールは円滑に運用されていくだろうと思います。

それでは当時、シカゴのロータリークラブに法律家はいなかったのかというと、ポール・ハリスという立派な弁護士がいました。ではなぜ、ポール・ハリスは、但し書きをつけず、一切の例外を認めなかったのかと言いますと、それは、お互いに助け合って仲良く楽しいクラブをつくろうと誓い合っておきながら、４回も続けて欠席して互いの安否も気遣わない、そんな冷たい奴は俺たちの仲間ではない、というのが彼らの心情だったわけであります。要するにこの原則も、クラブの親睦を図るためのものでございました。このようにして彼らは、１業１会員制の原則と規則的な例会出席の原則によってクラブを運営し、次第に豊かになっていったわけであります。

ところが、１年くらい経った時に、反省がやってまいりました。それは、弁理士のドナルド・カーターという人に「ロータリークラブは楽しいクラブだし、みんなが豊かになるのだから君も入らないか」と入会を勧誘しました。しかし、カーターは「君たちは、たしかに豊かになって楽しいだろうよ。でも、ひとつの職種から１人だけ会員を選ぶ、そうすればクラブに入れなかった同業者は一体どうなるのか。それに、君たちは職業人の集まりだろう。とすると、職業を持っていない一般地域社会の人たちはどうなるのか。私たちはこの地域社会に生まれて、地域社会の中で育てられ、地域社会でお世話になって生きている。にも拘わらず、お世話になっている地域社会に何らの足跡も残さず、なんらの恩返しもしないで、ただ自分たちだけが隆々と栄えて、豊かになってこの世を去っていく、そのようなエゴイズムのようなクラブはおそらく永続性がないだろう。俺はそのようなクラブには入らない」と言ってきっぱりと断ったのであります。この話を聞いていたく反省したのが、ロータリー創立者のポール・ハリスでございました。「カーターの言う通りだ。クラブの行き方を変えようではないか」

と言って、それから、ロータリークラブは、みんなが仲良くなって豊かになることも大事だが、それ以上に世のため人のためのことも考えるクラブに変わっていったのであります。

そして1908年、ロータリークラブ設立から3年経った時、シカゴのクラブに「ロータリーの哲学者」と言われましたアーサー・フレデリック・シェルドンという人が入会しました。彼は、それまでポール・ハリスが世のため人のためと言っていたことを「サービス（奉仕）」という言葉で集約しました。これがロータリーの世界にサービス、奉仕という言葉が入ってきた最初の出来事でありました。彼は、親睦を担保するための原則であった、1業1会員制の原則と規則的例会出席の原則を、奉仕を担保するための原則に理論構成したのであります。すなわち、まず地域社会に存在する全ての職種の横断面をとらえます。そして、ひとつの職種から1人ずつ良質な会員を選び出す。そうすると、全ての職種に1人ずつ良質のロータリアンがいることになります。そして、それぞれの会員は、毎週の例会で自己研鑽に励み、奉仕の心を身につけます。例会を終えて自分の業界に帰った会員は、今度はロータリーから各業界に差し向けられたアンバサダー（大使）として、自分の業界にロータリー精神をアピールしていくわけであります。こうすれば、地域社会全体にロータリー精神が行き渡っていき、その結果として社会改良の実が上がるだろうと考えたわけであります。したがって、ロータリアンが選ばれていない職種がありますと、その職種にはロータリー精神が行き渡らないことになります。その限りにおいて、社会改良の実は上がらない、奉仕の実行性が欠落するということになるわけであります。このように1業1会員制の原則というのは、ロータリーの奉仕の実効性を担保する機能を持っているわけであります。もうひとつの重要な原則である規則的例会出席の原則は、単なる親睦のためにあるだけではなく、毎週の例会でロータリアンが自己研鑽に励み、親睦のアイデアのみならず、世のため人のためのアイデアもこの例会で交換していく、そのことによって、これを社会改良のエネルギーにする、という奉仕のための原則となっていったわけであります。

このようにして、1業1会員の原則と規則的例会出席の原則は、世のため人のための奉仕を目的とするロータリーの本質的な要素となりました。いわばこの2つの原則は、ロータリーという社会制度の核にある原則となったわけであります。ところが今、このロータリーの核と言われた原則が、崩壊しているわけでございます。皆さんご存知のように3年前の2001年の規定審議会、これはロータリーの立法機関と言われているところでありますが、そこでロータリーという制度の核であります1業1会員制の原則が廃止になりました。これは、今後のロータリー運動を考える上で、私どもにとっては、まさにショッキングな出来事でございました。1業1会員制の原則が持つ重要な意味は、クラブの中では同業者を排除して親睦を担保するところにあったわけであります。ところが、この原則が廃止になりますと、同業者がたくさんクラブに入ってきます。その結果、どういうことになるか。

親睦は自ずから崩壊していきます。ロータリーは「親睦なくして奉仕なし」と言われている団体であります。そのような団体にあって、親睦の支柱を失ったロータリーがはたして栄えていくのでしょうか。この1業種1会員制の廃止は、ロータリーが、21世紀の一番最初の年に決議した原則であります。2001年以来、ロータリーは1業種1会員制の魅力を失いまして、ロータリーの会員数は減少の一途をたどっています。この事態にどのように対処すべきでありましょうか。しばらくはその動向を、冷静に見定めなければならないと思うのであります。

1959年から60年度の国際ロータリー会長に、ハロルド・トーマスというすばらしい思想家がいまして、この人が「ロータリー・モザイク」という本を書きました。この本はハロルド・トーマスが、ロータリーが始まった1905年から1970年までの65年間にわたって、その時代に生きた人達から直に話を聞いて書き綴ったすばらしいドキュメントでありますが、この中で、彼は「1業種1会員制の原則は、ロータリーの核にある原則である」という意味のことを書いています。すなわち、この「ロータリー・モザイク」という本の、1970年代の章の冒頭におきまして彼は言っています。「我々多くの者は憂慮にたえないのであるが、ロータリーがその上に樹立されて、今日の安定と力にまで築き上げられたその基本的特質の2つが、次第に希薄にされていく傾向がある。この2つの原則とは何か。ひとつは1業種1会員制の原則であり、もうひとつは規則的例会出席の原則である」そしてハロルド・トーマスは言います。「この2つの原則は、単なる原則ではない。この原則のうちのひとつでも緩やかになっていくと、それはもはやロータリーとは言えなくなるような非常に大事な原則である」という趣旨のことを言っています。まさにロータリーの本質に根ざす、核にある原則だと言っているのであります。ところが、ハロルド・トーマスがいみじくも1970年代に予測したように、ロータリーの核が今、大きく揺れ動いているのであります。

1業種1会員制という核を失ったロータリーが、今後どういう方向に進んでいくのか。私たちはロータリー運動というものの本質を冷静に分析して、これからのロータリー活動のあり方を慎重に考えなければならないと思います。現在、ロータリーは全世界にクラブ数が31,000余りあります。ロータリアンの数は122万人を超えております。まさにロータリーは、巨大な組織になっています。ロータリアン、ロータリークラブ、そしてその連合体であります国際ロータリーが、全体としてひとつのロータリーという運動体を形成しております。そこでまず、運動体としてのロータリーとは一体何か、ということをを明らかにしておかなければならないと思います。

ここで、ロータリーを理解するために、どうしても心に留めていただきたいことがひとつございます。それは、ロータリー運動とは倫理運動だということであります。ロータリークラブというのは、寄付団体ではございません。福祉団体でも、慈善団体でも、ボランティア団体でもございません。どういう団体かと言いますと、ロータリアンに奉仕の心を授けて倫理を提唱していく

団体、すなわち一言でいえば「心の開発を第一義とする団体」であります。身近な例を申し上げておきますと、例えば、街角にたばこの吸い殻が落ちていたとします。ロータリアンとしては、街を美しくするためにそれを避けて通ることはできません。必ずその吸い殻を拾うだろうと思います。しかし、ロータリーは、その吸い殻を拾うことに本願はないよと言います。では、どこにロータリーの本願があるのかと言いますと、ロータリーというのは、そもそもたばこの吸い殻を捨てない人を育てるところに本願がある、というのであります。人を育てること、道徳を守る人間をつくること、そのことによって世のため人のために動いていこうとロータリーは言うのであります。見方を変えますと、それがまさにロータリーが倫理運動であるということを意味するわけであります。この点をとらえまして、ある学者は「ロータリーというのは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った、職業人のもっとも優れた倫理運動である」と断言しているのであります。この「倫理運動である」という視点を見失いますと、ロータリーの奉仕がわからなくなります。ひいてはロータリー自体がわからなくなります。殊に最近は、「職業奉仕がわからない」というロータリアンが増えてきております。これは、ロータリーが倫理運動であるということがわからないからであります。

ロータリーは倫理運動であるが故に、昔からいろいろな理念を提唱し、様々な原理を開発してまいりました。その中でも、これこそロータリーのロータリーたる所以だといわれるものに、実は職業奉仕があるわけであります。職業奉仕というのは、ロータリーだけにある実践類型でございまして、例えば、ライオンズクラブとかキワニスクラブのような一般的奉仕クラブには職業奉仕の概念はございません。この点をとらえまして、誰言うとなく感覚的に唱えられ出したのが「ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあり」という言葉でありましした。ただ、原理的にロータリーの実践類型を分析しますと、ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあるものではなく、その所似は実は「クラブ奉仕の実践にある」と言わなければならないのですが、この点の詳細につきましては今日は時間の関係で論ずる時間がございませんので、割愛させていただきます。

何はともあれ職業奉仕というのは、職業社会を生きていく上で非常に重要な実践でありまして、ロータリアンが現在の底知れぬ不況を生き抜いていくためには、職業奉仕に徹するほかないだろうと思うのであります。そこで、若干の事例を紹介しておきます。先ほど申し上げましたように、資本主義経済社会というのは自由競争が基本原則であります。これは先ほども申し上げましたが、同業者との関係では、まさに食うか食われるかの関係に、立たされるわけであります。そして競争相手がいるがために、ある種の危機感を持ちます。したがって、「自分が潰れる前にあいつが潰れてほしい」というわけのわからない感情の虜にもなります。また、同業者というのは同じ業界にいますから、お互いに悪いところや汚いところ、醜いところも知り尽くしています。「彼は俺の欠点を知っている」という思い

がありますから、お互いに心を開くことができません。さらに人間は、自分だけはとにかくまず栄えておかなければならない、いつ潰されるかもしれないという思いがございますから、人のことなど考えている暇はない。人のこと、すなわち倫理のことなど考えている暇はないといって、自分だけが隆々と栄えていこうとします。そのために失敗する例もたくさんあるのであります。

事例を出しておきます。ある下請け業者がおりました。親会社から自社の生産能力を超えるたくさんの注文を受けたので、下請け業者は喜び、銀行から融資を受けて第2工場、第3工場とどんどん設備投資をしていきます。ところが、その設備投資がある程度大きくなった段階で、親会社は注文をストップします。下請け業者は、設備投資はしたものの受注が減って、融資の返済に困り、親会社に泣きつきます。親会社は「それではお金を貸そう」といって資本参加をし、結局はその下請け業者を乗っ取ってしまうのであります。これは、企業が比較的短期間に大資本に成長していく過程でよく見られる、まさに恨みつらみのある物語なのであります。これは実は、親会社が悪いのではございません。下請け業者が自分1人で儲けようとしたところに問題があるのであります。自分の生産能力を超える注文が来たときに、同業者もいることですから「これ以上のご注文は同業者の方へどうぞ」と言っておればそれでよかったわけであります。しかし、そうは言うものの、企業経営者たるものは「自分の企業を安泰にしておきたい」という気持ちがございますから、注文が来ればどんどん儲けたくなります。そこのところがたいへん難しいわけであります。

これに反して、ある有名なお菓子屋さんがあります。ここではいつも午後3時頃になりますと、商品が全部売り切れてしまいます。有名なお菓子屋さんですから、作れば作るほどいくらでも売れるのでありますが、それにもかかわらず午後3時には売り切れる。ということは、午後3時に売り切れる程度の商品しか作らないわけであります。それは一体何故か。たしかに作れば作るほどいくらでも売れます。儲けに儲けることはできるます。自分の生産能力を越えて150%、200%の商品を作れば、たしかに儲かるかもしれない。しかし、粗悪品の出る可能性も出てまいります。ひとつでも粗悪品が出ますと、お客様にご迷惑をかけることになります。さらに一番大事な自分の信用を傷つけることにもなります。信用というものは、何億円という金銭をもってしても計り知れないほど価値のあるものでありまして、一旦失ったら取り返しのつかないものであります。したがってこのお菓子屋さんは、精魂込めて自分の生産能力の80%の商品しか作らないのであります。これが実は「職業倫理」なのであります。では、自分の生産能力を越える注文が来た場合はどうするのか。それは、同業者に譲るわけであります。これが「同業共存共栄の倫理」であります。以上の2つの事例でわかりますように、昔から人間がいたずらに金を求めて身を滅ぼした例は、枚挙に暇がございません。しかし、人間が心を求めて身を滅ぼした例は、未だその例を聞かないのであります。

要するに、同業者関係を貫く指導理念というのは、「同業共存共栄」なのであります。ロータリーの職業奉仕というのは、いかにすれば同業共存共栄の実を上げることができるか、という原理を説くものであります。この同業関係につきましては、ロータリーはかなり理性的な分析をして、自由競争の長所と短所を引き出すことに成功しています。まず長所は何かというと、自由競争は技術開発にはたいへん役立つのであります。新しい技術を開発することで、販売技術、製造技術、その他諸々の技術開発にこの自由競争は非常に役立つわけであります。しかし、反面、短所もあります。それは何かと言いますと、同業者がいますから、お互いに危機感を持ちます。そしてお互いに疑心暗鬼になります。この疑心暗鬼の要素を取り除かなければ、同業共存共栄を果たすことはできません。この疑心暗鬼を取り除くためにどんなことをすればよいか。それはロータリークラブの例会で良質なアイデアを開発し、これを業界に持ち帰って同業者とアイデアの交換をする必要があるだろうと思います。そのためにはまず、「同業組合」というものをつくりまして、共同でアイデアを開発しなければなりません。もちろん、同業組合が全国的になりますと、各地のロータリアンが参加してきます。そこでロータリアンたちは、手に手つないで同業組合の育成にリーダーシップをとらなければなりません。これが実は、職業を通じて世のため人のために奉仕することになるわけであります。同業者がアイデアの交換、アイデアの共同開発を行った上で、自由競争の武器でありますアイデアというものは、お互い平等に持って、自由競争は自由競争で一生懸命フェアにやっていこうではないか、これがロータリーの同業関係における基本的な図式でございます。私はこれを「武器対等の原則」と呼んでおります。自分だけが優れたアイデアを持って栄えていこうというのは、自分のことしか考えないエゴイズムの考え方でありまして、これは到底世のため人のためを考えているとは言えないのであります。同業者が手に手つないでアイデアの共同開発をしていく、そのもとになる良いアイデアは、ロータリアンがロータリークラブの中から持ってくるという図式なのであります。

では具体的に、どのような方法によるべきなのかという問題がございます。ロータリアンというのは、自由競争社会で職業奉仕を実践することによって必ず勝者になります。その勝者になる過程において、あるいは勝者になった後で、自由競争に敗れていった敗者の代弁者になって救済の手を差し伸べなければなりませんが、一体その方法とはどういうものかと言いますと、まず第一に、自分が成功して勝者になった企業経営上のノウハウを、自由競争に敗れていった敗者に公開することであります。第二に、職業人として為すべきこと、為すべからざることをお互いに誓い合う、いわゆる「職業倫理の提唱」でります。この2つが大事なことでありまして、第一の企業経営上のノウハウの公開につきましては、まず同業者間の疑心暗鬼、危機感を払拭して、同業者がお互いに共存共栄の実を上げるためには、企業経営上のノウハウをみんなに公開することが、避けて通れないことなのであ

ります。ロータリアンがクラブ例会に出席して、いろいろなアイデアを得ます。その諸々のアイデアを、自分の企業に適用します。そしてそれが成功したならば、その成功したノウハウを自分だけのものにしないで、同業組合に持っていって同業者に披露するのであります。「ノウハウを公開してしまったら、自由競争に敗れてしまうではないか」と考える人もいますが、実はかえって共存共栄の実が上がるのであります。それはどういうことかと言いますと、ここにいうノウハウとは、産業秘密的なことを言っているのではありません。企業経営上成功することが完全に立証されたノウハウのことであります。そのノウハウを同業者に披露するのであります。何故かと言いますと、もし成功することが完全に証明されていないものを公開して、それを適用した人がそのおかげで失敗したとしますと、これは他人にご迷惑をかけたことになります。ということは、世のため人のためにはならないからであります。したがって、成功することが完全に証明されたノウハウだけを、同業者のために公開していく。そして自由競争の敗者のために公開していくのであります。

具体的な事例を紹介しておきます。1954年から55年の国際ロータリー会長でありました、ハーバート・テーラーという人がいます。この人は、1932年に倒産したアルミ食器会社の再建を依頼されました。そして約10年後には、倒産した会社を一流企業に育て上げたわけであります。それを見ていたシカゴ商工会議所の会員たちは、ハーバート・テーラーに対して「君はすごいことをやったね。あの倒産した会社を10年で一流企業に育て上げた。何か秘密があるだろう、その手の内を明かせよ」と言いました。するとハーバート・テーラーは「実は４つのテストを開発して、みんなで力を合わせて頑張ったのだ」と答えました。そこで商工会議所の人たちは「その４つのテストというノウハウは、君が成功したことによって完全に立証されている。それをみんなに披露しようではないか」と言って、商工会議所傘下の起業家たちにそれが公開されたわけであります。これを見ていたシカゴロータリークラブの会員たちは、「ハーバート・テーラーはうちのクラブでは何もしないで、商工会議所ではあんな立派なことをしている。その４つのテストの版権をロータリーに譲らないか」ということになりまして、1954年にハーバート・テーラーが国際ロータリーの会長になった時に、それを契機に４つのテストの版権を国際ロータリーへ委譲したわけであります。これは商工会議所からロータリーへ逆輸入された例でございますけれども、本来はロータリークラブの中でそのようなアイデアを開発して、それを同業共存共栄のために同業組合の方へ公開していく、そしてさらに商工会議所で公開する、これがロータリーの奉仕の図式なのであります。

ノウハウの公開の事例をもうひとつ紹介しておきます。千葉医大の中山恒明教授は、従来は死亡率90％以上といわれていた食道ガンについて、２年間訓練された外科医であれば誰でも簡単に手術できる方法を開発しました。そしてそのノウハウを、誰にでも教えたのであります。自分の大学の学生

にしか教えないなどといった姑息なことは言わないで、誰にでも教えました。外国の教授にも教えました。その理由は、自分1人で1日100人の患者を手術することはできない。しかし、このノウハウを100人の外科医に教えておけば、1日に100人の患者を救うことができるではないか。「医」は公のものであって、「私」にすべきものではない。これが中山先生の理由でありました。これはプロフェッション＝聖職者の倫理であります。ロータリーでは、職業を「プロフェッション」と「ビジネス」、すなわち専門職業人と実業人とに分けております。プロフェッションというのは、神様から与えられた客観原理を持って世の中の人たちを救済していく、これは、もともとは中世キリスト教神学から分かれた理論であります。キリスト教神学の分かれである医学、法学、哲学など全てを含む大学のことをUniversityというのは、ここから来ているのであります。このようにプロフェッションというのは、中世神学に淵源を持ち、神様から与えられた客観原理を持って世の中の人たちを救済していくことを第一義とする職業をいうのであります。この中山先生の考え方は、まさにプロフェッションの倫理、聖職者の倫理であり、それを大悟徹底した人の言葉であると思います。ついでながら中山先生は、「医者になってほしい人は、頭のよい人であるに越したことはない。しかし、剃刀のように切れる鋭い頭脳の持ち主よりは、動物や草花を愛する、人間性豊かな人に医師になってほしい」とも言っておられます。これはまさに、倫理的な人間に医者になってほしいということでありまして、人を救うことを職業の第一義とする聖職者の倫理をもって自分の職業をコントロールしていくためには、欠くことのできない要素ではないかと思うのであります。

何はともあれ、同業共存共栄のためには、ノウハウというものを公開すべきであります。同業が栄えるということは、必ず自分も栄えることになっていくのであります。したがって、自分が栄えるために他の同業者が潰れてほしいという論理は、ロータリーでは通用しないわけであります。事例を紹介しておきます。随分古い話になりますが、西ドイツがまだシュミット首相の時代に、首相が破産寸前のイタリアを救うために、返済の見込みのない20億ドルの借款を与えようという提案を西ドイツの議会でしたことがあります。議会は猛反対をしました。「そんな返済の見込みのないところに、20億ドルの借款を与えてはならない」というわけであります。しかし、シュミット首相は、「イタリアがもし崩壊すれば、それはヨーロッパ共同体の崩壊を意味する。ヨーロッパ共同体が崩壊すれば、ドイツも危ない。したがって、ドイツが生き延びるためには、イタリアを救わなければならない」という論理をもって、議会を説得したと聞いております。やはり、他人を生かしてこそ自分の生きる道もある。ロータリーの説く「共存共栄」というのは、かなり厳しいところがありまして、その点も心に留めておかなければならないだろうと思います。相手の身になって考えることが非常に厳しいということ、そして、そのことこそがこれからの時代を生き抜いていく道となると思うのであります。

要するに、自由競争に甘えの論理はありません。したがって、自由競争を前提とする職業奉仕にも甘えの論理は毛頭ございません。時々誤解をして、「奉仕」というある種のロマンティシズムに酔いまして、競争意欲をなくしてしまう人がいます。即ち、自分はロータリークラブを退会して、自由競争で思いきりお金を儲けた後、再びロータリークラブに入って奉仕をするという人がいますが、これは職業奉仕というものを完全に誤解しているものであります。職業奉仕というものは、同業者との関係では、まさに食うか食われるか、闘争の論理で支配された世界なのであります。甘さは一切ございません。したがって、この闘争に勝とうと思えば、職業奉仕に徹するほかありません。したがって、職業奉仕のわからないロータリアンは、自由競争に敗れていくだろうと思います。

このように、自由競争というのは非常に厳しいものであります。かつてわが国は、バブル経済によって莫大な資本を投下しました。そしてバブルは崩壊しました。バブルが崩壊した現在、この投下資本をどのようにして回収していくのか、これから何年にもわたって苦しまなければならないだろうと思います。そして今、生産は過剰であります。発展途上国の労働賃金は、わが国に比べて非常に安いのであります。どのようにしてこの自由競争を勝ち抜いていくのか、それは職業奉仕に徹することであります。まず、ロータリアン同士が仲良くなること。そのためには、クラブの中で同業者を排除しなければならないわけであります。同業者がいては、クラブの中で仲良くすることができないわけでありますから、どうしても同業者を排除しなければならない。そのために1業種1会員制の原則があるのであります。そしてクラブの例会で、異業種のロータリアンたちがお互いに知恵の交換をします。医者、弁護士、デパートの社長、皆さん発想が違いますから、お互いに他の発想、他の知恵に学び合うことができるわけです。そのためにはまず、例会に出席しなければなりません。したがって、4回連続して例会を欠席すれば、自動的に会員資格を失うという「規則的例会出席の原則」が出てくるわけであります。

このようにいたしまして、ロータリアンがお互いに知恵を持ち寄って助け合うところを、「ロータリークラブ」というのであります。最近、ロータリーを辞めていく人がたいへん増えております。これは、職業奉仕がわからないからであります。本当に職業奉仕が身についておりますと、ロータリーを辞めることはないだろうと思います。まさにロータリーの魅力の虜になって、隆々と栄えていくだろうと思うのであります。

自由競争を生き抜いていく時に、企業経営上のノウハウを教え合う、そういうことをしながら自由競争に敗れていった人たちを救済する。そのようにしてお互いに栄えていく、つまり共存共栄の道を模索することによって、初めて自分は一私企業の社長にとどまらず、世のため人のための支柱にもなっているのだという自覚を持つことができるわけであります。そして、その時こそ初めて、自分のためのものである職業が、人のための奉仕になるのであります。これが「職業奉仕」であり、ここに実は人生の

意義があるのでありまして、自分のことだけしか考えない人生には、何らの意味もございません。自分も儲ける、しかしその儲ける考え方は同時に、周りの人たちにも儲ける策を作っていく、そのような形になって初めて、二度とない人生を意義あらしめることができると思うのであります。ここには甘えの論理は一切ありませんので、注意を要するところであります。

そして第二に、倫理の提唱がございます。同業者の共存共栄のためにはノウハウの公開も大事でありますが、その他に、職業人が為すべきこと、為すべからざることをお互いに誓い合うという倫理の提唱が必要であります。ロータリアンが業界を浄化して共存共栄の実を上げるためには、ロータリアンがお互いに倫理を提唱しなければならない。これを地域社会の職業人に対して提唱する必要があるわけであります。これは、ロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面でございまして、職業を通じて社会に奉仕する典型的な事例であると思うのであります。ロータリークラブの例会というのは、良質な職業人の発想の交換、自己研鑽の場でございます。ロータリアンは発想の交換、自己研鑽によって、よりよき自分というものを自覚していくわけでありますが、それぞれは企業経験が違います。デパートの社長、弁護士、医者、皆企業経験が違いますから、その違いを中心にしながら、企業経営の改善という形につなげていきます。そこで、それぞれ違う企業経営観の総和をとらえてみますと、地域社会に存在する全ての職業に適用されるべき理想的な職業観、職業倫理を宣言することができるわけであります。最初にこれを宣言しましたのが、今から随分昔の1915年、サンフランシスコの国際大会での決議におきまして、「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」、別名「ロータリー道徳律」というものを採択しております。この道徳律は11ヵ条でありますが、昭和3年に大連ロータリークラブの古澤丈作さんという人がこれを5ヵ条に書き改め、そして宣言したのが「大連クラブのロータリー宣言」であります。大連ロータリークラブでは、毎週例会の始めにこの5ヵ条の宣言を朗読いたしまして、それから例会を始めたという記録が残っています。日本ロータリーの最初のガバナーでありました米山梅吉先生が、昭和4年の日本最初の国際ロータリー第70地区大会におきまして、「この古澤さんこそロータリアンの鑑である」と激賞されたという記録が残っております。このロータリー宣言が、戦前の日本のロータリアンの職業奉仕のバックボーンになっていたということは、まぎれもない事実なのであります。戦後の日本のロータリーでは、東京浅草ロータリークラブの玩具職業人の倫理宣言というのがございます。ごく最近では、平成7年に仙台青葉ロータリークラブが宣言した職業宣言がございます。

ロータリーというのは、ひとつの思想であります。それは、今の倫理の提唱にも関連しますので、ロータリーの基本思想についてちょっと触れておきたいと思います。先ほど申し上げました、サンフランシスコ国際大会の決議によりまして、ロータリーの道徳律が採択されました。実はその第6条は「アフターサービスの原則」を規定し

ています。どういうことを書いているかと言いますと、「ロータリアンたる者は、自分がお客様のところに納めた商品については、徹底的に責任を負わなければならない」という趣旨のことを規定しています。例えば、私がこの時計を売ります。すると1年間は、自然の故障については無償で修理するという保証がつきます。では1年と3日経って故障したらどうするか。ロータリアンであれば、もちろん無償で修理をすると思います。なぜかと言うと、保証というのはお客様との保証契約によって成立するものでありまして、それは法律の世界であります。したがって保証契約上は、1年を経過すれば有償で修理すればいいわけです。しかしロータリーの世界というのは、法律の世界ではございません。これは、倫理の世界であります。したがって、法律の世界では人と人との契約であっても、倫理の世界ではそれは神様との契約を意味します。人と人との契約は、契約期間の満了などにより終了します。しかし、神様との契約は一生涯続くわけであります。このように考えますと、例え1年の保証期間であっても、1年6ヵ月後の故障であっても、ロータリアンは無償で修理するだろうと思います。では3年後、10年後であればどうか。ある人は無償で修理するかもしれません。ことは法律の世界ではなく、倫理の世界の問題でございますから、要はその人の倫理観、世界観によって決せられるという問題になってくるわけであります。

そして、このような倫理の世界の問題として職業を営んでおりますと、たしかにわずかな修理代のことではございますけれども、「あの店で買えば大丈夫だ」という信用が確立されてくるわけであります。すなわち、売買取引が、単なる時計と金銭との交換だけではなく、それと同時に満足と感謝という目に見えないものが交換されることにより、やがて商人というものは信用という保護膜に守られて、どのような不況期にも潰れない強靱な体質の企業を作り上げていくことになるとロータリーは説くわけであります。

では自然の故障ではなく、重大な過失によって時計を壊した場合はどうか。時計屋さんは、一目見れば自然の故障かどうかはすぐわかります。しかし、その場合でも、黙って修理をしてあげれば、お客様の方で恥ずかしく思うだろうと思うのであります。「こんなことをするべきではなかった」という反省をします。「この次に買う時は、この店でまた買おう」ということになってくるわけであります。また、友達にもこの店を紹介しようとなります。お客様に「こういうことをしてはいけないな」と反省させる、それが実は職業を通じて世のため人のために倫理教育をしている、ということになるわけです。

それではさらにもう一歩進めます。お客様に納めた商品、例えば機械に欠陥があることが判明した場合、その全ての機械をお客様から回収して、完全な商品に修理して再びお客様に届けるという作業を実行しますと、会社が完全に倒産してしまうということが計算上明らかになった場合、どう対処すべきかという問題がございます。実はこの問題は、ロータリーの中でも意見は真っ二つに分かれております。ひとつの意見は、

倒産することが明らかになっても、やはりロータリアンたる者は、そのアフターサービスを実行すべしと説くわけであります。しかし、これは大問題であります。なぜなら、それを実行して、計算通りに会社が倒産してしまったらどうするのか。会社の社員も家族も、路頭に迷うことになります。株主に対する配当責任も果たせません。事と次第によっては、商法上の特別背任罪になるかもしれません。奉仕も何もないではないか、というのが一般のロータリアンの声であります。しかし、実は、ロータリーの中では、いろいろな事例がありまして、このようなことを実行した人は全て大成しているわけでございます。事例を紹介します。ドーナツを作る機械を製造販売する会社がございました。ある時、納品した機械に欠陥が発見されました。それを全部回収し修理して、再びお客様のところに届けるという作業をいたしますと、計算上は確実に会社が倒産することが明らかになりました。その場合どうしたか。この社長はロータリアンでございましたので、あえてその作業を実行したのであります。人と人との契約は、事情が変わったとか、期間満了などの理由によって解約することができます。しかし、神様との契約は破ることができないわけであります。そこで、欠陥のある機械を全部回収いたしまして、銀行融資を受けながら四苦八苦して何とかその作業を成し遂げたわけであります。その後に一体何が待っていたか。その会社は絶大なる信用を持って報いられまして、やがて世界的な企業にのしあがっていったのであります。

もうひとつ事例を紹介しておきます。昔、伊勢湾台風がありまして、名古屋地方が水浸しになりました。あるミシン会社の社長が「水浸しになったお客様のミシンを、全部無償で修理しようではないか」と言いました。ついでに自分の会社のミシンだけでなく、ミシンを使っているというご縁があるのだから、他社や外国製のミシンでもよい、とにかく全て引き取って修理しようではないかと言ったのであります。社員は「そんなことをしたら会社が倒産する」といって大反対したのでありますが、その社長はあえて「少なくとも自分の工場で作ったミシン、それに御縁のあるものは救済しなければならない。そういう社会的責任がある」と言って、たいへんな苦労をしながらそのアフターサービスを成し遂げたのであります。その後でその会社は、一流の企業にのしあがっていったと言われています。

「振り下ろす太刀の下にこそ地獄なれ、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」という諺がございます。また「虎穴に入らずんば虎児を得ず」という言葉もあります。ロータリーはそこのところを見ているわけであります。ロータリーは、計算上赤字になって倒産するということを「机上の空論」と言っております。ロータリーは行動の哲学でありますから、まず実行してみよ、と説くわけであります。ただし、行動は、単なる行動では困ります。理論に基づくものでなければなりません。理論に基づかない実践とは、まさに方向舵の取れた飛行機みたいなものでありまして、どこに飛んでいくかわかりません。糸の切れた凧と同じであります。また反面、いかに高邁な理論を説いても、それが実践されなければ絵に描いた餅、

燃えない石炭みたいなものでございます。したがって、理論と実践との調和が肝要なのであります。要するに、アフターサービスを完全に実行して初めて、企業というものは発展できるのでありまして、また、それが業界の見本ともなって業界を改良していくことにもなる、とロータリーは説くのであります。そしてここにも、職業を通じての奉仕の実践例を看取ることができるのであります。

このような職業奉仕の考え方の根拠規定は何かと言いますと、先ほどご紹介申し上げました、1915年のサンフランシスコの国際大会で採択されたロータリー道徳律第6条「アフターサービスに関する規定」であります。この規定の根底に流れる思想は、1911年のミネアポリスロータリークラブの初代会長でありました、ベンジャミン・フランクリン・コリンズの提唱しました「Service, Notself」という考え方であります。彼の説くところは、ロータリーの奉仕というのはself=自分をnot=否定する、つまり自分を犠牲にしてこの宇宙を支配する神の秩序体系のもとに帰依しなさい、それがServiceだというのであります。まさにこれは、中世キリスト教神学の思想以外の何者でもない、優れて宗教的な標語でありました。したがって、アフターサービスにつきましても「ロータリアンたる者は自分の為すべきことを為して、美しく散れ」と説くわけであります。しかし、散ってしまっては何ともならないではないかというのが、一般のロータリアンの考え方でありました。そもそもこのような思想が、ロータリーの世界に通用したのかと言いますと、この標語は1911年、ロータリーが生まれてから6年経ったオレゴン州ポートランドの全米ロータリークラブ連合会の大会で採択されているのであります。実は、初期ロータリーの指導者たちのほとんどは、この「Service, Notself」、つまり自己犠牲がロータリーの奉仕だという考え方の世界に生きた人たちでありました。その名前を挙げることは時間の関係で割愛いたしますが、要するに、この標語は宗教的な色彩を非常に強く持っておりました。

しかし、ロータリー創始者のポール・ハリスや、「ロータリーの哲学者」と呼ばれたアーサー・フレデリック・シェルドンなどは、この考え方をとっていません。アーサー・フレデリック・シェルドンは、「ロータリーは宗教ではない。ロータリーはお寺ではないのだから、そんな宗教的なことを言ってもらっては困る。自分を犠牲にするというのは行き過ぎだ。自分を否定する（not self）のではなくて、自分の上に奉仕を考えよう（Service above self）」と提唱したのであります。この思想は、1921年頃に提唱されました。これが実は、現在のロータリーの第一のモットーになっているわけでありまして、実業倫理の思想とされています。思想的には全く違う思想が、ロータリーの世界では併存しているということが言えるだろうと思うのであります。

こうして1921年頃にService, Notselfの思想は改正されましたが、ではそのNotself思想がなくなったのかというとそうではありません。ロータリーにはいろいろな思想が併存しておりまして、1922年に国際ロータリーができた時、このService, Notself

の思想に基づく「ロータリー道徳律」をもって、ロータリーの現行法則たるべきものと定めると規定しています。（ＲＩ細則大16条）したがって、実業倫理の世界に属する標語、それから宗教的な世界に属する標語の２つが、ロータリーの世界では共存していたわけであります。お互いに自分と異なる思想を排斥することなく、互いに他の思想に学び合いながら共存していく、それがロータリーの思想の世界なのであります。

1922年にこのService，Notselfに基づく道徳律が、国際ロータリーの細則第16条で、全世界のロータリークラブに対して規範としての効力を持つことになったわけであります。そして一方では、これに全く反対する思想も併存していたわけでありますが、この規範的効力を持ったロータリー道徳律が1980年に廃止されました。それはなぜかと言うと、あまりにその内容が厳しすぎるということと、もうひとつは、この道徳律の第11条に、キリスト教の黄金律が規定されておりました。たしかに、ロータリーは当初キリスト教の世界から生まれましたが、その後イスラム教や仏教などあらゆる宗教の世界に蔓延し、全世界にロータリークラブができていきました。したがって、ロータリー全体を支配するこの道徳律は、キリスト教的色彩が強すぎるではないか、廃止すべきだという提案が規定審議会に何度もあったのでありますが、「そうは言うものの、これはすばらしいものである」ということで、なかなか廃止されなかったのであります。しかし、ついに1980年にロータリーの規定審議会で廃止になりました。

では廃止になったら、Service，Notselfの思想はなくなったのかというと、そうではなかったのであります。1980年は今井先生がガバナーの年でありますが、私はその時に地区の職業奉仕委員長をしておりました。そこで早速、各クラブに対してアンケートをとりました。「今般、この道徳律の根拠規定であるＲＩ細則16条が廃止になった。皆さん方はこの道徳律をどう思うか」という質問をしたところ、地区内の約58クラブのうち９クラブから「我々は未だにこの道徳律を、自分たちの守護神としている」という回答を得ました。それから10年経った1990年に、私はガバナーになりまして、各クラブを公式訪問で回った時、公式訪問報告書の第１ページを開いたところ、そこにこの道徳律を印刷しているクラブが数クラブございました。そういうこともありますから、自己犠牲の奉仕というのは、未だに強く生き残っているということを申し上げておかなければならない。

ロータリーの思想の世界というのは、「Service，Notself」「Service above self」が基本となって、いろいろな人たちがいろいろな思想を提唱しました。共産党であれば、ひとつの思想以外は全て排除します。しかし、ロータリーは、いろいろな思想、全く違う思想がお互いに他を排斥しない。そして共存共栄の実をあげながら、お互いに他の思想に学び合いながら、現在に至っている。まさに99年の歳月を経て、滔々と流れる大河の如く今日に至っている、これがロータリーにおける思想の潮流と言えると思います。したがって、ロータリー99年の歴史のどの時点を切ってみても、ロータリーは一枚岩ではございません。たくさんの思想

の混在がみられます。そういう現象をとらえまして、あたかも満天に輝くきら星のごとく、ハロルド・トーマスが「ロータリー・モザイク」と称したように、いろいろな思想がロータリーの世界にはちりばめられているのであります。これがロータリーの思想の世界だということを申し上げまして、このあたりで私の話を終えておきます。ご静聴ありがとうございました。

オープニングパーティー

キャビンタイムと食事

「How to say からHow to do へ」

長崎大学教授
溝田　　勉 氏

〈溝田　　勉氏〉
昭和19年生まれ。東京大学大学院教育学研究科修了。昭和45年日本学術振興会国際事業課、昭和49年文部省大臣官房調査課を経て、昭和50年代にはユニセフ、ユネスコ等の国際連合関係の職を歴任。また、昭和60年からは国際連合広報局およびユニセフ駐日事務所副代表を務める。平成７年より長崎大学医歯薬総合大学院・熱帯医学研究所主任教授。また日本熱帯医学会、日本国際保健医療学会、日本学校保健学会、さらに国際政治学会会員。

みなさんおはようございます。この形のマイクを持つと、いつもカラオケスタイルになってマイクを離さなくなるので、あちらの型にしようかなとも思ったんですが（笑）。音が響くものですからこれで失礼いたします。

ただ今ご紹介いただきました溝田勉と申します。昨日初めてこちらに参りました時には、まだ「春は名のみの風の寒さや」かとも思いましたけれど、今日あたりからこの余島でも一気に桜が咲くのではないでしょうか。すでに今朝から、このあたりにも桜の蕾が出てきているような気が致します。皆様との出会いを心から感謝したいと思います。世の中の物事は、準備も、途中も、成果も、世代や性別、趣味、専門を越えて、友達としての人間関係で成り立っていくと思いますので、皆さんお一人お一人の方々との今日の出会いに感謝したいのです。

私は、今日の午前中のお話を担当させていただく者でございます。先ほど詳しくご紹介いただきましたように、小学生の頃から例の「備えよ常に」のボーイスカウトに関係していたり、今で言えばＮＰＯ、ＮＧＯの関係ですが当時は社会教育活動と呼ばれた、青少年活動ということに夢中になっていた人間です。今回、こうしてロータリー松山地区ＲＹＬＡ委員をされている高岡さんや、ＲＹＬＡ委員長の猪野さんのご紹介で参りました。普段は東京と九州、特に長崎や福岡との間を行き来しておりまして、ちょうどこの上空を飛んでいるわけです。今日は高松経由の船でこちらに伺っております。

目的は３つあります。その第一は、私が言うのもおこがましいのですが、自身多少変わった経歴で今日までまいった事にあります。その人生経験あるいは仕事の経験の

中から、今後若い皆さんがさらに活躍していかれる時、どのように自分を発見し自分を伸ばしてゆくかについてのご参考になればと願っております。

２つ目は、私がこれまで仕事をしてきた中で、実はロータリーという組織にはたいへんお世話になっているのです。世界的なＮＧＯのひとつであります。具体的に申しますと、ユニセフという国際連合の「児童基金」で私は長年仕事をしていたのです。その時にＷＨＯ（世界保健機関）とユニセフが力を入れていた感染症対策のひとつに、ポリオ・プラス、すなわち世界の子どもたちからポリオをなくそうという活動がありました。感染症と言えば、ＳＡＲＳや鳥インフルエンザ、ウェストナイル、デングウィルス、それからエイズなど沢山あります。そういったことに頑張っている時、ロータリー・インターナショナルが大変強力なサポートをしてくださった。しかも宗教的信条とも思えるような使命感で、国際組織をいろいろな面で助けてくださったわけです。国連は日本の政府機関以上にＮＧＯ的な性格を持っております。ユニセフや難民事務所、ＵＮＤＰなどでは皆さんに今後大いに活躍していただきたいのです。ひょっとしたら、日本政府の役人になる以上に生き甲斐、やり甲斐があり、しかも男女差別のない職場であります。ぜひ今日のような話をきっかけにそちらの方にも関心を持っていただければよろしいかと思います。そのように、ロータリーはメンバーお一人お一人が縁の下の力持ちとなって、国際組織に大きな影響を与えています。また、国連には「経済社会理事会」というものがありまして、「安全保障理事会」に並ぶ大きな組織なのですが、ロータリーは当「経社理」でちゃんと発言できる資格を持っている組織でして、ロータリーに対し常時感謝するとともに、さらに活躍していただきたいと願っております。

私は四国の松山出身で、お大師さんですから真言宗徒です。クリスチャンではないのですが、そういう宗教の境を乗り越えて取り組んでいただきたいという気持ちです。また、私は東京で学生時代に箱根の東山荘でＹＭＣＡのユースワーカーの仕事をしていました。その東山荘が関西地区ではひょっとしたらこの余島にあたるのではないかと思います。山に囲まれた陸地内部と違って、関西にあるこの余島は、途上国も含めて世界に開かれた場所ではないかと思います。ここを皆さんのおへその在る場所、再スタートの地にしていただけたらという気持ちです。お伺いしますと瀬戸内には、「与島＝Given Island」と「余島＝Extra Island」があるそうですね。余談ですが、私は松山市郊外の「余土」という所の生まれでございますが、同じ余りでも訓練の仕方によってご自分たちの活躍の場は素晴らしく展開されるのではないでしょうか。

第３の目的について。私の「溝田」という姓はこの小豆島にルーツがあるようです。さらに言いますと、日本の中世から近世にかけては海賊の仲間の船大工だったようでして、この瀬戸内海周辺にしかこの溝田という姓はないようです。ちなみに東京で電話帳を繰ってみても、私以外には３軒しか名前がないほど、非常に珍しい姓なんです。「溝口」というのは地名もあるし姓にも多

いのですが、「口」の中に十字架を背負っている私なので災いの元を避けたい。(笑い)そのルーツの地を訪ねるために参りました。

潜在意識を大切にする

学生運動が始まる前に、私は東大の男性合唱団を指揮をしていたのですが、練習をさぼっていてクビになりました。青少年活動に熱心になり過ぎてクビになったわけです。その時にロータリアンのご指導を受ければ良かったなと思っております。時々、インターアクトやローターアクトの研修に参加させていただいておりました。今日こうして皆さんと対話するような感じで青春時代を過ごしたのです。何が言いたいかと言うと、申し訳ないけど学校はあまり役に立たなかった。学歴や経歴ということではなく、実際に学校の中でどう生きたかということが、今を生きている充実感にもつながると思います。

学校卒業直後から青少年活動の全国組織「伸びゆく青年の会」をつくりました。私は東京で、そして今回ご紹介いただいた高岡さんたちには松山の方で頑張っていただきました。「伸びゆく青年の会」ができてから5年ほど経った時、「ユース開発協会」という財団法人をつくりました。今も東京日比谷に本部事務局があります。私はバッヂ類をつけるのは大嫌いなんですが、唯一この「㈶ユース開発協会」のバッヂは自らの意識用につけております。今も東京駅舎の中2階で毎週1回「朝飯会」活動をしていまして、これまで1800回以上続いています。それ以前からも活動していましたから、通算すると2000回以上続いていることになります。つまり申し上げたいのは、組織に属しているとか、肩書きがどうこうというのではなく、その中でお互いがどう輝いているか、どうやって自分の生き様を見直したり、あるいは目標を持ってどう努力するかこそが大切だということです。

「思考が物事を決定する」という言葉があります。「気付かないうちにやっていた」という言い方もありますが、それも人間は必ず潜在意識の中で考えていたことなのです。例えば先ほど「潜在能力の発揮」という言葉が出ました。その場合は南極海に浮かぶ氷を思い浮かべると良い。北極の氷はいろいろな形をして浮遊していますが、南極海には台状の大型の氷が浮かんでいて、この水面上の部分が顕在意識の世界と言えます。外に現れた、目に見える氷が浮かぶためには、水面下にその何十倍もの氷があってこそ存在する。この水面下の氷が潜在意識の世界です。このことを大事にして、How to doを考えていただきたい。夜寝るとき、喧嘩したり恨んだり、嫉んだりといったマイナス思考はやめて、仮に何も出来なくても良いからこうしたい、かくありたい、こういう目標を作ってみようと考えれば考えるほど、楽しいものなのです。年配の方なら青春時代の初恋など思い出してみるとか、寝る直前に前向きの事ばかりを思い浮かべると、先ほどの「無条件の暗示習性」が働きます。人間の神経生理というのは無条件にこの状態になる。そして朝起きると、「今日の私は信念が強い」という思いを確かめる。最近さぼっているんですが、中村天風なる人物が私に手鏡を持たせて「これを持って寝ろ。それを2～3ヵ月続ければ、お前

は信念が強くなる」と説いた。ヒンドゥー教の人たちはこの眉間のところをチャクラと言いまして、鏡に映った自分を「お前」と二人称で呼ぶのです。それを数ヵ月続けるとそれだけで物事に対する考え方が積極的になる。これがHow to doの基本であります。そんなに難しいことではないし、宗教でもない。禅の修行に似ていますが、皆がいつも特別な静寂を享受できる環境に恵まれるとは限りません。日常で活動する時、行動の中でも特に言葉には気を付けろと言います。滑った、転んだ、喧嘩をしてやられたなどという事ではなく、言葉遣いに注意する。そしてハッタリやうそ八百では困るけど、自分が本当に考えて訴えたい事だったら、仮にちゃんとした言葉にならなくてもそれがわかってもらえるということです。やはり情熱、よく言えば「志し」というものだと思います。そして50歳、60歳、70歳になっても凄い若さを保っているロータリアンのような方もいますけど、20代、30代と50代、60代以降ではやはり身体の生理が違う。吸収力にしても、「鉄は熱いうちに打て」という言葉のある如く違うわけです。

こうしたことは、周りから妙な人と思われても実践し続けると、心身の中でも特に心の持ち方が変わる。税務署職員も来ません。(笑) 例えば、今日こうして皆さんと対話をする場合でも、「眠くてしょうがない」と思いながらこちらに来ていたら、声のハリがないのではないかと思います。皆さんにもそういう経験はおありだと思います。ロータリアンの高岡さんから「ここには海があってきれいだよ」と聞いていたものですから、朝6時半頃にちょっと出掛けてみたんですが、本当に気持ちが良い。やはり自然に触れますと、身体そのものが反応しているのではないかと思いますが、これは目に見えない。いわゆる「条件を設定すれば再現可能」ということにこだわらなくても良いわけです。ですからタイミングというか、良い時、良い場所で行う、その一番の中心は人との出会いだと思います。私が言うまでもなく、ここへ来た経緯は十人十色、百人百様があると思いますが、これは一期一会で大変なことだと思うのです。こういうチャンスに皆さんとこうしてお会いするということは、予め計画されてなかったことですね。ところが実は、潜在意識の中では皆さんに積極的な気持ちがあったからであって、ある方から参加を勧められた時でも、自分が始めから拒否するネガティブな態度だったらこの話を軽く聞き流していたでしょうね。しかしそうではなく、御一人御一人が前向きに聞けるというチャンスを実際に生かしてここに来られたわけです。ですから、ぜひともそのチャンスを生かしていただきたいと思います。

「現場主義」と「人材の活用」

先ほどお話したＪＩＣＡ、今は国際協力機構という呼称で現在、緒方貞子さんが理事長を務めておられます。彼女は今いろい

ろな役職を抱えていまして、実際はＪＩＣＡの仕事どころではないんですが、この８月に長崎に来ることになっております。半分を政府、半分を民間団体で行う今のＪＩＣＡの使命について、彼女は２つのモットーを挙げております。そのひとつは「現場主義」。国内では今、三位一体改革が叫ばれ、地方分権に向けた改革が推し進められています。それぞれの現場を大切にし、現場の声を聞こうということです。ＪＩＣＡであれば途上国の開発に協力しているわけですから、途上国の実情がわからないで、こちら側が考えたことだけを正しいとして推し進めたのでは、それこそお金をいくら使っても効果がありません。効率と結果を考え、選択と集中をしようという立場から、現場を大切にすることをモットーに掲げています。

そしてもう一つが、これからお話する「人材の活用」です。先程からくどいように言っていますが、物やお金だけを支援してきたのがこれまでです。これからは人材というものをもっともっと活用しなければならない。お題目としては何時も言われて来ました。聞いたことはありませんか。政府の広報などで唱えている「国民参加型の国際協力」という言葉です。しかし、ＪＩＣＡの職員の人たちはこれ迄全然そんな気持でやれてはいない。本人が２～３年ほど同じポストにある時だけ、仕事をこなせれば良いと思うようなもので、中央省庁の職員も考えているようで現場のことなど考えない。自分の机の上に今ある書類だけ片づけて、予算さえつけば良いという気持ちで職員自体が仕事をしている時に、「国民参加型の国際協力」など出来っこない。むしろ、政府の仕事にはそういう性格があるので、私たちの方から積極的に働き掛けていかなければならないことがいくつかあると思うのです。その中に、政府の関心としては最近ＮＰＯ法案ができて、非営利型のグループをどんどん組織していこうという動きがあります。今、原則課税などというまずいことになりつつあります。私もあの法案作成を準備した者の１人なので気になるところです。

そして同時に、ＮＧＯ的な組織も考えていきたい。海外とは横のつながりが非常に大切です。個人の考えたことでも良いこと、説得力のあること、政府が思いつかないようなことを思い付く、そういった能力が日本も含めアジアの人たちには豊かなんですね。欧米的な考え方というのは、個性豊かなのは良いのですが、「私が、俺が」という意識が強過ぎて、他人とは骨の髄まで理解できなければ同意しないという性格の人がけっこう多い。ところがアジアの人たちは、個性となるとあまり主張しないのです。人と調和し、その中で自分たちの考えていることを実現することに長けた人が多いのですね。これが私どもが持っているメリットなのです。ですから「男は黙って○○ビール」などと言いますが、今日の私のように２時間も話し続けるような日本人の男は軽率に見られる。中身もそうだし、人間としても軽率に見られるということです。(笑い)日本にはもともと「会議」という形などなかった。お父さんやおじいさんが囲炉裏を囲んで酒を飲みながら、あるいはお茶漬けを食べながら「今年の天気はぐずつき気味

なので、いつ稲の苗を植えるか」といったことをポツポツと話す、そうやって家長の決めたことに従い物事を取り運ぶなど、経験を積んだ徳のある人がリーダーになって村や集落を動かしていたわけです。一方、西洋では役割があったら、経験がなくても「自分がリーダーだ」となって物事を進める。それが上手くいくこともあるけれど、知らない間に「私が、私が」となって全然まとまらない。これが西洋と東洋の違いです。「平和」に対しても、この違いがあります。

日本人はSilent・Smile・Sleepの新３Ｓで知られている

自己主張という点でエピソードを２つ挙げます。ひとつはクイズですが、皆さんはどう考えるでしょうか。国際会議の席で、マイクを日本人に向けて「何か話してください」としゃべらせることと、インドの方に「あなたには一言と頼んだのに、すでに10分以上もしゃべっている。そろそろやめてくれないか」とマイクを取り上げるのと、どちらが難しいと思いますか。私はこういう場面にたびたび遭遇するのです。これに関して日本人には「３Ｓ」という言葉が第２次大戦前からあります。まず「Silent」、すなわち「沈黙は金なり」で静かにする。それから「Smile」。国際会議などに出ると、言いたいことが言えないので意外と苦笑いが出たり、周囲が笑っているのでつられ２、３秒遅れて一緒に笑ったりしてゴマかす。白状すると、私にもそういう経験があります。そして「Sleep」、つまり分からなくなって寝てしまう。ということです。このクイズの正解は、「どちらも難しい」。これは国際社会での定番であります。日本人にしゃべらせることと、インド人にしゃべるのをやめさせることは本当に両方とも難しい。インドの人にマイクを向けると、3000年の昔からのインドの歴史や哲学を語り始めますから、話す時間が延々と続く。反対に日本人は、話す内容を一生懸命考えて、喉元までは言いたいということがたくさん出てくるのです。しかし国際標準語である英語の壁があって、どうしてもそれがうまく表現できない。あるいは右から左に抜けてしまう。私達は英語ひとつにしても、たしかに受験のために一生懸命勉強したわけです。けれども、いかんせん”目で見て、頭で理解し、訳す”という思考回路になっているため、交渉やコミュニケーション技術としての外国語会話に慣れておらず、結局「３Ｓ」になってしまうんですね。以前の「３Ｓ」は、第２次大戦時の連合軍の戦略で「Sports・Screen・Sex」が日本人への戦略の代名詞のように言われていました。しかし言葉の不自由さが高じて、今では「Silent・Smile・Sleep」となってしまう。英語力については、私自身もやっと大学に受かった程度なので大したことはないんです。そういう人間がいざ国連の仕事をしなければならないとなると、さあ大変です。ある程度のことは多少分かるようになっていなければならないし、英語も人が聞いていようといまいと、自分の言いたいことだけは他人がわかるように書くなり覚えて言わなければならないわけです。

私が20歳の時の経験をお話しします。さっきお話しした「伸びゆく青年の会」という

青少年活動には、「友達をつくろう」「他人のお金で海外に行こう」「奉仕活動をしよう」という３つのモットーがありました。この２番目のモットーを実践するため、東京都での受験を試みたんですが、私はたくさん受験者が殺到する一般試験は受からないだろうと思い、通訳を兼ねた参加者への試験に挑戦することにしました。しかし、先ほど言ったような勉強の仕方ですから何もできない。ただ、受験者が少ないだろうとにらみ、試験自体も１人にかける時間は短いに違いない。その場合にどういう質問が想定され、それに対して私はどう答えれば良いかと考えた。そこで想定問答集を自分で作り、答えなるものを丸暗記して試験に臨みました。案の定、試験時間は短く、しかも相手が聞かないことまで先にこちらが答えた（笑）。試験官も驚いたと思いますが、おかげで「こいつは何かしゃべれるのではないか」と思われたようで合格。当時で３ケ月間の期間で１人当り130万円くらいの留学資金が支給されました。

また、ユネスコの試験では、スペイン出身の国連の人事局長が東京に来て面接することになったのです。さっき言った留学の主な訪問地がスペインやポルトガルでしたので、半分遊びでスペイン語を習っていた。そこで履歴書に、本当はちょっとしかしゃべれないのだけれども「私はスペイン語がかなりできる」と書いた。まあ試験までにかなりできるよう頑張ればいいと、スペイン語を練習したら、案の定当たった。スペイン国籍の人事局長は、日本に来てスペイン語で面接ができるとは思わなかったのでしょう。ポストが生じれば私を優先的に採用するようにという推薦を日本政府に行ったようです。そしてユネスコは本部がパリにあるので、文部省の仕事に就きながら３年間フランス語教室に通いました。ところがいよいよ採用が決まったら、赴任先はフランスではなく先程の事情で中南米、すなわちスペイン語圏だといわれ、困ったこともありました。

ここで皆さんに言いたいのは、自分が何かやりたいと思った時、それが出来ても出来なくても良いから、人生の目標を設けてしっかりと取り組んでいただきたいということ。するとその集中力たるや、大変なものなのです。例えば外国の方とお友達になろうと思う。特に私などは異性に関心がありますから、ガールフレンドがほしいと思ったら、一生懸命そこの現地語を覚えます。そういったことは、お役所や学校で決めたカリキュラムではなく、ユニセフやこのロータリーのような、ＮＧＯベースで取り組むのが一番やり安いわけです。

話は戻りますが、西洋と東洋の働きかたの違いについての今ひとつの例は、ノーベル賞を受賞した田中光一さんと、青色発光ダイオードの裁判で最近勝訴した中村修二さんです。この２人は、東洋的な生き方と西洋的な生き方の典型です。だから、比較してみると大変おもしろいんですね。よく知られているように、中村さんの場合は研究技術者としてあれだけ頑張ったのに恵まれないということで、結局裁判をおこして200億円の賠償金を勝ち取った。彼としては、自分だけでなく一般に技術者が日本で非常に軽く扱われている。それを考え直してもらうきっかけにしたかったのだろうし、実

際アメリカに行っても実績を残しているので、いずれノーベル賞候補になるのでしょう。一方、田中さんのように世界的栄誉を手にしても、非常に謙虚で「いくらノーベル賞授賞式でも、妻とダンスなどしない」と、伝統的な一日本人と同じようにふるまう人もいる。良し悪しはいろいろあると思いますが、こういったタイプが、日本人が国際協力を行う時にスタートの時点でお手本となる２つの典型だと思われます。

上手に人や組織を動かす

資料９ページに話は戻ります。ＪＩＣＡのこれから目指すべきこととして、今の世界はここに図式化されたように「貧困」と「家族計画」が大きな問題になっているのです。途上国の側に限って未だに人口増が続いて、もちろん病気も多い。「時々たいへんな感染症が発生することで、急激な人口増を止める」というネガティブな意見の歴史家もいます。途上国ではひとつの理屈として、15歳以上元気に生きる子どもたちが少ないと自分たちの家や家族、地域が成り立たない。すなわち労働力として子どもを見なすわけです。また、環境問題などが重なって悪循環となり、未だに貧困と家族計画の問題が続いているのです。これをどのように良循環に戻していくか。従前は、経済やその地域の問題だけが言われていたのです。政治的な安定や難民問題など広く経済的な仕組そのものも考えないと、社会福祉だけの問題では解決しません。「人間の安全保障」にあたる分野の事柄には、保健と栄養の問題や教育問題、特に女性に対する基礎的な教育といったことを重点におくことが必須です。ということは、特別な技術を持っていなくても、皆さん自身がもつ特技にさらに磨きをかければ、ＮＧＯのリーダーとして、あるいは政府関係の組織に入ってでも大いにやれるわけです。

このような機会はどんどん増えています。私の見解では、自己研修や自己教育、自己を伸ばすといったことのベースとして、情報や技術が大いに役立ちます。明確な目標を持っていますと、それに関連した人やものが自分たちのまわりに自然と集まってきたり、自らが関心を持って研修するようになります。また、それに関係する人たちに働きかけることによって、市場を中心とした自由競争の中でも人を動かす力が自分にも備わって、同じような仲間が増えるとやりたいことができるようになる。

こうした意味では、2000年の永きにわたって虐げられ、最近は逆にパレスチナを随分やり込めているイスラエルの人たちは、今は非常に反感を買っていたり、机の下やスクリーンの背景で暗躍することが多いんです。そういう悪いイメージではなく、良いユダヤ民族のイメージは日本やアジアが学ぶべきところが多いと思います。ユダヤ人は2000年も奴隷の時代を過ごしていますから、したたかに生き抜く術を身につけています。例えばエジプトのピラミッドは、彼らが奴隷時代に造った事を歴史は証明しております。シオニズムを信奉している人ならご存知の「フリーメーソン」という秘密結社がありますが、「メーソン」とは石工を意味し、彼等はピラミッドの材料を作工しました。それから、人気のディズニーランドを産み出したウォルト・ディズニーもユ

ダヤ人です。また、今やイスラエルが米国を支配しているということのひとつに、ここに取り出した１ドル紙幣があります。これは１ドルの価値という額面以上に、世界の「機軸通貨」に自らのシンボルを印刷したという大きな意味のあるものであり、その紙幣の裏には“ユダヤの目”が刷り込まれている。それほど上手に人や組織を動かすことに巧妙な民族なんです。そこで繰り返しますと、いろいろユダヤ人に対する批判はありますが、頑張っている点は私たちも大いに学んで良いのではないかと思うのです。

今日は長崎からこちらに参りましたけど、明治という近代日本をつくる時、全国各藩から長崎に人が集まりました。その時の写真が此処にありまして、そこにはこれまで写真がないといわれている西郷隆盛が写っているので、この写真の真偽は半々なのです。坂本龍馬や大隈重信など錚々たるメンバーも集まっています。そのほとんどの人間が、当時長崎にいたオランダ生まれのアメリカ人宣教師で通訳の教師をしていたフルベッキという人を敬愛したそうです。調査によると明治維新前後10年で、全国の若手リーダー562人が長崎に出入りしているのです。ここで大事なのは、明治の日本をつくった多くの若きリーダーが、長崎という場所に集まって海外の情報を入手していたことで、これは今の国際協力の話に結びつくわけです。写真の真ん中に座っているフルベッキは、岩倉具視を団長に世界中に多くの日本人を後に派遣した計画の立案者でした。当時10～20代の伊藤博文や大久保利通、中江兆民らがアメリカやドイツ、フランスで勉強して帰国したわけです。

しかし、国をまとめることは上手くいったのですが、政治家や行政官が一生懸命ドアを閉じても、国の垣根が低い分、どんどん国同士の交流がさかんになっている時にあって、役人を志向する人間だけでは国の運営はできない。そこでＮＧＯやＮＰＯなど民の力が必要になってくると思います。ＯＤＡも最近は無駄遣いが多過ぎた。ＮＧＯをもっと活用しようということで、私は「お団子（ＯＤＡとＮＧＯをつなげばそうなる）方式」でいこうと言っています。つまり金や物だけを与えるのではなく、我々国民も参加しようということです。各都道府県でも、ＪＩＣＡの派遣専門家が帰ってきた時の連絡会があったり、青年海外協力隊のＯＢ、ＯＧの会が開かれるなど、いろいろなチャンスがある。ＪＩＣＡが関連している組織でも、12事業ほど私たちが参加できるプログラムがあります。

科学技術の進歩と正確な情報伝達

先ほど申し上げた科学的「仮説検証型」というのは、どちらかというと細かく見てゆくという手法です。しかし、細かく見る時に注意しなければならないのは、測る道具あるいは測り方が精密であれば良いのですけれど、仮に物差しが間違っていたり精密でなかったら、それから得られるデータそのものを私たちは疑問視せざるを得ない点が出てくるわけです。

例えば今、私が大学院で研究しているターゲットのひとつに「新興感染症」というものがあります。これは、1993年にアメリカのホワイトハウスが発表したもので、今で

言うＳＡＲＳや鳥インフルエンザ、ウェストナイル・ウイルス感染症などが当てはまります。人工的な原因も含めて地球環境がどんどん変化し、あるいは過去20年くらい止んでいた、結核や日本脳炎の病原体があちこち出てきて人間の体を蝕む、ある場合は相当数の人間がこの感染症で命を落とすという現象が、現に世界中で起きているわけです。これもいろいろな原因があります。地球の温暖化やオゾン層の破壊や熱帯雨林を開発し過ぎたことによって、これまで見つからなかったウィルスが出現する場合もあります。自然環境の変化そのものが影響している場合もあります。ここでまず最初に申し上げたいのは、「再興感染症」の原因を見た時、先ほど延べた物差し、測る器具が精密になればなるほど、寄生虫のようなものから細菌、ウィルスというレベルまで発見できるようになったということです。現代の科学技術、特に医学や医療機器の分野では、このウィルスからさらに細かいプリオン蛋白の世界、例えばＢＳＥ（狂牛病）などは、今の物差しではまだ原因が明確に掴みきれていないという状況です。ですから、技術が進めば進むほど、ミクロの世界を仮説検証することはできるのですが、そこまで進んでいない場合には未だ分らないままです。もちろん、その分らないところを分るようにするというのが、学者、研究者の役目なのです。そのうちにも新たな病気が出てきて、私たちの健康に不安を投げ掛けるとか、あるいは途上国や近隣国で患者さんがどんどん増えて死んでしまう。こういったことが世界中の問題となって表面化するわけです。

では科学技術が進むまで待っていられるかというと、それはなかなか叶わない。やはりその都度、科学技術が進んでいないなりに、人間らしい生活をしていく、あるいは生活してゆける組織や国を成り立たせていくためには、問題解決型の取り組みがどうしても必要になってくる。そうしますと、マスメディアができるだけ正確なデータを届けていただくことも大切であります。さらに、公共のために役立っている行政がどのようにしているかということを、私たち一人ひとりが常に見張っていなければならない。変なマスメディアの情報ばかりで、民心を混乱させられたり不安を増幅させられることを、市民として正していくことが必要だと思います。また、今やっていることや長期に計画されていることが間違っていると思ったら、我々も大いに「これはおかしいのではないか」と声をあげていくことが、市民の責任としてあるのではないかと思います。ところが行政は、自分の立場や役割上で仕事をしているので、実態とは異なるにも拘らず法律や規則をつくらざるを得ない、あるいはこういう情報を流さなくてはならないということがある。それが雪だるま式に良い方に行けば良いのですけど、逆に世の中が混乱するという方向にいったのでは考えものなわけです。

人間の安全保障のためのＯＤＡ

そこで考えていただきたいのが、これだけ大騒ぎしている新興感染症や再興感染症、今のＳＡＲＳや鳥インフルエンザに至る要因は、医学や生物学、細菌学でわかる原因とは違って、こういう病原体が新しく出て

きたり、再び頭をもたげたりという状況が、実は人間がなせる技や行動から起きているということです。(表参照) この「リエマージングの要因」の中には、例えばO－157は日本では1995年頃に出現して大騒ぎになったんですが、アメリカでは1982年に発症して24人の方が亡くなっています。また、中にはスペイン語で「sin nombre」、英語では「without name」すなわち名前のないウィルスもあるのです。これらの再興の要因を見ますと、医者や生物学者、公衆衛生に関係している方は、例えば公衆衛生基盤の崩壊だとか、媒介蚊が発生する好条件が頻繁な旅行や都市化であったり、あるいはペストのように土地利用や経済発展によって起こる場合、また結核のように人間の動態や行動様式の変化、さらには工業技術や国際貿易や通商といったことが主な原因である。こうなると「これは医学だけを考えていたのでは間に合わないのではないか」とお感じになりはしませんか。

かつて山梨の甲府盆地や福岡の筑後川のほとりなどで起こった「日本住血吸虫症」という感染症の例は、途上国でも非常に大きな影響を与えています。ダム建設や潅漑によって中間宿主が発生する好条件を作っている。ダム建設や潅漑については、私たちは開発という観点からすると、その地域や国がたいへん発展したととらえるわけです。しかし、その負のお釣りが、途上国にあっては未だに人々を苦しめ、死者を生んでいるのです。そういったことに対応するために、先進国には立派なお医者さんが沢山いるのに、途上国に医者はいない。薬もない。日本には薬がありすぎて困る。薬剤関係の方に言わせれば「何とか薬を売りたいのだが、マーケットが限られている」と漏らすほどです。それから、敵である病原菌も耐性が高まって、ついこの間まではペニシリンやストレプトマイシンが万能薬のように言われていたんですが、それも次第に効かなくなってきています。

とにかく、先進国と途上国との格差があまりにもひどすぎる。先ほども申しましたが、これからはお医者さんも弁護士さんも、むしろ途上国をマーケットに考えて仕事をしていただきたい。その時に、今までの国内における生活状況や経済状況、プライドやメンツなどが傷つけられるのであれば、それを補えるような何かにこそ、国や自治体という公共組織が財政支援をすべきだと思うのです。例えば経済的に恵まれなかったり、プライドが傷つけられたり、あるいは帰国したら仕事がなかったなど身分保障されない、といったことをできるだけ少なくするために、ＯＤＡ（政府開発援助）などを使って、人間の安全保障のような事柄に関する人々の総動員を図る。オペラハウスを作ったり、使わない道路やダムを造ったりするよりも、こういうところにこそＯＤＡを使うべきです。今まで行われてきた公共工事の海外版がＯＤＡの実情と考えれば良いわけです。この件については後でご説明したいと思いますが、要するに今は物や金だけを使って、途上国や恵まれない人たちを支えようと考えている節がある。この場に関係者がいらっしゃったらたいへん失礼かとは思いますが、いわゆるゼネコンや商社が仕事として海外でどんどん公共事業を行って儲けている。その費用をＯＤＡ

で支払っているわけです。ですからＯＤＡで出しているお金の半分以上は、援助対象国から日本に還流してきている。それが決して悪いことばかりとは言えません。しかし、それは経済協力としてやるべきであって、ＯＤＡは本来、医療や福祉、教育、食糧補給、栄養など、「人間の安全保障」を行うための支援こそがまともなあり方なのです。所が第２次大戦以降、すべての分野において先進国が採用している経済・金融システムを導入したために、物やお金の補給だけが先走りして、途上国はとてもじゃないけどそれに追いついていけない状態がひどくなっている。しばらくは一生懸命頑張るのですが、そのうち追いついてゆけないものだから放ってしまう。

例えば私が中南米の国連担当官だった時、チリのサンチャゴという所に住んでおりました。チリやアルゼンチン、ウルグアイというのは、ヨーロッパの人たちがたくさん移民したところです。ラテンアメリカ地域の経済の中心地になっているのですが、一方で鉱工業がさかんで、硝石や銅などが主な輸出品として知られています。ただ、それらが売れている間は良いのですが、銅や硝石の原産価格が下落すると、国全体の経済がガタ落ちになる。ブラジルやアルゼンチン、メキシコなどにしても、資本主義経済の仕組みにうまく乗っかっていないことから、経済が不安定になることが多いのです。それが他のところにも影響してしまうというのですから、今の資本主義というのは、マーケットを中心に十把ひとからげにやってしまう自由競争という点では、強引で力任せすぎる。とくに開発途上国にとっては悪い例を挙げると、アメリカが「世界のため」と言いながら、どこにでも軍隊を派遣して力任せに事を進めてしまう。それがアメリカ市民全体の総意ではないとは思うのですが、国際的に暗躍しているグループがいて、実はそういう人たちは国単位で動いていない。武器を売る商人グループだったり、油の商いを行う専有権をもっていたり、あるいは自分たちの民族の生き様を将来の優位支配のために活用したりと、相当アンダーグラウンドの人たちが活躍していることが多く、それが実は国際社会を動かしています。国連も相対的に地盤沈下しているわけです。

これからは「人材」の時代

つまり経済的な仕組みが、その地域の人の健康や生き様に大きな影響を及ぼしているのが、国内と海外の現状であろうと思います。その中で我々の先輩も含めた日本人が、まだまだ一人ひとりの個性や能力、あるいは潜在的な可能性を生かされないでいる。ひょっとしたら私たち自身、そのことに気付かないでいるという点も大いにあろうと思います。これからはソフトの時代、人材の時代です。科学技術がいくら進歩したといっても、コンピューターにだけ頼っ

ていてはいけないと思うのです。コンピューターの便利さや面白さは高じていますが、より長い目で見た時、その便利さが本当に私たちの健康と生き様に生かされているかは大いに疑問です。もう少し取捨選択することを今からやっていかないとまずい。今のままではいくら頑張ってみても、人間の神経生理が持っている、無条件に暗示を感受する習性には調和し難い。医学の発達によって、私たちは我々の身体のことをほとんど知っているように思っていますが、実はそんなものではありません。人材の大切さということ、私たち一人ひとりがいかに素晴らしい存在であるかを知っていただきたい。資料の最後のページに掲げた図は、今の医学部大学院生にもまともに教えられていない事柄です。病理の授業でもこんな基本的な事を教えていない。むしろアジアの迷信、漢方を習っているような気がすると言われるのです。資料12ページの中ほどに、人間は血液を媒体にして、神経系と内分泌系すなわちホルモン、免疫系の３つが一緒になって健康が保たれていると表記しています。こういう大事なことを意外とはっきり教えてもらっていないのです。

「Mind and Body work together」と言うと、何か迷信のように思われがちです。医学者や生物学者は体と心を分けて、体だけを研究する、これが医学であり生物学であると言います。では心はというと、これも科学的に分析的に研究します。つまりどんどん分けていく。ところで、私たち人間の生き様とか行動の仕方というのは、ひたすら分けていって、どこまで分けたら納得して行動しますか？分けている間にも、複雑なメカニズムで手が動き足が動きますよね。つまり、心と体は分析してわかるというものではなく、むしろ統一して上手に使うことが大事であって、それがHow to doになってくるのです。そしてそのうちのひとつが「無条件暗示感受習性」であり、常に前向きのイメージを持つことが重要なのです。昨日も、深川先生や今井先生のお話を伺っている時に感じたのは、常に前向きだということです。人のやっていることを批判するのではなく、多様性と言いますか、個性を認めてそれを伸ばす、お互いに励まし合うことが、ひとつの奉仕の精神だと私は受け取ったのですが、それこそがロータリーのエッセンスと伺いました。これは、自分の体や気持ちの持ち方についてもそう言えると思います。

心身統一で前向きに生きる

大学紛争でもめている時、私は青少年活動と同時に、先程紹介した中村天風さんの道場に通うことを趣味のようにしていました。彼は宗教家でも教祖でもありません。現に私に天風さんを紹介してくださったのは、ＩＣＵ（国際基督教大学）の牧師さんでした。東京・池袋の護国寺の茶室で、初めて天風さんのお話を聞くことになったのですが、彼は若い頃から悪いこともし尽くしていた。天風さんは、九州柳川藩の大名の側女の息子であり、日清・日露戦争時代は軍事探偵、即ちスパイをしていたと自ら語っています。なぜそんなことをしていたかというと、右翼の頭領だった頭山満翁率いる玄洋社という集団は、中国の革命に加担し、日本のヤクザのもとにもなったので

す。そこに所属して喧嘩に明け暮れ、しかも相手に致命傷を負わせないとおさまらないほどの人間で、「人斬り天風」「玄洋社の豹」とまで呼ばれていた。ところが40歳になった時、結核にかかってすっかり意気消沈。そこで彼は、元の身体のように元気を取り戻してこれからは自分自身が納得するような人生を歩みたいと考え、海外へ密出国して世界中を回ったのですが、救われる場所はどこにもない。ドイツの著名な生物学者のもとへ行くと、「あなたは海の魚をマッターホルンの頂上で取ろうとしているようなものだ」、つまり何もできない、かなわないと言われたのです。あるいはフランスの有名な女性心理学者もたずねたものの、残念ながら救いを得られず、ついにはエジプトへ渡りました。そこでたまたま出会ったのが古代ヨガの修行者カリアッパ師で、その人にインドのヒマラヤ山中に連れて行かれ、そこで4年余りの修行を行いました。そこで学んだのは、古代ヒンズーの教えから生まれた「ヨギ」すなわち「心身統一」であり、心と身体を可能な限り一緒に使うことでした。こうした体験を日本に持ち帰って伝授することになったわけです。

インドから帰国直後は昔の悪い癖が抜けてなくて、戦後も人をおとしめるようなことに関与していたようです。そしてある時、思いを断って一切の悪事もやめ、何の収入も求めず、自分の経験を皇族方に語ることをもって活動を始めました。昭和天皇ともかなり親交があったようですし、第二次大戦に出征する兵士には「とにかく生きて帰ってこい」と諭したといいます。天風さんが率いて参上した元軍人幹部には天皇が謝ったとも、本人から聴いています。資料に「心のお蔵の大掃除」「常に前向きのイメージづくり」「神経反射の調節」とありますが、この3つを心身統一の要諦として彼は説きました。ここでは時間の都合上詳しくは説明致しません。神経系統を健全な状態で活性化することによって、私たちが持っている心と体が持っている本来の強さを発現させていく、ということを教えたわけです。日本の政治や行政に関係した人は、この中村天風さんの影響を受けた方もたくさんいらっしゃる筈なのですが。

幅広い視野で国際的な活躍を期待

そこで、お互いボランティア的に行う国際協力をよすがにして、自分たちの人生や将来を切り開いていくために、半政府機関であるＪＩＣＡについてご紹介します。ＪＩＣＡはこれまで「国際協力事業団」と言っていたんですが、昨年10月から「国際協力機構」と名称が変わりました。なぜこれをご紹介するかというと、他の機関は物やお金だけで援助を行いますが、ＪＩＣＡは科学技術の中でも技術協力、つまり専門家人材が深く関わらないと、国際協力や支援がいかにうまくいかないかを常に考えてきた組織だからです。お金の面で言えば、他の機関の半分くらいしか無いのですが、このＪＩＣＡを大事にして、これからも皆さんに活用していただきたい。例えば若い方であれば青年海外協力隊や若手の専門家、年輩の方ならシニア・ボランティアなどの派遣に尽力している機関ですので、そのビデオを視ていただいた後、人材のお話をしたいと思います。

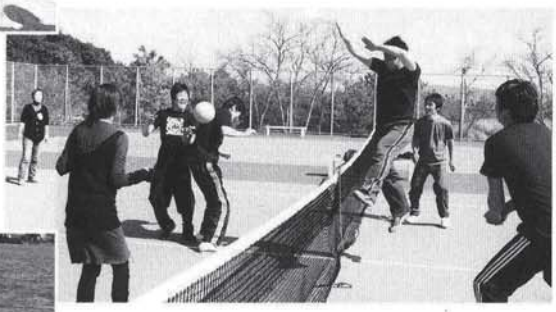
（ビデオ視聴）

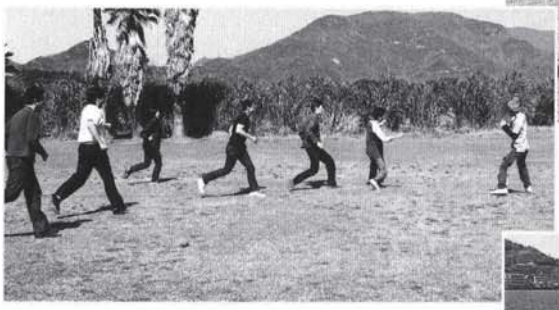
日本には優秀な人が沢山い過ぎるから、結局妙な競争か非難が高じてノイローゼになり自殺者も増えるのです。もっと外へ出て、現場を見て大らかな人間になってほしい。現場に行ったら、国際派遣された日本人や外国人がたくさんいますから、そこでいろいろな情報交換をして、自分を鍛え自分を見出すようにすると良い。そこで機会を得たり一つポストを得たら、今度は意外と簡単に道が拓けて来るものです。けっして外へ出かけるだけが能ではないですが、本当にそういうことを希望するのであれば、いろいろな方法があることを知っておいてほしいと思います。私自身も多少苦労しながら、今は大学にいるわけです。普段はあまり実験室にこもらない性格ですから、「あいつは何をしているんだろう」と思われていると思います。幸い、学長などをうまく動かすノウハウは蓄積しましたから（笑）。

先ほどお見せした大きな写真は、明日の日本を方向づけた勇者たちということでした。今度は皆さんお一人お一人がその番だと思います。大いに周囲を活用して前進していただきたいですし、このロータリーさんから提供していただいた自己研修のチャンスをぜひ生かしていただきたい。あまり肩肘張る必要はないのです。どうぞリラックスして、中村天風さんではないけど「おへその下に自分の身体の重心が常にある」と考えて、平常心で頑張っていただきたいです。

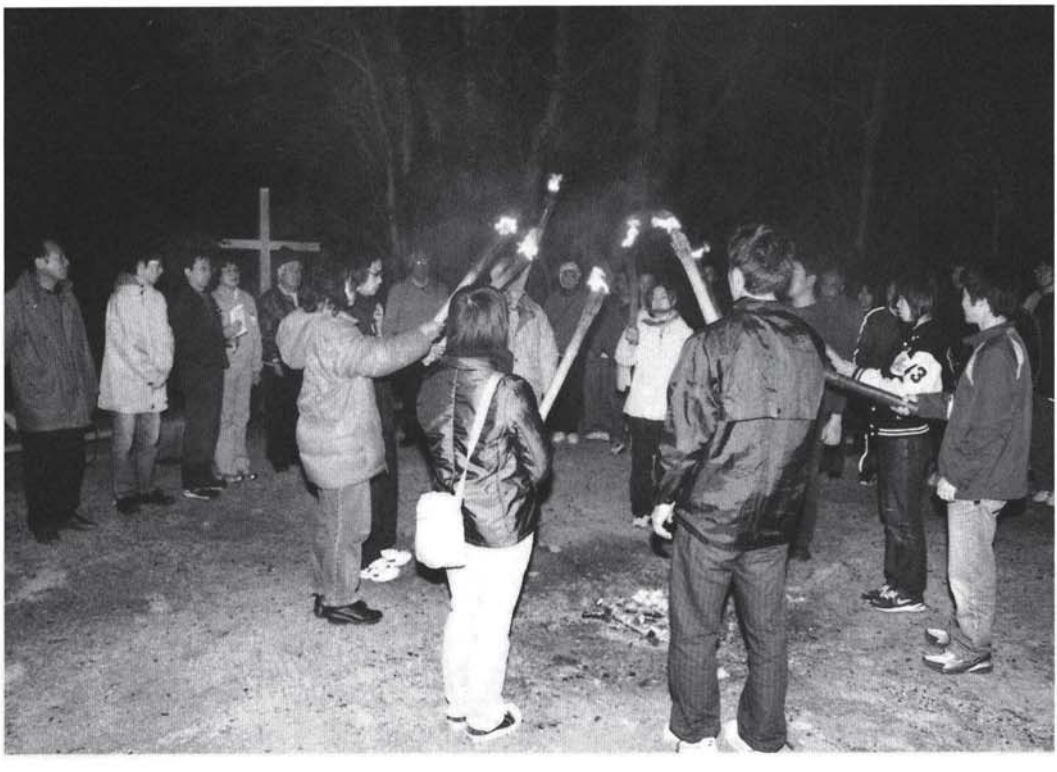
ふだん“無口”な人間が随分長時間しゃべってしまいました。（笑）ご容赦いただきたいと思います。そしてこれをご縁に、また何かの機会にご活用ください。長時間ご静聴、本当にありがとうございました。（拍手）

レクリエーションタイム





カウンシルファイヤー



未来の社会へ　～科学と技術の役割～

愛媛大学名誉教授・前学長
鮎川　恭三 氏

〈鮎川　恭三氏〉
昭和８年生まれ。工学博士。松山東ロータリークラブ会員。昭和33年、京都大学大学院理学研究課程修了。昭和34年愛媛大学工学部講師として赴任。昭和47年愛媛大学工学部教授。平成９年愛媛大学学長に就任、平成15年に退官。現在は愛媛大学名誉教授。日本機械学会名誉会員、可視化情報学会名誉会員として受賞多数。

みなさん、おはようございます。ただ今ご紹介いただきました鮎川でございます。昨日こちらにまいりまして、実はロータリーの会員でありながら、ＲＹＬＡセミナーに参加するのは初めてなんですが、昨夜のカウンシル・ファイヤーは感動的でしたね。今朝は早く起きまして、もう一度その場所に行ってみました。すると周りにきれいなヤマツツジが咲いておりまして、こんなすばらしい所で皆さん方とこのＲＹＬＡに参加させていただいたこと、そしてまた、こうして皆さん方の前でお話をさせていただく機会を得たことを、本当にうれしく思います。それと共に、こういう施設をつくられた先達の皆さん方、そしてこのような機会をつくってくださり、いろいろお世話いただいた方、それから皆さんと一緒にこの数日、いろいろお話したり学んだりすることができると思いますと、本当に多くの方に感謝したいと思っております。

独自の視点で進路を選択

先ほど丁重なご紹介をいただいたんですが、実は私は理学部を卒業いたしまして、工学部へ就職いたしました。なぜそんなモチベーションを持ったのかと言いますと、これは非常に申し訳ないような単純なことでございます。私が大学院を出た当時は、同じ研究室に先輩が20人くらいいまして、「これで将来はどうなるんだろう」と思っていた頃に、ちょうど愛媛大学の方からお話があったわけです。それで「とにかくやってみるか」といったようなことから入ったわけで、その点ではモチベーションは非常に低かったかなと思っておりますが、その後のことを考えてみますと、私が理学部から工学部へ行ったのは非常に良かったと思っております。なぜなら、そこで新たに自分がこうやりたいと一生懸命考えることができた。それに、その当時の大学の研究室と

いうのは、教授の考えているようなことを順番にやっていかなければいけないという雰囲気がありましたので、そういうところから思い切って離れることができた。また、私が愛媛大学に行くに当ってご相談した友近先生は、日本で最初に流体力学を持ち込まれたと言ってもいい方ですが、幸い私の下宿がその先生のご自宅の斜め向かいにありまして、よく先生ともお話をしておりました。友近先生のご出身は松山でして、他の先生からも愛媛大学の話をいただいた時に、友近先生のところに相談にまいりました。すると先生は、ニコニコッと笑って「君ね、愛媛ではいろいろな魚が取れるんだよ。大きな魚はみな大阪の方へ出荷されるけど、小さな魚がすごく美味いところなんだ。だから行きたまえ」と（笑）。私は食い意地が張っていたものですから、それにすぐ乗せられまして「はい、ではまいります」となった。実はその１年前にも同じ話があった時、お断りしていたんですが、友近先生の話を聞いた途端に「行きます」と返事をしたのが動機です。

それで愛媛大学に行きました時、実は機械工学科に就職したんです。大学院では原子核を研究しておりまして、その中でも原子力に関係するウランといった非常に大きなものを研究していました。その頃は、ウランの原子核を雨粒のような液滴をモデルにして、その振動で分裂するかどうかといったような研究をしておりまして、その関係で流体ともご縁ができたということだったんです。そこで機械工学科に行ってみたんですが、情けないことに機械がどれも同じにしか見えない。そんな状態なので、新たに勉強しなければいけないということで随分と苦労したけれども、自分では良かったなと思っています。良かったというのは、先ほども申し上げたように理学をやっていたので、全く違った観点で問題が見えた。そして、自分でものを考えることができた。いわゆる先生の権威といったようなものに縛られることがなかったわけです。こちらが訊きたい時にはいろいろな先生のところに行きますけれども、「こうやりましょうか」とこちらが訊くのではなく、「私はこれをやりたいんですが、どうしたらいいでしょうか」と話して教えを請うたことがずいぶんあります。

大学とは一体何か

では何を研究しようかと考えた時に、実は流体力学の分野では、完成されたニュートン力学を流体に応用した形のものが基礎的な方程式になっています。その点ではかなり研究が進んでいて、あまりおもしろくないなという中で、私はいろいろなものが混ざった流れ、いわゆる泥水のような流体と個体とか、最近はボイラーなどで非常に重要になっている流体と気体といったような、いろいろな種類のものが混ざった流れを研究してみようと思い立ちました。当時は混相流というのは、例えば泥水輸送とか、石炭をすりつぶして水と一緒に流せば輸送コストが下がるといった水力輸送が、資源工学分野や土木工学分野で多少研究されていました。ただ、それぞれ混相流というイメージはなくて、輸送手段として技術的なことが考えられていたという時代だったんですが、これをまとめてひとつの体系にで

きるのではないかということで、その後しばらくしてやっと「混相流」という名前がつけられ、学会もできました。最近は国際会議も開かれていますが、それぞれの分野でマイナーだった人たちが集まって、ひとつの流れをつくってきた。そういう流れの中に身を置けたということも、私自身にとっては非常にうれしかったことです。

ということで、若い時ですからひとつの体系をつくりたいという、非常に大それた望みは持っておりましたが、研究していくうちにたいへん難しい中身であることがわかってきましたし、まだまだ十分な体系をつくるに至らないままに年だけとってしまったというのは、非常に残念に思っています。ただ、若い人たちが今、非常に積極的にその方向を目指して頑張ってくれているので、その意味では少し安心しています。まあ、物事というのは何でも、最初は簡単でやっていくうちに難しくなるものですが、その難しい流れを始めからやろうと思ったことが、逆に自分にとっては非常に良かったと思っています。その混相流ですと、例えば土木とか資源工学、機械といいましたけど、最近では血液の中の流れもこの分野といえます。血液の中の流れというのは、白血球や赤血球が入っていますから、血漿の中にそういうものが入っているという意味ではやはり混相流であり、医学の方ともいろいろお話ができるようになりました。その他、いろいろな面で多くの方と一緒に勉強できたということも、幸せだったかなと思っています。ただ、完成どころかますます問題点ばかりが出てきているうちに、年をとってしまったことは非常に残念であります。

それからしばらくして、この混相流について最後にまとめようかなと思っていた矢先に、学長になれということになりました。おかげで最近は研究室から離れてしまっていますが、久しぶりにこうして講義をさせていただくことができまして、私はうれしくて仕方がない。今までは本当に大変でした。学長になった時に何を考えていたかと言いますと、ちょうど大学がこれから大きく変わろうとしている時期だったわけです。学長に選ばれました時に、いろいろな方から「おめでとうございます」という祝電をいただきまして、それはそれとして非常にありがたかったんですが、その中にひとつだけ忘れられない祝電がございます。それは、友近先生の後で教授になられて、京都工芸繊維大学で学長をされていた巽先生からの祝電なんですが、「今からが大学をつくる時だ。お前は非常にいい時に出くわしたのだから、それをしっかりやれ」といったような内容の長い電報でした。それだけは今でも忘れないで、大事にしております。

そんな中で私自身は、大学とは一体何かということをずいぶん考えさせられました。「場合によってはいらない大学は潰す」といったような脅しを、文部科学省あたりがさかんにかけてくるような時期でもありました。その一方では、社会と大学の連携といったことが叫ばれ始めていた。私に言わせれば、産業界の勝手で言われていた部分もあったかと思います。ただ、社会と大学がつながっていくということは、本当は非常に大切なことなんです。ではどうするかとなった時、今やかましい世の中の流れとは別にしっかり考えていないと、これから

の大学は成り立っていかないだろうということで、非常に勉強させられた時期でもございました。そういったことも含めて今日は、いろいろとお話をしたいと思っております。

大変化が起きた20世紀

今回のＲＹＬＡのテーマが「人間・自然・科学技術」ということでございますけれども、先ほどちょっとお話申し上げたことですが、最近「科学技術」という言葉が非情に安易に使われていると感じております。さっき「企業の勝手な部分もある」という言い方をしたのは、そういうこともあってなんですが、ここでは「科学と技術の役割」とさせていただきました。そこでまず、科学と技術がどう違うのかといったことから、今後どういうふうに物事を考えていく必要があるかということに、話を持って行かせていただきたいと思います。

まず、私なりにまとめてみた20世紀の特徴についてお話させていただきます。20世紀は、ほとんど自然から人工的にものを作るという転換の世紀だったと思います。これは科学や技術のおかけで、非常に大きな進展をしてまいりました。交通がその典型だと思います。と言いますのは、昨年はライト兄弟が飛行機を発明してちょうど100年目でしたが、それが今や大型ジェット機がどんどん飛んでいる時代です。そして鉄道や自動車、道路網といった点でも、交通は20世紀になってから非常に進化してまいりましたし、高速道路などは人工物のひとつの典型だろうと思います。また、エネルギーの面でも非常に進化してまいりました。それから原子力、医療、プラスチック、半導体、情報システムと並べてみますと、人工物への転換の世紀であるということがよくおわかりになると思います。食品そのものもずいぶん変わりました。昔ならキュウリの長さが揃っているなんてことは奇跡に近い話でしたが、今はきっちりとキュウリの長さを揃えて、まっすぐのものでないと駄目だとなってきましたし、魚なども養殖ものがずいぶん出回っている。これらはすべて人工物と考えていい。そういう面で20世紀は、いろいろな科学技術の成果を使って、自然のものから人工物への転換の世紀であったろうと思います。こういったことは20世紀の間にかなり発達しました。

それからもうひとつの20世紀の特徴として、私は競争と合理化の世紀であったと思います。とにかく経済競争が非常に激しくなってまいりましたし、合理化することが中心的な命題として考えられるようになった。そんな中、合理化し競争していくためには、経済システム自身が日本だけにとどまっていることはできない、つまり世界中に広がっていかなければいけないような時代になってきた。そういう面ではグローバル化ということが言えます。

そして、できるだけ力を集中したことも20世紀の特徴だと思います。ただ、その結果がどういうものを生んだかというと、それは「欲求の開発」。「こんなものを使ったら便利ですよ、だからこれを買いなさい」ということが、世の中にどんどん出ていった。私自身、コンピューターもデスクトップのものを置いていたんですが、こういった講演のようなことをしようとすると、持

ち歩けるコンピューターが買いたいとなります。そうした欲求の開発が進む中で、最近はどこの都市に限らず、都市自身が同質化していると感じます。中国などはその典型的な例だと思うんですが、以前に北京に行きました時も「なぜこれだけ広いのに、日本と同じようなビルを建てなければいけないのか」と現地の人に話したことがあります。そんなふうに、全般的には同質化することが文明の象徴になってきています。

富の偏在と価値観の衝突

また、世界企業が出てきたことも20世紀の特徴だろうと思います。これを絵に表わしてみましたが、自然から人工物に変換していくということは、どうしたってエネルギーをたくさん使わなければならないわけです。1960年から80年くらいまでは、消費はいいことだというような生活をずっと送ってきた。その結果、2000年の統計をみますと、エネルギーの使用量は石油換算で、世界で約100億トンを使っておりまして、一人あたり約1.65トンとなっています。その100億トンの中で、アメリカがだいたいその4分の1の23億トン、一人あたり8トンくらいのエネルギーを使用している。日本が5億トン、EUで10億トンということで、日本の一人あたりの使用量がアメリカの半分くらいです。ところが中国は、全体の1割くらいを使っていますが、人口が多いですから一人あたりですとアメリカの約10分の1、0.9トンほどのエネルギーしか使っていない。そう考えますと、中国の人がアメリカ並み、あるいは日本並みのエネルギーを使い出したら、エネルギー供給は本当に大丈夫なのかと言えるわけです。今、世界中の人がアメリカ並みに使ったら、エネルギーは今の2倍必要になるということです。

資源にしても同じようなことが言えます。以前に水について研究している方からお話を聞いたんですが、水資源も非常に危ないということでした。人口の伸びが今の60億人から100億人程度で止まるとして、地球があと2つか3つは必要、というお話を伺ったこともあります。こうしたことも人工物への転換が非常に進んだからで、資源・エネルギーの有限性の問題もある。しかもそこから廃棄物は出てきますし、人間の暮らしからも廃棄物が出る。この廃棄物そのものが、非常に大きな課題になってきております。これが皆さんもよくご存知の、ひとつの環境問題です。それと、この廃棄物をできるだけ元に戻そうといったことが考えられてきている。そんなことでもしないと、地球がいくつあっても足りないという時代になってしまったというのが、人工物転換の世紀がもたらしたひとつの問題点だと思っています。

先ほど「競争と合理化の世紀」と申し上げましたが、この中で集中させ、システム化をどんどん進めるということは、視野が非常にグローバル化するし、世界市場の中でものを見るようになったという意味にお

いて、たいへんいい面もあったわけです。ところが今度は、集中化・システム化して生産する場合、一番安易な方法としては大量生産することなんですね。大量生産しますと、たくさんものができますからそれを売らなければならない。となると、先ほども申し上げましたように「前のものは捨てなさい、これがいいですよ」と欲求を開発し、それがなくても過せる人たちに対してまでも欲求を開発していくことも、一方では起こってきた。その結果として、そういった企業を抱えている国が多くの富を持ち、他方では富のない国があるという、富が偏在する現象が生まれました。ちょうどひと月前にＮＨＫが「60億人のデータブック」という番組を放送しておりましたが、その中でアフリカの西の方にあるシエラレオネという国が、民族紛争の中で他の民族の人間を捕まえると、生産活動ができないように手や足を切り落とすと伝えていました。ですからそこでは非常に飢えが進行しているそうです。一方では、これは特にアメリカが典型ですが、肥満に苦しんでいる人が多いという。これは、富の偏在を象徴的に表しているひとつの例ではないかと思います。実は２週間ほど前に、東京のＮＨＫのスタジオパークに行くことがありまして、そこでこの「60億人のデータブック」の取材をした記者が「シエラレオネへ行ったが非常に辛かった。というのは、自分はこれを伝えなければいけないのだが、その一方では目の前にいる子どもたちに何もしてあげられない。その辛さを抱えて日々を送った」と話していたのが、私には非常に印象的でした。こういう問題点を、20世紀は残してきていると思います。

ですから20世紀がもたらした課題とは、今お話したように地球の有限性の認識、そして富の再配分と価値観の衝突。一方で飢餓で苦しむ国があり、一方で肥満に苦しむ国があれば、当然そこでの価値観は衝突します。この課題を解決していくための可能性が果たしてあるのかということを、今後考えていかなければならない。そういう面で、科学と技術に対する期待は非常に大きいと思われます。

科学は「生き方を求める学問」

そこで実は、科学と技術というのは全く異質のものであることを知っておいていただきたい、というのが今日のお話の中心です。「科学技術」とよく言いますし、今回のＲＹＬＡも「人間・自然・科学技術」という表題がついておりました。ところが、昨日のカウンシル・ファイヤーに行く途中に灯がありまして、そこでは科学と技術が別に書いてあった。あれは私にとっては、非常にうれしいことだったわけです。

科学の基礎とは何かと言いますと、もとは人間の知的欲求、あるいは知的好奇心です。だからある面では、かなり心豊かでないとできない部分があるだろうと思います。それに対して技術の基礎とは、よりよい生活への欲求だろうと思います。安全安心で充足した暮らしを求めるということです。ですから、「生き方を求める学問」とまでは科学は言えないかもしれませんけれども、人間の知的欲求から出てきたということでは、科学はそれに近いと思います。その中で本当に生き方を求めていく学問としては、

プラトンやアリストテレス、孔子といったような人たちがいる。私は、大学のことをいろいろ考えた中で、大学の原点のようなものがここにあるのかなと考えたことがございます。何が原点かと言いますと、こういうすばらしい師がいたら、その師を求めて人は集まってくる、これが本来の大学のあり方ではないのか。その点は、今でも間違ってはいないと思っております。ですから本当にいい大学にするためには、大学に非常に優れた人がいて、その人を目指して皆が集まってくるということが、非常に大事なことのひとつと思っているんです。

では、これらの欲求は誰のための欲求であったのか。大昔の奴隷制の時代ですと、おそらく支配層の欲求だったと思います。ただ、支配層の欲求だけで奴隷制の時代を片づけていいかどうかは、最近少し問題が出ています。例えばエジプトあたりだと、自然への恐れの中で、いろいろな部族たちがそれを占い守ってくれる人を王として立てよう、ということからスタートした。早稲田大学の吉村教授が、ピラミッドを造った時は強制労働だったのかという疑問に対して、「用事があるから休ませてくれ」と書かれた文書が発見されたという話をしておられました。ということは、完全な奴隷制の時代でもそういう自発的な部分もあったのかなとも思っております。また、生産者、例えば農業に従事している人が「これを採用すればどれだけ楽になるかな」といったことを考えるために、技術を求めることも多かった。そして最近は、よりよい生活への欲求になってきているんだろうと思いますが、こういった側面から、どの人たちの欲求かということは時代によってずいぶん違っていると思います。

近代までの技術は「職人」が生み出した

そこで、近代までの技術について少し考えてみたいと思います。近代までの技術と言いますと、医療については古代から様々な形でずっと続いてきているようです。「医学の歴史」という本を見てみたら、メソポタミアやエジプト文明の時代で既に脳内手術まで行われていた。ただ、成功したかどうかはわかりませんが、そういうこともやろうとしていたといったようなことも書かれていました。それからピラミッドの建設も、あれだけの石を一定の方向にきちんと並べるのは、非常にすばらしい技術だと思います。また、古代ローマで典型的に見られる道路。これについてはローマだけでなく、軍事的な目的では中国の秦の始皇帝も非常に大きな道路をつくっています。水道だとローマがかなり有名ですが、こういった土木工事が技術的に非常に進んできた。ですから今でも、土木工学はCivil Engineering（市民工学）と言います。

それから農耕技術については、近代までは馬や牛を使ったらどうなのかとか、水をどうやって上げるかなどにかなり苦労しています。ただ、人間の頭の中というのはそれほど大きく変わらないもので、私の専門領域でお話しますと、エジプトで深い井戸から水を上げる時どうしたかというと、井戸の途中に水溜めをいくつも掘って、そこからまた上げるというやり方をしていました。これは今の時代でいきますと、その辺

にあるポンプと同じで、ポンプを大きくせずに圧力を上げるためには、ある程度の大きさで一旦圧力の上がった水を次のポンプに回し、それをみんな重ねてひとつのポンプにしています。ですから人間の考え方というのは、大きくは変わっていないと思える。そして印刷技術。これはグーテンベルグが有名です。

そのほか、近代までの技術で非常に重要だったのは軍事技術。これは、戦があちこちで起こる中で非常に重要だったし、道路もそういう面では非常に大切なものでした。それから今後の支配をどうしていくかを考える上で、占星術が昔は非常に大事にされた。昨夜もきれいな星が出ていましたが、この星の運行というのはたいへん規則的になっているように思われます。下から見ていると、太陽と同じで毎日ぐるぐると回っている、だから天というのは非常に規則的な秩序を持ったものと考えられていました。すると自然への恐れや、自分の将来への恐れが湧き、これらを知りたいと思う。そのためには、自然の流れの中で何とか知ろうとしたはずで、おそらく支配層は強く占星術を信じ、大事にしていたと思われます。そしてもうひとつは、錬金術。私は物理の出身なので化学のことはよくわかりませんが、化学のもとになったのはこの錬金術だそうです。錬金術というのは、もともと金を作るだけが目的ではなくて、金属や様々な物質を相互に変換していく中で、何とか価値の高いものを生み出そうという手法です。こういうものが近代までの技術でした。

その後、蒸気機関が出てきて産業革命が起こる。このあたりまでが近代かなと思いますが、ここまでの話でひとつ気づかれたことがあると思います。それは、私が個人名を挙げたのがグーテンベルクくらいで、ほとんど誰の名前も挙がっていないことです。軍事技術でアルキメデスの名前が挙げられるくらい。やはり、生活の中でいわゆる「職人」と呼ばれる人たちが考え出したものが、近代までの技術だったろうと思います。そういう意味で、ほとんど名前の出てこない人たちの大きな努力が、生活を支えてきていたということです。

世界各地に大学が誕生した中世

ところがそれに対して、近代までの科学と学問ということになりますと、ここには非常に多くの人名が挙がってきます。というのは、自分の知的欲求を満たすためにいろいろなことを考えたということと、昔は考えることのできる人、つまり暮らしに余裕のある人しか考えられなかった。ですからその人たちは、有名人として名前が出てきます。すなわちギリシャからローマにかけては、プラトン、アリストテレス、ピタゴラス、アルキメデス、ユークリッドなど。また、天動説を唱えたプトレマイオスは、占星術とも絡んで星がどう動くかを研究した。空を見ていると、規則正しく運行しているように見えるので、それをもとにして星がどう動くかを一生懸命調べたわけです。ところが中には規則正しく動いてくれない星がある、これが今の言葉でいう惑星ですが、それも説明するため、ひとつの円に対してまた円を重ねるというように非常に苦労して研究したわけですが、当時としてはたいへん見事な体系を作ったのがプトレマ

イオスです。

これが中世になりますと、アリストテレスとキリスト教の神学が大きな影響を与えたようです。医療はたいへん重要ですから進歩していきますが、宗教と先達の教えから何かを導き出そうといったものの考え方に変わってきた。ですからこの時代は、あまり人の名前が挙がらないわけですけれども、実はこの中世の時代に、大学というものがずいぶんたくさんできています。皆さんが名前を聞いたらすぐわかるような大学名をここに並べてみましたが、まず一番最初に歴史上に出てくるのがイタリアのボローニャ大学。1088年にできていますが、このボローニャ大学は今の大学に近い形だったようで、学びたい人たちが集まり、学問や研究のために自分たちの力を中心にしてつくられたと言われています。それとは別に、宗教の影響を強く受けてできた大学などもあります。パリ大学やオックスフォード大学、ケンブリッジ大学などがそうです。ただ、この中世の学問の中で、これは本当かどうか笑い話のようにも思えるんですが、ある動物の研究をしている人たちが集まった学会で、馬の歯が何本あるかという疑問に対して、様々な文献を出してきていろいろ意見を言い合った、しかしその中の誰一人として馬の口を開けて見た人はいなかった、というような学問もあったようです。だから文献の考証はするとしても、そんな具合の研究だったようで、実際に行って結論を出すという近代科学は、16世紀後半になってやっと出てきたものです。

私は昨年、学長を辞めましてから1度行ってみたかった、ケンブリッジ大学にまいりました。ここは、先ほど申し上げた友近先生や巽先生も学ばれた大学であり、理学で非常に有名な先生方が居られた大学で、それを外から眺めてやろうと思ったわけです。ケンブリッジ大学というのは、本当はそういう名前ではなく、キングスカレッジ、トリニティカレッジなどいろいろな大学の総称です。このような大学が並んでいる中のひとつに入りました。大学内は本当に修道院のように静かでした。その大学を出たところに道がひとつあるんですが、その道幅はちょうどここと向かいの建物との間くらい、車が1台通れるかどうかという程度でレンガ舗装をしていました。ですから私は、ケンブリッジの駅から大学へ向かう時にタクシーに乗せてもらって「ここがキングズカレッジですよ」と言われて降ろされた時には、本当に運転手は大学に連れてきたのだろうかと思ったほどでした。そのキングズカレッジの向かいには本屋や喫茶店が並んでいるんですけど、そこからちょっと入ると近代的な繁華街になっている。だから学ぶ場所と普段の生活地域とが、小さな道を隔ててきちんと分けられている、やはり学ぶ場所と生活空間、そして生活をエンジョイする場所というのは、そのようにきちんと分かれている街づくりができていること自身が、非常に大きな力になっていくんだろうなと思いました。ですからイギリスでは、その道ひとつを隔てた生活の場所には、学ぶ場所から本を抱えてやってきて、そこで議論をしている学生さんたちがたくさんいました。そういうことも、学ぶという点では必要なんだろうと感じたわけです。

「物理学とは何だろうか」

それではこれから少しお話したいのは、ニュートン力学が成立するまでの科学者の考え方について、そしてその中にどんな問題点があったのかということです。さらにその後で、蒸気機関が誕生した時、科学がその蒸気機関からどんな影響を受け、どうやって20世紀の科学に進んできたのかについてお話したいと思います。

これからは、湯川秀樹先生の後でノーベル賞を受賞した朝永振一郎先生が、亡くなるちょっと前に書かれた岩波新書の本「物理学とは何だろうか」からいろいろ学ばせていただいた上でのお話をしたいと思います。その本には数式がほとんどありません。物理学そのものとは何かについて一生懸命説かれた本です。私は京都大学に通っていたんですが、朝永先生も京都大学のご出身だったということで、時々講義を聴かせていただいたことがあります。その時、朝永先生はなかなか難しいお話をたくさんされまして、それについてはほとんど忘れてしまいましたが、今でも覚えていて大事にしていることがひとつだけあります。物理というのはたくさん式を書き、それを計算してこうなるというのが常ですが、朝永先生は「数学というのは外国語なんだよ。外国語であるからには、日本語でその式を説明できなかったら、その式を理解しているとは言えない。だからどんな式を書くにしても、必ずその式に対して日本語できちんと説明できるところまで考えなければならない」とおっしゃられた。その言葉だけはずっと忘れないし、私はずっと守ってきたつもりです。その一言が、我々には非常に教訓的だった。ついでにお話しますと、湯川先生がノーベル賞を受賞された後で、日本に「湯川記念館」という施設ができまして、現在は「理論物理学研究所」という名前になっていますが、そこで国際会議があった時、日本側の人たちはその前の晩に、会議で何を発表するかについてずいぶん議論したそうです。そして皆さんはいろいろな式を書いていた。その時、もう亡くなられましたが、武谷三男先生という方がおられまして、その先生がたくさん書かれた式のひとつを問題にして、「これは何を意味しているのか」とたずね、それについて議論するのに朝の4時くらいまでかかったそうです。それが、翌日の会議で日本代表として発表された時には、世界的に認められたということで非常に有名になりました。ですから朝永先生に言われた、「日本語でしゃべらなきゃいけない」というのは今お話したような意味で、難しい式を書いたその人はそれに何の意味があるかを一生懸命考える必要がある。ただ自然現象だから、数学とはまた違うことをしっかりやりなさい、ということを踏まえて朝永先生がこういう本を書いておられるということなんです。

近代の科学がどう発展してきたのかの典型的な例として、ニュートン力学の成立までの話をさせていただきたいと思います。皆さんご存知のように、コペルニクスは15世紀から16世紀にかけて活躍し、地動説、すなわち我々のいる地面が固定されているのではなく、地球自体が動いているという説を唱えた人です。ただ、朝永先生の本によりますと、コペルニクスはその当時、教

会やアリストテレスの考え方に強く影響されていて、相対的に見れば動いているとしても説明可能といったような解説をつけて、教会の追及を逃れたということのようです。その後、ルドルフ二世という王様が非常に占星術に凝っていたため、占星術の研究所をつくってティコ・ブラーエという人にその研究をさせていた。ただ、ティコ・ブラーエは観測に関しては絶対に妥協を許さない人だったので、ティコ・ブラーエの観測結果というのは望遠鏡を使わず緯度計などで計っていたようですが、今でも通用するくらい、非常に精度の高い観測をしていたんですが、どうも数学的にそれを解析することは得意でなかったため、ケプラーを弟子にした。ケプラーはその観測結果を数学的にとりまとめて、非常に厳密で数学的な推論をたてた。ケプラーは「新しい天文学」という本を書いたわけですが、始めはプトレマイオスの天動説をもとに計算していました。主な計算の目標は火星だったようですが、天動説で計算したら8分ほど結果が合わなかった。8分といってもほんのわずかですから、普通なら「それくらい合わなくても、まあいいじゃないの」となって納得するものなんですが、そこを納得しなかったのがケプラーのすごいところでした。妥協しない精神をきっちりと持っていたようです。それで、ケプラーが一生懸命計算した結果として出したのが、「ケプラーの法則」です。これはどの教科書にもよく書いてありますが、大事なのは「すべての惑星は、太陽を焦点とする長円上を運行する」という点で、とにかく太陽を動かないものとして惑星を計算すれば、きっちりと合うということを示した点です。ですからその面では、地動説を正面から考える必要があったんですが、それを言っても大丈夫な時期に来ていたということもあります。そしてあと2つの天体の法則を発見したわけです。

古い考えに縛られた天才たち

ただ、ここで思うのは、人間とは非常に悲しいもので、古い考え方からなかなか抜け出せない。というのは、ケプラーの「世界の調和」という本では、「効果的な占星の原因」とか「占星術の拠り所たる自然について」など、占星術のことがかなりを占めている。ただ、ケプラー自身は、最後の方では占星術自体を信じなくなっていたようですが、自分のものの考え方の中でひとつのきっちりとした体系を見つけたいという思いもあった。でもそれがなかなか見つからなかった。ケプラーは「太陽が中心であり、太陽が動力源だ」と言っているわけですが、ではその力は何から出ているかというと、「運動霊の全能な力から出ている」という言い方をしていて、まだまだ霊という考え方を捨ててなかった。ではその運動霊が、ほかの惑星までどうやって届くのかという質問には「それは運動霊が走っている力である。その証拠は太陽の光だ」というような言い方をしております。また、それが世界の隅々まで行くのはどうしてかについては、「磁石のアナロジー」と解説した。そういう点で、なかなか古い考え方から抜け出せないところがケプラーにはあったし、こういう天才にもそんな面があったということは非常に象徴的だと思います。

その後、ガリレオが出てまいります。ケ

プラーとかなり時期が重なっているわけですが、ガリレオは初めて「実験」を行った。これを細かく言っていると時間が足りないのですが、それで発見したのが「振り子の等時性」。また「落体の運動は等加速度運動である」という法則も発見し、これは自然の運動であると彼は言っています。このあたりはアリストテレスの影響をかなり受けていると思われますが、アリストテレスは「天界の運動は秩序のある運動であり、地上の運動は固有の場所に物体が動いていこうとする運動である」とし、天界の運動と地上の運動をはっきりと峻別しました。その点では、ガリレオもそこから抜け出せていないといえます。

ガリレオが発見した重要な法則として、「慣性の法則」があります。アリストテレスは大地が不動であると言い、その証拠に高い塔から物を落とした場合、大地が動いているなら真下に落ちないはずだと唱えました。それに対してガリレオは、では動いている船のマストの上から物を落としたらどうか、やはりマストの真下に落ちるから、それが大地不動の証明にはならないと反論した。動いているものに乗っていたら、それと同じ速度で動きますから、物を落としても同じというのは、今の考え方でいけば当り前のことなんです。ということで、ここで「慣性」ということをはっきりと打ち出した。だから大地と同じ運動をしている私たちは、そういうことは知覚できないと言った。そして、そのことを使って落体の運動と慣性とを合わせ、運動の計算式の基礎を与えたのがこの「慣性の法則」でした。そういった原理を基礎として、その上に展開するのが論証科学の特徴であり、ガリレオは論証科学が必要であると言いました。ただ、先ほども申しましたように、アリストテレスの自然学の名残りはなかなか抜け切っていないと言えますし、非常に調和の取れた運動とはやはり円運動だとガリレオは考えていたようです。ですから大地と同じ運動をするといっても、地球がまるいとしても短い範囲だから直線と考えていいのだ、という註釈をわざわざつけていたりして、ガリレオもそのあたりの理解は十分ではなかったわけです。

今も不滅の「ニュートン力学」

ガリレオが亡くなったのが1642年です。そしてニュートンが生まれたのも1642年。ガリレオが亡くなった年にニュートンが生まれているというのは、これもケプラーではないですが”自然の配慮”かなと思います。ニュートンについては皆さんもよくご存知と思いますが、非常に大きな功績を残し、今の時代も「ニュートン力学」は不滅のものとして残っております。そのもとになったのは、微積分学の発見でした。そしてニュートン力学は、「基本的な法則をもとに数学的な論証に基礎をおく」として、非常に少ない基本的な法則でいろいろなことを説明しようとしたわけです。先ほどのケプラーの天界の法則と、ガリレオの地上の法則は、ニュートン力学の体系だとすべて説明がつきます。ですから、天界と地上とを区別する必要は全くなくなったということで、ここに非常に大きな発展がある。それに、ニュートンになって初めて、昔から引き継がれていたアリストテレスの自然学

の流れがここに断ち切られていると思われます。しかし逆に考えれば、アリストテレスはすごい人だったとつくづく思うわけです。

それともうひとつ、ニュートンの大きな発見は「万有引力の法則」。これは、どんな物体であれ２つの物体があれば、その間にはお互いを引き合う引力がある。そして、２つの物体の質量と距離がわかれば、それで引力は決まってしまうというものです。では万有引力はどうして出るのかというと、それにはまだまだ課題が残っていまして、今の物理学に引き継がれておりますが、自然界で物体の間に働く力というものをはっきり示した点では、非常に大きな功績なんです。

近代の物理学になると、もっと違う力が出てきますけど、非常に大きな物体同士の間ではこの万有引力によって、天界と地上とを統一できたということです。このニュートンは、先ほど申し上げたケンブリッジのトリニティ・カレッジで教授をしていたんですけど、そこで書いたのが「プリンキピア」という本です。せっかくですから、皆さんが高校で習ったニュートンの運動の法則を、ここに並べておきます。１番は「慣性の法則」。外力が加わらないかぎり、止まっているか、あるいはある速度で走っていれば、いつまでもひとつの直線上を走る。ガリレオの場合は、まだ円運動に執着していましたが、円ではなくひとつの直線を走るということです。これはアリストテレスの見解ですと、始めも終わりもない直線は考えにくい、始点があれば終点があるから元に戻るはずだといったことが基礎になっています。しかしそうではなくて、ひとつの直線上を走るというのが、ガリレオの慣性の法則をさらに深めた。それから「運動量の変化は力に比例する」、その比例係数なるものが質量なんですが、これを「質量比例係数」といっていいかどうか。いろいろな質量の考え方があり、私も「物体に固有の量として」という言い方しかできないだろうと思っていますが、その「質量」というひとつの概念で、地上にある物体から星のようなものまで全部まとめてしまったというのは、ニュートンの非常に大きな功績だろうと思います。

それから「作用と反作用は常に逆向きであり等しい」というのもニュートンの法則です。いろいろな運動があるのに、なぜこんなに簡単な法則でまとまるのかということが問題になります。それに対しては、例えば高い山からある物体が打ち出されたとすると、打ち出した時の始めの速度が遅かったら、すぐそこで止まる。速度が速かったらどんどん遠くへ落ち、非常に速度が速くなると地球から離れていってしまう。ですから、一番最初に打ち出す速度のことを「初期条件」と言いますけれども、その初期条件ですべてのものは決まってしまうということなんです。その後は力の性質によって決まり、決まった軌道を通るということを、ニュートンは主張しました。つまり運動の多様性は、初期条件によるということになります。

技術が科学に与えた影響

こういうことで、ニュートンの力学は非常に大きな成果を挙げました。今までのお

話で特に強調しておきたいのは、旧来の考え方から抜け出すというのは、ケプラーやガリレオといった天才であっても非常に困難を伴うということです。ただ、ニュートン力学にそれが集約されたことで、ニュートンが哲学的にも新しい世界観を作り上げたようなインパクトを持った、それだけの力が科学にはあったということです。

これからのお話は、今度は技術が科学にどんな影響を与えてきたのかということです。皆さんよくご存知のように、産業革命が起きた原因は蒸気機関の発明です。最初にできたのは、ニューコメンの蒸気機関。産業革命の時代には、これが非常に有効に働きまして、石炭の掘削などにかなり威力を発揮した。ですから、ワットは蒸気機関を発明したのではなく、ニューコメンの蒸気機関を改良したわけです。ワットは何に気づいたかというと、ニューコメンの蒸気機関をそのまま小さくした模型がグラスゴー大学にあり、そこで本物と同じように動かそうとしたら、全く動かなかった。ワットはこういった模型などを大学におさめる商売人でしたが、かなり科学的なセンスを持っていたようで、なぜ動かないのか考えていた。そこで蒸気をたくさん入れると動き出した。ただものすごくたくさんの蒸気が必要とわかり、その時ワットはあることに気づいたんです。これは今では当り前のことですけど、蒸気でピストンが上がってから水を入れると凝縮してピストンは落ちるわけですが、水を加えたために周囲の壁は冷えている。次に蒸気でピストンを上げようとすると、その壁を温めて蒸気が凝縮しないような温度にしなければならない。つまり壁が冷えていることが原因だと、ワットは発見した。そこでワットは蒸気機関を改良したわけですが、そのおかげで非常に生産量も上がったそうです。

ただ、ワットも改良にはずいぶん苦労したようですが、それを助けた人がグラスゴー大学の先生で、それまでわかっていた熱の知識などをワットに教え、一緒に考えた結果だったそうです。こうして蒸気機関は、産業革命の非常に大きな原動力になりました。

新技術から科学者が導き出したもの

そうやって技術屋さんは、さらに車をつくるまでに進歩していったわけですが、それに対して科学屋さんはどんなものの考え方をしていたんでしょうか。技術屋は、「とにかく改良して効率のいいものにしていけばいい」という考え方をするわけですが、蒸気を入れて水で冷やすということは、温度の高い熱があり、外側に温度の低い熱がある、その2つの間で行われているのが熱機関だろう、とするとこれを理想的な形にしたらどうかと考えたのが、カルノーという人物です。カルノーの機関は、逆向きに動かしても動くということと、一番効率のいい機関であり、その効率とは高温の熱源温度と低温の熱源温度だけで決まるから、中に入っているのが蒸気であろうと空気であろうと全く作業物質にはよらない、という結論を導き出しました。科学者になると、こういうことを考えるわけです。

そしてこの「カルノーサイクル」が、その後の科学発展に大きく寄与することにな

ります。それは何かというと、この時問題になったのが、運動している物体からエネルギーを取り出すという場合だと、速度が0になるところまでエネルギーが取り出せるはずである。しかし熱は、低温熱源が必要だから、高温の熱源から完全にエネルギーを取り出すことはできない、ではなぜ低温熱源が必要なのかという話になった。だからカルノーの説は間違っている、といった議論が出てきました。しかしその時、クラデュースという人が、それをそのまま受入れようではないかと説いた。「熱を全部使い切ってしまうような機関は存在しない」という言い方をしておりまして、それが「エントロピー」という概念につながっていきます。理系の人はこのエントロピーにはずいぶん悩まされたと思いますが、この理屈はいいとして、何を与えたかと言いますと、その当時から熱と機械的なエネルギーとは性質は同じものということが知られていました。そうすると、熱エネルギーを使っていく場合にその変化の方向は、エントロピーの量が増大する方向でしかない。簡単に言いますと、世の中にひとつの秩序立ったものがあるとしたら、その秩序はだんだんと壊れていく方向しかないということです。エントロピーとは、端的にいえば秩序立っているかどうかを示す量と考えてもらったらいい。だからエントロピーが大きくなっていくとは、だんだんと秩序立っていないということになります。そのように理解しますと、人間の場合は、秩序立ってだんだん成長していくわけですから、エントロピーはむしろ減少していく。なのにこの法則はなぜ成り立つのかというと、実は宇宙全体で考えた時にそうなるということなんです。ですから、何か秩序立った部分があるとしたら、もっと秩序立たない部分が周りに増えていると主張しているのがこの法則です。これこそ、20世紀の物理学の基礎になる考え方です。ただ、こういったことを考えたカルノーも、熱には「熱素」というものがあって、それを出し入れすることで熱は伝わっていくという考え方をした。本当は熱は、秩序立たない分子の運動によって起こるものなんですが、熱素説からカルノーは逃れられなかったということで、やはり古い考え方から抜け出せなかったわけです。

ということで、エネルギーの保存則と、変化の方向を表わすエントロピーの増大則が出てきたのは、19世紀です。これがもとになって、近代科学は非常に進みます。原子論はギリシャ時代からあったものですが、20世紀になると原子の研究も広く認められるようになり、量子力学も出てくる。さらに皆さんもよくご存知の、アインシュタインの相対性理論が出てくるということです。アインシュタインの相対性理論にしても、光の速さを超える速さは絶対存在しない、そして光の速さは一定であるという説を認めようということから導き出されたものなんです。これで、質量とエネルギーが同じであるという考え方も出てきました。ですから、今までの考え方と違っている部分を、そのまま素直に認めてそれから先へ進もうという考え方をするようになったわけです。

科学と技術が並行して発展

19世紀末から20世紀になりますと、科学を技術に使おうという動きが進みます。例

えばファラデーが発見した科学的な法則の電磁誘導が、ジーメンスの発電機になるまでに30年間を要しています。それに対して、相対性理論や量子力学が出てからまもなくの1939年に、原子核が２つに割れることが発見された。その割れた２つの質量を足したら、始めの質量よりも小さくなった。アインシュタインの質量とエネルギーの同等性を基礎として、この発見の年か翌年に、イタリアのフェルミは「原子核を分裂させることで爆弾ができるし、エネルギー源になる。発電もできる」と提唱した。しかもこの技術の進歩が早かったのは、おそらく戦争のせいだと思いますが、原子爆弾ができるのにたった６年しか要していない。これはフェルミの提唱をきっかけに、各国が必死になって原子爆弾を作ろうとしたということにあります。日本はこのおかげで非常に悲しい目に遭いましたが、ただ、将来のエネルギー源としては重要なものだし、これで太陽のエネルギー自身も説明できるということになっております。原子力発電も、それからほどなくして実際に動き出しています。それから、半導体やトランジスタは量子力学から生まれた成果です。半導体やトランジスタの発明は、科学的に研究するのと、実際にものを作るのとがほとんど同時進行で行われたわけですが、その発明のおかげで電子機器が非常に小さくなりました。私は大学院生の時に、湯川先生達のお供として初めて電子計算機を見たわけですが、それは電話の交換機みたいな部屋にあって、そこに真空管がいっぱい並べられていた。とにかくこれで高速計算できるから、湯川先生にぜひ使ってほしいと言っていましたが、それほど大きな計算機を現在のものにまで小さくできたのが半導体です。それが私の学生時代ですから、1950年代半ばの頃は計算機というのはそんなものだったということです。

さらに生命科学の分野も非常に進歩しました。ＤＮＡの構造やタンパク質の三次元構造が解明され、1973年には遺伝子の組み換え技術が成功しています。というわけで、あらゆる面で科学を技術に使っていくことが急速に進歩した。最近は半導体やトランジスタの場合のように、科学と技術が並行して発展していくことが必要になってきていると思います。

その他の科学的成果としては「プレートテクトニクス」。これは何かというと、地球の構造として、太平洋プレートとユーラシア大陸プレートが衝突して日本海溝ができた、だから海の底は動いているという理論です。これは防災面で、たいへん役立っている考え方です。また、二酸化炭素やメタンの排出による温室効果の警告も1967年に出ていますし、オゾンホールの発見が1985年にされている。環境ホルモン研究の提言も1997年に発表ということで、ここ50年ほどの間に、地球環境に対する認識も非常に大きく変わってきていると言えます。

「３Ｒ」で地球の有限性に対応

さて、地球の有限性をどう解決していくか、そして富の再配分と価値観の共存、これらを真剣に考えていかないと、これからの地球はおそらく危ないだろうと思います。そのためになされていることと、それに対して何を考えなければならないかを最後に

お話します。まず、地球の有限性について、いわゆるエネルギーや資源をどうするかについてですが、これは日本でも様々な法律ができております。環境基本法、循環型社会形成推進基本法、廃棄物処理法、資源有効利用促進法、そしてこれらの下にリサイクル法がたくさんできて、最近は冷蔵庫を買い替えようとしたら、古い冷蔵庫については廃棄料としてお金がいるというシステムになっております。こういった法律が整備されている中で、地球の有限性に対しては「3R」、すなわち資源を使わない（Reduce）、またできるだけ再使用しよう（Reuse）、さらにできるだけリサイクルしよう（Recycle）という考え方が進んでいます。有限性に対しての対応としては、今後こういったことをもっともっと意識してやっていく必要があると思います。

こういうことを踏まえてのひとつの例として、日本機械学会誌に出ていた記事を拝借してあるパソコンの会社が出した設計目標についてお話します。まず「原材料の省資源化」、これは当然のことでございます。そして「作る過程から捨てる過程まで、環境負荷を最小にしよう」。これは例えば、ダイオキシンを発生する物質は使わないなど、いろいろあると思います。それから「できた製品はできるだけ寿命を延ばそう」という考え方。これはメーカーにとってはありがたくないことだろうと思うんですが、これからはやはりその方向をとらざるを得ないだろうということです。この点、コンピュータの場合はわりと簡単でして、使用するソフトが変わってくれば、グレードアップしたものにどんどん対応できるような機能を始めから入れておくことで、かなり寿命を延ばしていくことはできると思います。それともうひとつ、「再使用する、あるいはリサイクルすることを始めから考えた製品を作る」という考え方も、今後非常に大事になってくると思います。グレードアップしたコンピュータを使うとき、使えなくなった従来のコンピューターは、そことは別の分野で使ってもらうようにする、という考え方とみていいと思いますが、これについては実際に行う可能性が十分あると思います。企業などですと、どんどん新しいものに入れ替えていかないと追いつかないという場合がありますから、そこで不使用となったものを、例えば教育機関なら十分使えますし、その目的によっては家庭のコンピューターとしても十分利用できる。だからそのためのシステムをきっちり作ろう、という考え方です。そして「どうしても使えなくなった時でも、環境負荷がかからないようなものにする」、つまりリサイクル資源に使うということ。これも今後非常に重要になってくると思われます。さらにこの会社の設計目標の中には、例えば2つのプラスチックのものをつなぐ場合は、後で簡単に外せるような設計をして、その2つそれぞれにどんなプラスチックが使われているかをきちんと明示する、といったことも含まれています。

以上のように、地球の有限性に対してはこういう対応ができる。では、富の再配分と価値観の共存の可能性についてはどうでしょうか。それには、未来の人類社会で、本当に皆が幸せになるために求めるものとは何かについて、まず確認しておく必要が

あると思います。それは当り前のことですが、心豊かで安心、安全な、充足した便利な暮らしです。このもとになっている考え方は、心豊かな暮らしというのは、人間は知的好奇心を持っているということ。これは非常に重要なことだし、今後ますますこれを増やしていくことで、その後の暮らしも良くなると思われます。むしろ科学の最初の基礎がこれだったということは、先ほど申し上げたとおりです。また、安心できる暮らしとは、ただ生存していくだけでなくて、いろいろ違った価値の人たちが共存していかないと成り立たないものだろうと思います。

話はちょっと脱線しますが、私が学者になった後、理学部のある先生が「社会に役立てと言われるが、理学という基礎的な研究をしている我々に一体何をしろと言うんでしょうか」、つまり自分たちは社会に役立つようなことはしていないとおっしゃった。私は、それは大きな間違いだと言って、その先生とかなり議論をしました。人間は知的好奇心を持っているし、宇宙の果てがどうなっているか知りたいと思う。それを皆さんに知らせてあげること、それだけでもあなたは十分社会の役に立っている、だから「社会に役立つ」ことをそういう面からもしっかり考えてなければいけない、と話してやっと納得してくれました。ですから、人間が必ず持っている知的好奇心に応えるようなことをしなければならないという面では、基礎科学を研究する人はもっと自信を持ってほしいと思います。

科学を部品化した技術は危険

さて、科学と技術についてはさっきお話しましたが、私が今、非常に危険に思っていることがひとつございます。それが現在の「科学技術」という言い方です。この言い方をされた時、それをそのまま受け入れて何が危険なのかというと、科学は非常に専門分化しています。そしていろいろな技術を開発しようとする人は、その開発のために自分に役立つところだけを取り込み、またそれだけのことを科学者はしてくれたらいい、という考え方をする。つまり、技術に対して学術が部品化してきた。だから科学と技術をひっつける限り、そういうことが起こります。しかもむしろ指導者的立場の人、政治家や経済界の人たちに、こうした部品化に対する発想が強いように感じます。今の経済を発展させていくためには、それに役立つ部分だけをしっかりやってくれればいいということです。さらには科学を部品化してものをどんどん生産していくために、集中や効率化をもたらす技術というのが、「科学技術」という言葉の背後にあるわけです。それは先ほどもお話したように、非常に大きな富の偏在を生み出してきていることも事実です。だから、そろそろ科学と技術は離婚しよう、ただし離婚しても仲の良い友達でいこうと言っています。実際の企業の技術屋さんはこのことを非常によく知っていまして、「そんな姿勢では新しい設計はできない」「新たな発展のためには、科学を技術のしもべにしてはいけない」と理解している方々がたくさんおられます。

それでは未来の社会に向けては、どのよ

うに考えていったらいいのでしょうか。まず、これまでお話してきたように、科学と技術はそれぞれの役割をきちんと再認識し、その上で助け合いながら進んでいくことが大事だと思っています。それから、富の偏在や価値観の衝突が起こっておりますが、これは集中合理化、効率化というものが中心に座ったものの考え方から生じておるように思います。そのアンチテーゼとして、「分散」していくことを考えなければならないのではないか。それがどんな社会構造になるのかといえば、それは私自身もわかりません。ただ、分散型のモデルというものが、これから必要になってくると思っております。分散型モデルのヒントになるのは、江戸時代の藩幕体制。あれはけっこう分散していて、それぞれの藩が独立していた。「お国替え」というのがあって、例えば松山藩だとたしか伊勢の方から来たんですが、そうすることによって文化の平準化が進んだし、各藩が独自性を持って生きていかなければならないということで、非常に努力をしていた。こうした幕藩体制は封建的といわれますが、これからの社会モデルの中でひとつのヒントにはなりうると考えています。

この4月から国立大学が法人化されようとしておりますが、それにあたっての一番始めの議論は「国際競争力のある大学だけでいい」「旧帝大が残ればいい」といった、非常に乱暴なものでした。それはおかしい、地方にある大学は地方大学としてきちんと役割を果たしてきたという主張を相当しましたし、その貢献が20世紀を支えてきたということも申し上げました。やっと最近になって、地方大学の存在意義が認められ、たいへん大事であるといろいろな文章でも書かれるようになりました。ただ、そういうところでの私の立場から申しますと、各大学がきちんと役割を果たしていくために、地方大学が力をつけるような施策をとっていく必要がある。これも、分散していく上ではたいへん重要なことになるのではないか。集中型で旧帝大にだけお金を投入しておけばよい、ということではなく、地方大学もそれぞれがしっかりと力をつけるような施策をとっていくことも、今後必要になってくるのではないか。これは、私が学長になってから特に主張してきたことなんですが、全体をみても、分散型モデルを考えていく上でのひとつのヒントになると思っています。そして、そこが力をつければ、全国からいろいろな学生さんが集まってくる。これを私は、江戸時代のお国替えになぞらえて「ミニお国替え」と言っています。全国から学生が集まってくるようになると、そこで各地の文化が伝わって、また広がっていく。ですからそういう面でも地方の大学は必要だと思いますし、これこそ今後の分散型を考えていく上でのヒントになると思っています。

それで新語をひとつ作ってみました。グローバルにものを考え、ローカルにものを考える、そしてもうひとつ「グローカル」ともよく言われます。グローバルなものをローカルに、という意味ですが、そこで私は逆に「ローカバル」があってもいいと思います。ですから「グローバル→グローカル→ローカバル→ローカル」とつながっていっていいのではないか（笑）。今後は「ロー

カバル」ということを考えていかなければならないのではないか、という主張をしております。

「自ら行動する」分散型社会へ

分散型という時に大事になるのは、例えばエネルギーにしても、今は大きな電力会社が非常に質の高い電力を供給しています。そして長い距離を運んでいますが、例えば電気をつけたり暖房したりする場合、あんな質の高いエネルギーは必要ない。そういうものについては、密度の低いローカルな風力とか、川の流れを利用した水力発電などでも十分賄えるわけです。徳島大学の中瀬先生が、小さな落差で動く小型水車を研究して作られた。それをネパールに持っていったところ、200戸くらいの家や学校の発電ができた。先生は、山登りの際にネパールのその地域でいろいろお世話になったので、住民にその恩返しをしたいという気持ちからしたことだったようですが、そんなふうにローカルな所でローカルなエネルギーだけを作っても、かなりな部分が賄えます。何も、周波数が一定の非常に高質な電気だけを使う必要はないのではないか。もちろん高質な電気も必要ではありますが、それぞれの使いわけをもっときめ細かく考えていく必要もあると思います。その意味で、現在はＮＰＯやＮＧＯの活動が非常に進んでおります。そういう人たちの活動が活発化しているということは、やはり分散型のものの考え方に変わってきているのではないか。お上にお任せするとか、お上から与えられたものというのではなく、自分たちの力で何とかしていこうという考え方に変わってきているという点で、非常に期待しております。

科学と技術という面から考えますと、この分散型モデルを作っていく上で、人文科学と社会科学というものが今後重要になってくると思います。アメリカあたりではナノテクとかバイオの次の目標としては既に人文科学や社会科学が挙がっていると聞きます。ですから人文科学、社会科学、自然科学を総合的に合わせてものを考えていかないと、これからの時代はやっていけない。そんな中で分散型モデルをどう作るか、集中・効率化に対するアンチテーゼをどう作っていくかが、これからは必要になる。そこで求められるのは、そこに住むそれぞれの人が「やってもらう」ではなく、「自分から何かをする」という自主性、自立性、そして各人の創造性を生かすことです。それが、これからの社会をつくっていくもとになるのではないでしょうか。その意味で私たちは、今こそ新しい社会をつくっていくすばらしい時期にあると確信して、ものを考えていってもいいのではないか。そのためにこのセミナーが役に立ってくれれば、私はうれしいと思っております。

井奥　本来、東野洋子さんをご紹介するのは今井先生が適役かと思うんですが、私が代理を務めさせていただきます。

アイドルの東野洋子先生でございます。ご職業は主婦であり、四天王寺仏教国際大学でカウンセリングの講座をお持ちになっておられます。それ以上にすばらしいことは、自閉症やダウン症の子供さんたちとともに、「楽団あぶあぶあ」を起ち上げました。また、彼らの次の世代の方々を集めまして、「ミュージカルチームＬＯＶＥ」というグループを結成されております。海外公演も活発にされております。このＲＹＬＡには、過去に何度か講師で来ていただきました。また、「あぶあぶあ」や「ＬＯＶＥ」のメンバーもここにまいりまして、受講生と共に楽しんだこともございます。また何年か先には、そういった企画をしたいなと思っております。

それで、彼女は壮大な夢を持っております。またその節にはライラリアン、ロータリアンの方々にご無理なお願いをするかもしれませんので、一言ご挨拶をいただきたいと思います。洋子先生どうぞ。

東野　何だか変でしょう。「アイドル」って言われても私は51歳ですよ。今の人は変です（笑）。

この島で、こうやって皆さんが明日のたくさんの人たちと出会う時のために、何か得られる機会をと、学び集うこのＲＹＬＡで、私も育てていただいています。それで今日は、講師というより、誰かのために明日のことを考えている皆さんたちにお会いしたいと思って、押し掛けて参りました。スピーチは番外で、さっき食事の前に言われて「ご飯が食べられない」と思いましたけど、全部食べました（笑）。お魚はちゃんと頭から食べましたか。ちょっと骨が固かったけど、あの揚げた魚は美味しかったですね。

それで、後ろのお父さんやおじいちゃんに見える人たちは、ここの講師をしたらいいような人たちばかりで、私もここでしゃべるのは一番緊張しますので、前の方だけ見てしゃべります。この余島に渡ってくる時に、ひとつ思ったことがあります。その話をさせてください。「今、世界中で誰もが正直に一番心配なことは何ですか」と訊かれた時、おそらく誰もが思うだろうことは、近い将来、自分の喜びを喜んでくれる人がいなくなるのではないかという不安。近い将来、自分が自分以外の人の喜びを喜べなくなるのではないかという不安。これは今の世界中の人の心の奥で、一番大きく巣くっているものではないかと思います。テロや戦争も起きます、環境もガタガタになっていきます。たしかに人が人の幸せを、少なくとも私は私の家族の幸せを願ってやったはずのことが、文明や文化の形になる時、あるいはたくさんの知恵となって重なっていく時、それはたしかに隣の家族の幸せにもつながっているばずだと思っていたのに、なぜか20世紀、21世紀と来た時、ひょっとしたら自分の家族の幸せさえも喜べなくなっているのではないか。例えば母が子供の幸せを心から願えなくなったら、子供が両親の喜びを本当に自分のもののように思えなくなったとしたらどうか。それだけなら個人単位の問題ですが、それがその隣の人、そのまた隣の人も同じで、そして世界の国

ごと、民族が違うといえばその中で、宗教が違うといえばその中で、考えが、主義が違うといえばその中で起きているように思われます。もう既に起きているのかもしれません。自分の喜びを誰もが喜べなくなる時代が来つつある。

余島を眺めてきたら、あの島にそうした不安を希望に変えてくれるような人たちが集まって、その人たちを余島が守ってくれると、ややロマンティシズムもありますけど、そんな力があるような気がしました。世界中の人が気づいていることのひとつのように、「スピリチュアルなものの健康」という言葉で表現されているような気がします。心の健康、体の健康、広い意味での社会的な健康。戦争が起きていると、社会として健康ではありませんし、テロはもちろんです。貧困も、もちろん健康とは思えない状態の社会になっています。でもその向こうにあるスピリチュアルな健康とは何だろうと、ＷＨＯやその他世界中の大きな機構でも掲げられ始めました。この島に集まった皆さんが、初めて会う私の話を聞いてくださろうとする中に、そのスピリチュアルな健康が宿っているように思います。

例えば、体が病気で明日の命も保証されないような大病にある人、心が病んでいる人、そんな心と体を持つ私たちにも、やはりスピリチュアルな健康はあり得る。ガンで亡くなるという人が、どんな健康な肉体を持つ人よりも、精神は健康ということは十分にあり得る。それがどうやら、「あなたの幸せを喜べない自分」を生まない、いくつかの条件のひとつのような気がするのです。ではスピリチュアルな健康はどこで見えるか、それは難しい。それを問うた人は、おそらく5000年くらい前からいらっしゃいます。哲学者だったり、宗教家だったり、いろいろな人が問うてきた。カントなども言っています。ガンジーやマザー・テレサなど、私たちが聞くだけですごいと思う人たちは、スピリチュアルな健康を持っていた人たちです。では身近にはいませんか。それはあなたです。そんな気がするのです。

皆さんが自分以外の人のことを大事と思う時、そこにはスピリチュアルな健康がもう既にある。それをつなぐだけで、多分うまくいく。テロや戦争も、それで必ずなくなる。いろいろな境目を越えてあなたのことを思う、それだけでスピリチュアルな健康はみんなが共有できるし、もうあると思う。それがあるから人間なんだと思うんですね。例えばこのＲＹＬＡでも、私は残念ながら講義を聴けなかったんですが、きっとそうしたことのヒントはあったんだろうと思います。今日、バズセッションでグループごとに分かれてお話をなさったと思いますが、それぞれが相手のことを聞こうとしたでしょう。自分の意見を、みんなにわかってもらえたらうれしかったでしょう。そこにあるんだと思うんです。つながっています。ここにいる人は全部集めても70人くらいです、つながっているのです。そうしたらうまくいきませんか。ここから先は、たしかにものすごく具体的なステップが必要です。「今日の話の中から生まれてきませんか」と思います。

この島に向かう船の中で、そんなことを考えながら「ああ、今年も来れた」と思ってこのＲＹＬＡにまいりました。さっき紹

介してくださいましたが、ダウン症や自閉症の人たちとはもう22年以上も音楽活動をしています。彼らは知的障害がありますが、やはり人の幸せを思える人たちです。彼らにも、この後聞かせていただく皆さんのお話を伝えて、そして皆さんの仲間に入れていただいて、明日の幸せをつくれる仲間でいてほしいと伝えたいと思っています。楽しみにしています。ではよろしくお願いします。

司会　ありがとうございました。心が透き通るようなお話でした。いつ聴いても感動がございます。ぜひまたこのＲＹＬＡにも、講演をお願み申したいと思います。

それではフォーラムに入りたいと思います。安平顧問、よろしくお願いします。

安平　東野洋子さん、ありがとう。すばらしいお話をいただきました。この感激をキャビンに持って帰って話されたらいいかなと思うんですが、このフォーラムがＲＹＬＡセミナーの一番重要な部分ですので、これから始めたいと思います。

やり方について、まず紹介いたします。これから各班ごとに発表をしていただきます。概ね10分から15分くらいずつ発表していただきたいと思います。発表の順番は、後ほどジャンケンでやっていただきます。勝った方が先にするということで、それぞれの班から１人ずつ出てきていただいてジャンケンをしていただきます。それで、まずひととおり発表していただいた後で、各班から２人ずつパネラーに出てきていただきます。パネラーは、何も責任をもって全部やらなければいけないというわけではなく、その班の口火を切って発言していただくということにしたいと思います。

安平　それではこれからの議論の方向について、東野洋子さんにこういう方向でやろうという提言をしていただきますので、お願いします。

東野　いいお話をいっぱい聴かせていただいて、うれしいなと思います。それで皆さん感じておられると思いますが、「色気とカリスマ」「スーパーヒーロー」「信頼できる人」など、本当はひとつですよね。ただ、ちょっとずつ違うと感じるのは、働いている場所の違いとか、今は学生だとか、年齢が違うといったこと。でも求めているものは、「この人が立ったら自分たちもついていくぞ」という考えで、その中に「魅力的」「色気」「カリスマ」、あるいは知識が豊富でなおかつ人間性が豊かだったら絶対、ということですよね。ある人が男前だったら、一瞬は「この人かな」と思うけど、よく聞いてみたらそうでもないとか（笑）。そんなのをひっくるめた時に、みんながついていきたいイメージというのは大体揃っている。もしかしたらひとつ、同じかもと思う。

それで、田中さんがちょっとおっしゃいましたね、「何の目的に」。それから大江さんが言ったことは、私はすごく魅力的だなと思ったんですけど、「リーダーとは何か。リーダーはなぜ存在するのか」。すると田中さんが「このあたりでみんなのひとつの目標を探したい。するとどんな人がリーダーにほしいかわかる」。今井先生がおっしゃいましたね、「新しい時代のリーダーというのは、今世紀の問題がもう大体見えてきている」。曲がり角とはどういう意味かというと、このままいけば地球が人類ごと、生命ごと没落、死滅するということです。極端で脅しのようですけど、でもそうらしい。そうすると目的の大きな概念は、決まっている、見えてきている。

そんな中でひとつ思うことがあります。リーダーというものを考える時、とにかくわけがわからなくてもあの人についていきたい、あるいはリーダーにすごいアイデアがあるからその人についていきたいと思う点。それともうひとつは、「リーダーは誰でもなれるんじゃないの」という発想で、いくつかの班でもそうおっしゃった。ここに注目するのもひとつです。本当に誰でもなれるのか。あるいは、いやいやそうではない、元来「スーパースター」はいただろう、あれに近いヒーローかなという視点。

「曲がり角」というテーマが出ました。21世紀の目標、目的は「リーダーと共に何をしたいか」ということですよね。2つを分けて、それを一緒にしてみたいなと思うんです。その中で「誰でもなれる」という意味を、少しだけ私が感じたことをお話して、参考にしていただいてひとつのテーマにしてください。「スーパースターがほしいか、誰でもなれるか」。これは目的とリンクすると思うんですけど、「誰にでもなれる」というのは、ここにいる誰もがなれるという意味でまず考えます。それは目的があれば、ここにいるみんなが同じ目的で、それぞれは全然違うけどその目的を達成しようと思っている限り、ここにいるみんななら誰でもなれる。今井先生がおっしゃいました、「1人の1国のリーダーだけでは世界平和は来ない」。ここのみんなともちょっとずつ違うわけです。「7人のリーダーが、1人のリーダーの昔のカリスマのような役割を

果たす」、それはどういうことか。しかもそれは「誰でもいい」と、私たちがふと思うのはどういうことか。多分、ここにいる皆さんが持っているリーダーとしての資質が、全員がそれぞれちょっとずつ違いながら高いということです。やみくもについていくリーダーがほしい時は、ついていく人たちのリーダー的資質が全然低いわけです。そんな時は、「わけがわかんないけど死にそうだから、モーゼについていく」という感じです。

でも現代の人は違うでしょう。例えばブッシュが戦争と言いながら、アメリカ国内で「ブッシュがやっていることは間違っている」と、ものすごく冷静に思慮深く言う人たちが出てきています。「ブッシュを倒せ」と言っているのではなく、「あれはブッシュの選択が間違っていましたね。さあ、アメリカ人はどうすべきですか」。つまり、一人ひとりの資質が高い集団になっているのではないかという点です。一人ひとりの資質が高ければ、例えば彼女がリーダーになるなら、彼女の持っているリーダーの資質を、みんなが既にある程度見抜けるということです。足らないところを補える、足らない時は2番手のリーダーが彼女に重なって仕事をするということです。ここにいるリーダーがこれだけいたら、ひょっとしたら四国くらいの広さの中で何かしようと思った時、動かせるかもしれません、作れるかもしれません。

ただし、その目的がみんなの共通項にならなければいけないですね。リーダーに対して集団の中の一人ひとりの「フォローシップ」、つまりどうそれに従っていくか。私がリーダーならあなたはこう従ってください、私が足らなかったらあなたが補ってください。むしろそうやってできてきたリーダーに求められるものは、ここに共通した優れた洞察力とか、人間性、心はいるでしょうということです。

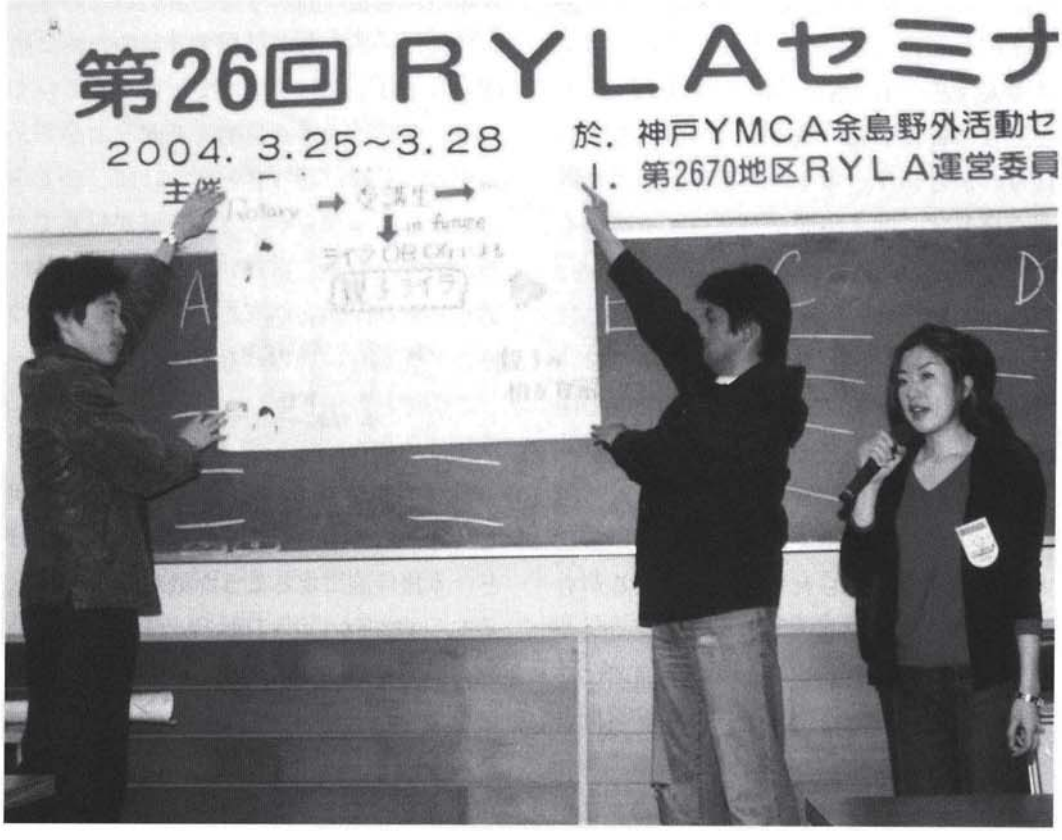
そこでもう一度、提案の最初に戻ります。あらためて、これはちょっと語弊がありますが「誰でもなれるリーダー」。「協働できるリーダー」、つまりたった1人のリーダーではない。その可能性はあるかないか。その可能性を考える時、私たちが目標にしている、例えば小さな施設や大きな病院で働いている、あるいは学生としている自分の集団、その集団の目指すものというような経験を通して、この21世紀というか地球の、人類の、生物の曲がり角と言われているこの時代に、私たちが目指す「何のために集団としてリーダーを立てて、何をしていくのか」という大きな目的を合わせながら、まずはみんなと話し合っていけば、ひょっとしたらリーダーシップの資質が見えてくるのではないか。あるいはリーダーと共に何をしたいのかということが、もうひとつ見えてきたらいいのになと思うんです。

ここでどれが正しいかとやっていると、水掛け論になってしまってもったいない。言い尽くせないほどどれも、もう少し説明してわかってもらいたい言葉ばかりですけど、水掛け論になるような気がしてしまう。もう一度整理をして、「誰でもなれるリーダー」と言いたくなるようなほど、私たちは共通の目標を持っているらしい、それは何か。そんな時、あえてその目的のためにはスーパースターやヒーローがいるならば、必要

だろう。そのあたりでもし納得するところがあれば、提案ですから言ってみます。それで、その点をちょっと是正して、その話の中からどこを引き出すかで考えていただけたらいいなというのが、私の希望です。目的を念頭に入れたリーダーシップ、リーダーがいるならついていく私たちの意志、意志のない集団ではない時代のリーダー、といったあたりにポイントをおいて考えていただきたい。病院に務めていても、学校に通っていても、ボランティアをしていても、何につながっていたいかという大きなスローガンとして書けそうな、私たちが、地球全体が群れとなってしたいこと、やらなければいけないと思っていること、曲がり角とは何か。そんなところでまず意見を聞かせていただいて、その上であらためてリーダーと共に何をしたいか、あるいはそのためにどんなリーダーがほしいかにつなげていただけたらどうかと思いながら、聞いていたんです。どれもみんな生かせるような気がしました。それではお返しします。

安平　要するに、皆さん方一人ひとりがリーダーとして何をやっていったらいいのか、そして共通の目標は何なのか、何を目指してどういうリーダーシップを発揮していったらいいのかということを含めての話をしようではないか、ということです。

それではせっかくパネラーとして前に出てきていただいているので、皆さん方から少し意見をいただきたいと思います。では今度はA班からお願いします。



♣　目標と言われると難しいんですけど．．．。人によって求めているものが違うと思うんですが、例えばこういう目標というのは今は思い浮かばない。

安平　自分の立場で、あなたがリーダーとなった場合、何をこれからやっていったらいいかということを、話してもらってもいいと思いますよ。

♣　すみません、さっきの話の訂正ということで、先にしゃべらせてもらいます。大江と申します。今ここに来ている人たちは、リーダーとなるべきというわけではないんですけど、それだけの素質があるから選ばれて来られているんだと思います。そこで、自分がもしリーダーとなるならば、さっき提案として挙げたように、全員がリーダーとしてそれだけの力を持っていると認められて来ているんだから、全員の意識を一緒にして持ち帰って広めていってもらいたい。しかも上から、つまりロータリアンの人たちも全員意識を一緒にして帰ってもらいたい。上からばかりではないですけど、自分たちからすればローターアクトにいるからそこからしか変えていけない。でもロータリーの人たちだったら、上からでも変えていけるのではないかな、違う観点から変えていってもらえるのではないかと思っています。だから意識を統一することが、まず大切だと思います。

安平　あなた自身はこれから、どういうふうにやっていきたいと思っているんですか。例えばこのセミナーが終わって、地元に帰ってこういうことをやっていきたいかということです。

♣　自分もそうですけど、姫路南ロータリークラブの方に、まずそれだけの意識というか、全員にわかってもらいたいことを伝えたい。目標があって意志があるのではないでしょうか。

東野　私の伝え方が悪かったんだと思うんですけど、リーダーシップをとることを考える時、いろいろ考えた資質を使って誰かがやっていく。でも今は、多分一人ひとりがリーダーにやみくもについていくような時代ではない、リーダーと同じくらいの資質で考えられる部分をたくさん持っている人たちの集まりの中での、リーダーとはどうあるべきかというお話をしたつもりです。そこで考えた場合に、ここでリーダーにはこんな人がいいと資質や条件比べをしていると、先へ進みにくいかもしれないからとひとつ提案をしたんです。私たちが生きていく中で、どんなことを目指そうとしているか。それはひとつには「絶滅の危機から命を救う」ということがみんなの共通認識だと、私は思っているんです。もうひとつはきっと平和、すなわちテロや戦争のない国、貧困がない国、病気が撲滅された国にするということ。そしてこれからは、どこへ向かうのか。共存とか共栄と言われますが、一緒に生きるとはどういうことか。みんなの向かっている方向はどっちなのか。たしかにわかっていることは「平和」ですが、その「平和」とはどんなものなのか。私たちはどんな方向へ向かって、どんなことをしようと思っているのか。自分のことだけ、あるいは知っていることだけ考えていたら、その答えは浮かんでこないかもしれない。ここで総動員して、今日と昨日の先生のお話、そしてみんなが「これはどう

いうことだ」とたずねた話、「これはすごい」と思った話、その話の中で私たちはどっちへ向かうのか。どっちというのは「死ぬ」か「生きる」か、曲がり角とはそういう意味だと思います。

それが難しいならば、例えば平和になるとはどういうことか。少なくとも「戦争がない」という一点を目的として絞ったならば、親が子を殺さない、子が親を殺さない、家庭の中の戦争がない、国の戦争もない。どちらもすごく大きなテーマなんですけど、この2つくらいに絞ったらどうでしょうか。そんな時、どんなリーダーがほしいですか。どんなことをしますか。

♣　B班の太田です。お話ありがとうございました。私にはすごく大きな目標があって、国際公務員になりたいという夢があるんですけど、それでリーダーシップを身につけるために、このＲＹＬＡに来ました。B班のみんなに会った時、「私はリーダーシップを身につけるために来た」ということを話したら、「ＲＹＬＡの間はリーダーとして頑張ってくれ」と言われて、リーダーをさせてもらいました。

私が考えているリーダー像というのはすごく難しくて、なるまいと思っていたんですけど、B班のみんなに支えてもらって何とか務めさせてもらいました。さっきおっしゃっていたことなんですけど、リーダーは「誰でもなれる」と思います。カリスマ性もあったら、もちろんすばらしいリーダーになれると思うんですけど、なくても周りの人がすばらしい人だから、いいリーダーになれると思います。目標である、生きるか死ぬかということはもちろん「生きる」ことですし、やはり平和な世界にするために、みんなそれぞれに仕事や生活があると思うんですけど、何のために生きるかといったらやはり「幸せになるため」に生きていると思います。周りの人を幸せにしたいと思っている人もいるし、自分が幸せになるためにと思っている人もいると思いますけど、「不幸になりたい」とか「人を不幸にさせよう」と思っている人はいないと思います。そして、自分が幸せになりたいと思っている人も、例えば「友達が幸せになってほしい」と思えたら、そんなふうにみんなが思ったら、やはり平和な世界になると思いますので、その目標というのはみんなが幸せになること。そのために必要なリーダーとは、その人よりもその周りにいる人たちがどうなのかがすごく大事だと思います。ちょっと答えになっていないかもしれませんけど、ありがとうございます。

♣　B班の脇坂です。ちょっと腰が悪いので、座ったまま失礼させてください。今の話を聞いて、僕は畑さんが「リーダーになりたい」と言って手を挙げた時から、彼女は既にその時点からリーダーだったと思います。十分立派なリーダーです。

今日の話の中で、「リーダーの定義なんているか」と言った人がいました。リーダーの資質に定義はいらない、リーダーになった時点でその人はリーダーなんだと僕は思

います。誰もあなたがリーダーだと認めてなくても、僕はあなたは十分に立派なリーダーだと思います。

正直言いまして、このセミナーに僕はいやいや来ました。今も正直なところ、早く帰りたいという自分がいます。でも今、いい思い出をバックに詰めて帰れそうな気がします。本当にお疲れ様でした。ありがとう。

♣　C班の二川大次郎と申します。今のお話とは少し変わりますが、先ほど、一人ひとりのレベルが高くなると集団のリーダーは資質が見抜けてそれを補える、スーパーリーダーよりは全体のベースアップができるというのはどうかというご質問がありました。それを聞いて僕は、絶対的なスーパーリーダーがいたとして、もしその人がいなくなった場合、それを誰が補えるのかと考えると、集団の中の一人ひとりの質が高くなることが理想的な状態であろうと思いました。例えば社長が引退した後は誰が引き継ぐかなど、その集団を守っていくためにはリーダーはいつか代わらなければならないし、次世代のことを考えると集団一人ひとりのレベルアップが必要であると思います。

僕は香川から来まして、ローターアクトクラブというクラブに入っていますが、そのクラブも１年に１度、会長や副会長が代わります。在籍期間が18歳から30歳までで、年齢退会される方、自主退会される方といますけど、うちのクラブもそれで穴があいて、スーパーリーダーがいなくなったんです。ローターアクトクラブの話になって申し訳ないんですけど、そういう問題が出てきていたので、今日のテーマにはちょっと興味がありました。まあ他の集団にも言えることですけど、僕は一人ひとりが「いつでも自分がリーダーになれる」という意識を持って集団に参加していただけると、その集団がまとまりやすいし、そうした意識ひとつで集団のレベルが上がると思います。

もしここに、香川在住の30歳以下の方がおられましたら、この後私の方にご連絡いただいて、高松中央ローターアクトクラブをぜひよろしくお願いいたします（笑）。今ちょっと人数が少なくなってピンチでございますので、皆さんのご協力のほどよろしくお願いします。失礼しました。

♣　A班の尾上です。具体的な話になってしまうんですけど、私は岡山大学の歯学部に通っていて、「メディカルＥＳＳ」というサークルに入っています。メディカルですから、一応医学についての勉強をします。昨年９月に上の学年の人たちが出ていってしまって、私たち２年生がこれからクラブ運営をやっていかなければならなくなりました。２年生というと、まだ医学の勉強をちょっとしかしていないんです。でも大会があるので、それに向けて与えられた問題について勉強しないといけない。４年生、５年生、６年生の人たちと同じだけの知識を持つために勉強するんですけど、やはり

そこでもリーダーが必要になってきますよね。それで、論文を読んだりいろいろな資料を探したりするんですけど、リーダーがいなくなってしまったから、みんながそれをできないといけない状態になってしまったんです。でも一応リーダーを１人おいて、それをみんながいつでも助けてあげられる状態にしておいて、リーダーが１人で頑張らなければならない状態には絶対しないでやると決めました。そして今、３月ですけど、その子はもうリーダーの資質を身につけて、ちゃんとリーダーになれたんですね。だから、みんなリーダーになれるということが言いたかったんです。

♣　Ｃ班の松ケ迫です。私は二川さんの話をかみくだいて、誰でもリーダーになれるということをお話させていただきます。私たちのグループで１人先に帰った方がいらっしゃるんです。その方は最初にお会いした時、すごくリーダーシップをとられていて、何でも率先してやってすごいなと思ったんです。私は20歳でグループ内では一番年下なので、余計にそう感じました。その方がこの班を引っ張ってくれるのかなと思ったら、用事があるといって帰られたんですね。実質的にＣ班のリーダー的存在が抜けたとなって、次は誰が引っ張っていくのかなとちょっと不安な部分がありました。でも、このＲＹＬＡに参加する人ってリーダー資格がある人、そしてリーダーとして認めていいと推薦された方という条件のもとなので、やはり「じゃあ俺がやろうか」「私がやる」と、一人ひとりが自分のできることだけなんだけど、それを上手に生かして何かをしていたんです。それに呼応するように、周りのみんなが「それをするんだったら、俺はこっちをやる」とか、私はこれをする、あれをしようとなって、結局一致団結できた。だから私は、みんながリーダーになるという意識がなくても、リーダーのつもりでやれば、私たち一人ひとりがリーダーであり、お互いにリーダーであり、そしてみんなまとまってもリーダーである、となると思うんです。例えば部活動の話なんですけど、部長や副部長を決める時って決めづらいじゃないですか。「ジャンケンで公平に決めよう」と言いながら、負けると嫌だなと思う。実際、高校の部活動でそうだったんですけど、でも「私はこれをやるから、あなたにはこれをしてほしい」、要するに私も部長、あなたも部長だったらお互いに高め合えるし、文句ないよねとなる。

だからまとめにくいんですけど、誰でもリーダーになれるといえばなれるし、１人決めずにみんなで補い合うというのも、ひとつのリーダーの形ではないかなと思います。その中で一番光る人が、リーダーの中のリーダー。その人はもちろん、行動力や決断力があるから先に行こうとしているわけで、外から見たら一番上に立っている人物と映ると思うんです。だけど実際フタを開けてみたら、包容力のある人が補ったり、人脈のある人がいろいろなコネクションを探してきたりして、みんながリーダー、それぞれがそれぞれの得意分野でリーダー、という形がいいのではないかと私は思います。

♣　Ａ班の広島です。先ほど２人の方がおっしゃったことに私も賛成なんですけど、やはりみんながリーダーになれると思います。

というか、みんながリーダーになるという意識がないといけないと思うんですよ。何かひとつの目的や目標を達成するために集団があるわけですけど、「そのリーダーに任せていたらいい」というような人が周りにいるのはいけないと思う。みんなが同じ目標を持って、自分もこうしなければいけないという気持ちを、一人ひとりが持っていないといけないと思うんです。そして、ひとつの同じ方向に向かっていかなければならないから、リーダーはちょっとずれ出したりした時に軌道修正して、みんなが目指す方向に進むようにまとめあげることができる、あるいは出だしで「今はこういうことをしなければいけない」と問題提起できることが大事だと思います。また、そんなリーダーと同じ気持ちになって、「自分もリーダーだ」という意識を持つことはどの人にも必要だと思うし、みんなその可能性を持っていると思います。

♣　A班リーダーの立谷と申します。今「リーダー」と言いましたけど、僕はリーダーをやっていないと今でも思っています。なぜなら、みんなに引っ張ってもらって、みんなと一緒にやっているという感じがしているからです。正直言うと、僕も最初はここに来るのが嫌だったんです。なぜなら余島に行っても何も役に立たないし、何もできないじゃないかと思っていたからです。でも、変わりたいから。．．．今もういっぱいいっぱいで、人前に出ると何を言ったらいいのかわからなくなるし、言いたいことをはっきり言えない人間だから．．．。でも、今回ここに来て、すべてを改善できるかどうかなんて僕にもわからないし、すべてのことができるリーダーは多分いないと思っています。本当に何かひとつ人より優れたところがあって、それでみんなと一緒に協力してやっていくことで初めて、リーダーといえる人がたくさん生まれてくると思います。リーダーといえる人はどこにでもたくさんいると僕は思います。だから、今僕はすごく不安で、自分でも何を言っているのかわからないところはあるんですけど、僕が言いたいのは、不安でもいいし失敗してもいいから、ともかくまずリーダーになるのではなく、まず協力して頑張っていくことから始めるべきだと思いました。

♣　D班の富田と申します。みなさんのご意見を聞いていて、誰でもリーダーになれる、そしてみんなに引っ張ってもらってリーダーをやって感謝している、という発表がありましたが、僕はこれは十分リーダーだと思うんですね。僕は今、高校生から小学生対象の塾の講師をしています。その塾長の話をちょっとしたいと思うんですけど、彼は私より11歳年下で、僕と同じ大学の研究室の後輩になります。彼にはひとつの理念というかやりたいことがあって、今の小・中・高校生に「学ぶ楽しさ」を教えてあげられる塾をつくりたい、受験のための勉強ではなく心から楽しんで学習できる塾にしたいと、研究室にいる頃から言っていました。それで彼が卒業した時、「僕は塾を本格

的につくるつもりです。だから富田さんも協力してもらえないでしょうか」と言われたんです。その時に僕は彼の目標を聞いて賛同して、今は彼と協力して一緒に塾の講師をしています。

僕は、彼の持つリーダーとしての資質ですごいなと思ったのは、彼は自分が１人でできないことをわかっているんです。だから「僕にできないところは、僕の知らない力を持っている人の手を借りたい」、つまり僕だけでは絶対できないことがわかっているから、みんなに協力してもらって、ひとつの理念を掲げてそれに向かってやっていこうじゃないか、と決めた。そこで彼がやったのは、まず僕に直接「協力してください」と頼んだ。それと、同じような理念があるんじゃないかと思われる人に、自分の理念を書いた書類をメールやファックスで送ったんです。そこから何が広がっていったかといいますと、例えば最初に塾長がＡさんという人にメールを送ったとしましょう。その時はＡさんしか知らなかった。だけどＡさんが、この塾長に賛同できる別の人を知っていて、その人たちに「こういう話があるよ」と連絡する。するとまた送られた人が、また別の人に話す。そうすると、必ず同じ目的意識を持った人が賛同してくれるんです。

先ほどＢ班の方が、リーダーに必要な資質として「志」と書いていますよね。志は必ず貫かなければならない、これはリーダーのひとつのあり方だと思います。そしてこれは僕自身の話なんですけど、集約すると、永続的に持続できる意志を持っていること。すると、それに賛同して後を継いでくれる人間が絶対出てくるんです。

さっき、世界が曲がり角に入っていると東野さんのお話でありましたけど、この「曲がり角を正す」というのは、おそらく１年や２年ではとてもできるものではないです。ひょっとしたら50年か、60年かかるかもしれない。とても１人のリーダーでは無理な話しだと思います。そうすると同じ理念、同じ方向性のベクトルを持った人たちが後を継いで、そのリーダーにできなかったことを別の人が受け継ぐ、その別の人は前のリーダーにはなかったところがあるけど足りないところもある、その足りないところはまた別のリーダーが補うことができる、というように連鎖的につながっていくリーダーの輪ってできると思うんですよ。だから僕は、志を最後まで貫ける意志があれば、誰でもリーダーになれると思うし、そう思った時点でもうリーダーだと言われたご意見には、すごく共感を覚えます。以上です。

♣　Ｄ班の山根と申します。僕はロータリークラブとは全く関わりなく、兵庫県で小学校５年生を対象とした自然学校の指導補助員として、小学校に入って活動させてもらっています。その中で僕は、先生と小学５年生を間でつなぐリーダーという立場で、子供の前に立てば先生と同様ですけど、小学校の先生からすれば下で使われる身なんです。

今回は僕自身がリーダーとして、Ｄ班の中ですごくレベルの高い討論をさせていただきました。その時に話し合いをしながら、先ほど掲げられた「眼力」「コミュニケーション力」「カリスマ」が、果たして僕にあるのかと考えました。そして「そんなものはな

いよな」と思った。でも実際に学校では、子供たちの前ではリーダーとして活動させてもらっているので、すごく矛盾に感じていることもあったんです。ただ、それでふと思い出したのが、自然学校というのは5泊6日間を過ごしまして、僕は子供たちからキャンプネームで「マシュー」と呼ばれるんですけど、その最後の6日目の時にある子供から「俺、いつかマシューみたいなリーダーになりたい」と言われたことです。だから眼力やコミュニケーション力、カリスマ性がなくても、誰か1人にリーダーとして見られる、あるいは憧れの存在になるというだけでも、リーダーと言えるんじゃないかなと思った。そう思う中で、今回D班で話させてもらったのは、リーダーの中でもさらにまとめ役のスーパーリーダーは必要だなと。でも僕ら自身は、誰にもリーダーの資質はあると思うんですね。だから、絶対にリーダーを決めないといけないということではなく、みんながリーダーとして活躍していけば、またいい世界になるのではないかなと。それが何年先になるかわかりませんけど、でも僕みたいな何の力もないリーダーを見て、子供が僕のようなリーダーになりたいと言ってくれるのであれば、さっき富田さんがおっしゃったように、継続的にリーダーは増えていくわけなので、そういう人を1人でも多く増やせるようなリーダーになっていけたらいいなと思っています。それが僕の目標でもあります。以上です。

ディスカッション

安平　それでは議論をする前に、議論が交錯するといけませんので、まず基本的な解釈を一致させておきたいと思います。今、4つの班から発表がありましたので、ほかの班の発表内容についての疑問があれば、まずそれをそれぞれ質問していただくことから始めます。パネラーの方がよその班に質問をされても結構ですし、この会場内の受講生の方が質問されてもいいですけど、とりあえずはパネラーの方からいろいろな質問をしていただきたいと思います。A班から何か聞きたいことはありませんか。

♣　B班に質問というか、ちょっと思ったことなんですけど、やはりいろいろな人がたくさん集まれば集まるほど、話し合っても解決はしないと思うんですよ。その中でも、これだけはなければいけないと思ったことがあれば教えてほしいんですけど。

♣　余島の真ん中にある「志」です。志が真ん中にあって、それを支える「人間性」と「能力」の大きく2つに分けたという流れです。なぜ真ん中に志があるかというと、目標に向かっていく熱い心がまずないと駄目ではないかと考えたからです。

司会　発表について全然意味がわからないとか、どういうことを指しているかといった質問はないですか。それをまず片づけておいてから、議論に入っていきたいとおもうんですけど。はい、どうぞ。

♣　A班の平松と申します。C班のご説明で、わかりにくい点がございましたので、先に質問させていただきます。最後に積極

性についてのコントがありまして、たいへんおもしろかったんですけど、積極性ということで前に向いて進んでいって、最後に道に迷われましたよね。あの最後は何が言いたかったのかがわかりかねた（笑）。結局、積極的に前に進んでいったら失敗しちゃったよ、という感じにも見えたんですが、その点についてだけ説明をいただきたいと思いました。

♣　二川と申します。最後にまっすぐ進んでいくんだ、で終わっていればきれいにまとまっていたんでしょうけど、そこで終わってもおもしろくないので、ひとつオチというか毒でおとして終わりたかったというだけです。言いたかったことは迷うまでのことで、最後の迷いは単に笑いを誘うためのオチです（笑）。

♣　D班の加藤です。A班の方に質問です。「親子ＲＹＬＡ」というのはすごくいい計画だと思うんですが、そこに書いていること以外に何か具体的な計画みたいなものがあったら教えてほしいんですけど。

♣　A班の尾上です。このＲＹＬＡの冊子を見たら、「高度な討論と講義」と書いてありましたよね。普通のキャンプというと、よく子供だけで行くキャンプってありますけど、それではなくて子供に話し合いの仕方を教える場にしたらどうかと思うんです。話し合いの仕方って、学校ではあまり教えてもらえないですよね。だから、子供たちに教えるというのが目的としてひとつあったらいいなと。そして、お父さんお母さんとの関係がうまくいかない子供たちもいるというのをよく聞くので、そうしたお父さんお母さんに、子供とどう接したらいいかを知ってもらうための場にしたいという思いもあって、「親子ＲＹＬＡ」を挙げたんですけど。他にいい案があったらお願いします（笑）。

司会　他に質問はないですか。それでは私の方から、皆さん方に質問したいんだけど、例えばB班はいろいろな項目が掲げてあって、それぞれ自分の職場を頭においてお考えになったようですが、それぞれの班はどういう組織や団体を念頭において議論されたのか、そういったことを前提に議論されたかを教えていただけませんか。

♣　具体的に何かというのではなく、「リーダーとは何か」について各人が思ったことをまず書き出して、それを集約させていきました。ただ、ほかのチームと同じような意見になってしまうかな、違う側面から見たらこういう点もあるというところを見てほしかったために、自分たちは逆発想でこういう提案の仕方をしました。そして、協同で何かをするというのは、他の人と違う特別な何か、今は「差別化」が注目されているので、ここにしかできないことという意味で「親子ＲＹＬＡ」ともうひとつをA班は考えました。

♣　B班の太田です。最初に話し合った時に、リーダーといってもガキ大将とか会社社長とかいろいろあると思うんですけど、「何かの組織のトップの人」というイメージで話し合いました。それで、みんなのイメージから湧いてきたものを取捨選択していって、「志」が真ん中にあって「人間性」と「能力」となりました。特にどういう組織というのはなかったです。

♣　C班の松ケ迫です。私たちがグループ

に分かれてディスカッションした時は、とりあえず今、自分のそばでリーダー的存在としている人のタイプというかイメージを挙げていただきました。ほかのグループもそうですけど、班には学生から社会人までいろいろな立場の人がいるので意見も様々で、とりあえずその中でまとめてみて、立場や見方はそれぞれ違うけど、すべてにおいて一番大事なのは「信頼」ではないかということに意見がまとまりました。だから私たちは、すべてのリーダーにいえることを考えてまとめて、いろいろ悩んで決めたつもりです。

♣　D班の葛西です。私たちもC班と同様なんですけど、グループにはいろいろな世代の方が集まっているので、リーダーというとらえ方も様々でした。そこでまずは、その人それぞれの幅でリーダーというものを考えて、あとは「こういうリーダーだったらついていってみたい」といった意見も言い合って、徐々に相互理解を深めていきました。それで私たちは、歴史上の人物についての話などもしました。歴史にすごく興味を持っている人が多くて、例えば織田信長や徳川家康など、昔のリーダーを格好いいと思っている人もいたので、そういったところにも観点をおいて話をすすめました。そして最後に行き着いたのが、リーダーにおける信念、それを貫こうとする過程が大事だということで、信念と有言実行を1本の棒として貫く形で考えていきました。

司会　ありがとうございます。どういう組織や団体を頭において、リーダーということを議論していったか。今のD班などはいろいろな場面を考えていって、その中で一番重要なものを挙げたという話でしたが、この「リーダーの条件」というのはいろいろな組織、例えばタテ型社会あればヨコ型社会もあり、ヤクザの世界とか警察機構、またローターアクトのような団体やロータリーなど、いろいろあると思います。そのあたりにおいて、リーダーの条件というのは全く共通なのか、それとも違うのか、それについて皆さん方の意見をお聞きして、一番最初の論点に来てみたいと思います。A班のパネラーの方は、どう考えられますか。

♣　A班の広島です。リーダーについて、先ほど「必ずこういうリーダーでないといけないのかどうか」というご質問でしたが、私は必ずしもこういうタイプじゃないとリーダーになれないというものではないと思います。D班のご意見のように、「自分がやらなきゃ」「自分がみんなを引っ張っていくんだ」といった気持ちがまず第一にあって、それから皆さんが挙げられていた「信頼」とか「配慮」「公平さ」などがあれば理想のリーダーなんですけど、とにかく一番に「自分がリーダーとしてやってやろう」という気持ちがあれば、どんな人でもリーダーになる可能性はあると思うし、なれると私は考えます。だから、特にこういう人でないとなれないというのはないと思う。もちろん人ですから欠点はいろいろあると思いますけど、その点はみんなが助け合うことが大事だと思います。

♣　A班の大江と申します。私は、リーダーとは何か、なぜリーダーは存在するのかということを考えました。そして、昔だったらそれは力で決まっていたと思うけど、そ

れで戦っていたとしてもやはり力だけではあかん、心が備わってないから裏切られたりする。だから心も大切だし「義」の部分も大切、それに体も大切。それがバランスよくとれている人が、リーダーではないかと思いました。

リーダーというのは、1人ではなれない。リーダーは1人では何もできないし、リーダーと呼べるのはみんながいるから。だから自分の中では、相手を思いやる心が一番大切だなと思いました。

♣　B班の太田です。質問の趣旨なんですけど、タテ型組織とかヨコ型組織とか、その知識によって理想とするリーダー像は違うかどうかということですか。

司会　リーダーになれるかどうかということではなく、リーダーにとってどういう条件が必要かという観点で考えた時に、例えば平和時のリーダーシップとか危機の時のリーダーシップ、タテ型社会やヨコ型社会のリーダーシップ、といったものがあるのかないのか。あるとしたらどういう点が違ってくるのかということについて、抽象的な条件が挙がっているけれども、そのあたりの掘り下げがもう少しいらないかなという疑問なんです。

♣　それは、組織や場合や時代によって理想とするリーダー像は違うと思います。一番楽なのは、全部体制が決まっていて、あとは人さえいれば、誰がなったとしてもあとは周りが動いてくれる形だと思いますけど、本当のリーダーというのは、まず組織があってリーダーではなくて、リーダーが熱い志を持っていて、そのために何かをしたいから組織をつくりたい、だから仲間を集めて組織しをつくって、自分の志に向かって努力するというものだと思います。

♣　D班の奥谷です。私たちは4～5人のグループから全体のグループになって話し合ったんですけど、一口にリーダーといっても、小さなグループのリーダーと大きなグループのリーダーでは、リーダーの条件も違ってくるのではないかと考えています。まず最初に話し合う前に、パパさんが「これから20年後には、世界の人口が80億人くらいになって、人口増加の問題が起きる」などの話をしてくれたので、どちらかというと小さいグループのリーダーだと必要なことも、大きいグループのリーダーになるといらないこともあると思うんですよ。それで私が思うに、「色気」というのはリーダーの条件ではないかなと。私としては、次世代のリーダーというか、今後の人口問題などを考えてのリーダー像の条件をD班は考えたのではないかなと思います。

♣　まず、A班やB班が言っていたように、リーダーになるにはその仲間が必要だし、組織がまずたちあがらないといけない。そのことについては、全く同感の意です。リーダーといっても本当に様々で、サダム・フセインなどは世界から”悪のリーダー”と名指しされていても、一時期は国民の間では自分たちの国を救ってくれるリーダーとしていたし、そういうリーダーもいれば平和的なリーダーもいる。とにかく個人ではできない、組織と仲間が必要。うちの班は、もっぱら「信頼」というトピックについて深く掘り下げていたので、リーダーを立てるにしても何をするにしても、まずお互いに信頼が芽生えなければ、リーダーという

確固たる地位は確立されないのではないか。うちの班ではそこをもっぱら掘り下げていったという感じです。

司会　リーダーの条件が必要条件なのか十分条件なのか、そんな問題もあるんだけど、それがいろいろな時代や組織、局面によってリーダーは変わってくるのではないか、また役割も変わってくるのではないだろうかというような感じもある。いや、そうではないですよ、どんな場合だってリーダーの条件というのは共通ですよ、これですよということなのか。そのあたりの問題意識はどうなのかなと思ったので、お聞きしたわけです。

♣　C班の松井と言います。僕らは条件はないと思います。というよりも、言葉から探しました。人とかグループ、立場、組織といったものではなくて、まず「信頼」という言葉でリーダーは成り立っている。リーダーの条件とは「信頼」だろう。例えばサダム・フセインであろうと、ブッシュであろうと、やはり信頼がなければリーダーというのは成り立たないのではないか。リーダーになるために何が必要かという言葉を探していった結果、「信頼」という言葉に行き着いたのであって、どういうイメージという想定はなくて、だからどんなリーダーについても当てはまるのではないかと思います。

♣　皆さんこんばんは、陳玉円と申します。今回のテーマについてはいろいろ考えまして、一番思ったことは安平ガバナーがおっしゃったとおりです。リーダーというのは、東洋のリーダー、あるい西洋のリーダー、あるいは日本のリーダーといろいろいます。アメリカのリーダーは多分少し違うんです。しかし21世紀というのは、皆さんご存知のようにグローバル化してくるんですから、いかにグローバル化したリーダーになるかを考えないといけないと思います。

それで私たちB班の考えについてですけど、非常に勉強になりました。なぜならば、それぞれ違う職業の方々が、いろいろなアイデアを出し合ってまとめることが非常にすばらしいと感じたからです。これまでの皆さんのお話を聞くと、やはりリーダーの形は常に変わっていくんです。もちろん、お互い信頼関係を一旦築いたら、環境の変化によって変わっていかなければならない場合は、皆さんも一緒に変わっていくんですよ。リーダーも変わるけど、それについていく人たちも変わる。それも、いい方に変わっていくんです。

司会　実はリーダーの条件ということで、今日はちょっとテーマを発表した時に、たいへん抽象化したというか、曖昧にしたというようなことも言ったと思います。例えば会社内におけるリーダーの条件とか、社長におけるリーダーの条件とか、そんな感じで提示すればもう少し議論がまとまるかもしれないし、それが必要条件なのか十分条件なのかといったこともあるんだけど、そういったことをすべて切ってしまって、無理に「リーダーの条件」というテーマを考えていただいた。その時に、どういう局面でのリーダー条件か、といった具体的なことが議論の中で出てくるのかなと思ったので、故意に抽象化したわけなんです。このあたりのリーダーの条件については明日、今井先生の方から少し補足をしていただく

ということで、この問題については終えたいと思いますがよろしいでしょうか。

ではまた元に戻りまして、それぞれの班について、これはおかしいとか、あれはどういう意味かといったことについて意見はありませんか。

♣　先ほど同じメンバーの人からも質問があったんですけど、C班の方に質問です。「多少の色気」というのがどういう意味なのかを教えてください。

♣　C班の篠原泰子と申します。「色気」という表現がちょっとわかりにくかったと思うんですけど、これは他の班で「カリスマ性」と出てきていますが、要するに人間的な魅力というか、説明できないような人を引っ張る力、そういう曖昧なものです。でも私たちが強調したかったのは、99%が「信頼」であるということ。あとの1%にカリスマ性のようなものもあるかもしれないけど、やっぱりリーダーになるには信頼が絶対必要だ、という意味で「色気」としました。ちょっとわかりにくくて申し訳ありませんでした。

♣　大江と申します。そういうパーセンテージで表わすというのは難しいと思うんですよ。なぜ99%なんですか。100%と言いにくいからかもしれませんけど、どうお考えですか。

♣　C班の松ケ迫です。今回の場合は、数字に意味がないといってしまえばそれまでなんですけど、私たちがいろいろ列挙した中では「信頼」が一番だった。「カリスマ性」ももちろん挙がったんですよ。例を挙げると、長嶋茂雄監督など、男性の方は"神様"みたいな感じでした。私の場合は野球に全く興味がないので、そういうのは理解しがたかったんですけど、それも一種のカリスマ性かなと。また、アイドルの方も外見などで名前が挙がりましたが、それもやはり一種のカリスマだろうと思うんです。外見が良かったらついていくという方もいらっしゃるじゃないですか。本来、人というのは外見にとらわれては絶対にいけないんですけど、ちょっと怖そうなお兄さんと優しそうなお兄さんだったら、私はやっぱり優しそうなお兄さんについていくと思うんですね。それで、私たちの中ではかみ砕いた表現として「色気」を挙げたんです。数字に関しては、本当は「何項目挙がりました」というように絶対的な数で表わせばよかったんですけど、円グラフで出した方が、私たちはこれに重きをおいたというのが一発でわかると思った。いわば私たちの気持ちを数字で表わした、具象化したということで理解していただければ幸いかと思います。

♣　D班の中塚です。今、カリスマの話が出たんですけど、僕らが思っている「カリスマ」と、C班の言われていた「カリスマ」が、僕らの中では全然違うんです。それについて、皆さんはどう思うかなというところを後で聞きたいと思っているんですが、僕らは本当は「カリスマ」とは入れたくなかったんです。それも長嶋さんとかアイドルとか、そういう意味の「カリスマ」は、僕らが考えるリーダーとしての資質の「カリスマ」とは違う、そういう「カリスマ」はいらないと思っています。なぜそう思うかは、今はまだ答えない方がいいと思うんですけど．．．皆さんはどう思いますか。実は今、「カリスマ」の話が出てすごくうれ

しかったんです。

♣　大江と申します。教育するにしても、相手に「これを信じなければいけない」というなら、なぜそうしなければならないのかの説明が必要だと思うんです。お願いします（笑）。

司会　D班は「カリスマ」ということで、「統率力」「寛容さ」「人間性」とまとめてあるんですが、そのあたりについてはいろいろ質問や意見があるかもしれませんけど。

♣　我々の班は、協議の前に前提条件をつけまして、2点ほど考えたことがあります。ひとつはカリスマ性にふれる前にふれておきたいんですが、リーダーとはいわゆるスーパーヒーロー、何でもできてみんなをグイグイ引っ張れるヒーロー、そんな人間なのか、それともごく普通の人間、例えばつらい時もあれば悲しい時もある、会社でどうしても仕事をしなければいけない時に、家族が病気で苦しんでいる、あるいは子供が事故に遭った、そういう時に組織に残るか、それとも組織を離れて家庭に帰るか。いろいろな悩みをリーダーは抱えていると思うんですが、そういったことを考えて、我々はいわゆる普通の人間、ただし「私がやらねば誰がやる」と思う人。タレントというか才能といったものがないごく普通の人間が、「やらねばならない」と考えたということを前提にしています。

それでカリスマ性については、両面性があると考えています。いい面と悪い面。いい面というのはいわゆる「色気」、人間的な魅力、人を惹きつけるすばらしさ、持って生まれたもの、その人がいるだけで安心する、みんながついてくる。いろいろな表現があると思うんですけど、それらをひっくるめて「カリスマ」という言葉があります。

ですが、例えばサダム・フセイン、アルカイダのビンラディン氏、それから古いですけどアドルフ・ヒトラー、そういった人たちもカリスマ性を持っていると思います。そう考えた時に、「カリスマ」という言葉はすごく怖いのではないか。その2面を紹介した上でないと、この言葉は使えないなということで、みんなが考えたんです。ただ、この場で他の方たちがどう考えるか、それを出してほしいと思って、あえて「カリスマ」という言葉を入れています。それでよろしいでしょうか。

司会　この「カリスマ」ということについて、他にご意見はございませんか。

♣　B班の田中でございます。38歳の年長者から一言申し上げます。たしかに今、議論になっている「カリスマ」も重要な部分だと思いますけど、もっと本質的なところを考えていかないといけない、今回のこの場はそのためであるということをまず認識しないといけないと思います。と言うのは、なぜこの場に来ているのか、なぜ我々はここにいるのか、そして「リーダーの条件」という題目を与えられた。みんな土台が違うところで、立場も違うところで話をしている、これでは全く合わないわけです。あなたの「カリスマ」と僕の「カリスマ」、彼女たちの「カリスマ」、全く違うわけで、これは国語、つまりこれまで習ってきたこと、経験してきたことの土台に立って話しているだけのことだから、議論してもなかなかおさまらない。そこで途中に問い掛けられた、「時代が変わってもリーダー像とは不変

であるか」。その答えは、大体同じだと思うんです。これは何が土台になっているかというと、自分の経験したこと、歴史で習ったこと、あるいは今回いろいろな人と話して学んだこと、これがすべて背景にあるわけです。

ではそこから、今回は何をするかということです。それを、今ここに来ている自分たちに置き換えて、21世紀を担う僕たちが何をするのかというところを考えるべきであって、何をするのかという点を議論できたら、非常に意義のある場になるのではないかと思っております。ご静聴ありがとうございます。

♣　D班のツェイ・イェンです。皆さんのレジュメを見たら、「信頼」というキーワードが出てきましたので、ここで「信頼」と「信用」の違いについて、生意気ですけど少し説明させていただきたいと思います。

「信頼関係」といいますのは、裏切らないという意味も含まれます。なぜかというと、信じることに対して返してもらわなくてもいい。でも「信用」の場合は、金融機関でみると「信用関係」になるんですね。だから金融機関でお金を借りたら、私はいくらかの担保を入れます。担保を入れるからお金が借りられる。そうすると、信用の関係の場合は裏切る可能性があります。例えばリーダーを「信用する」といったら、お互いに約束がありますよね。でも会社経営にしても、環境が変わっていくと、必ず守れるというわけにはいかない場合があります。そうすると「裏切られた」という気持ちになる。しかし信頼関係を築いたら、環境の変化でもし契約が果たせない場合があっても、自分が信じている人ですから、裏切られたとは思わない。とすると、Cグループのリーダーに対する気持ちが、99%の「信頼」というのはたいへんすばらしいと思います。

安平　ほかにご意見はございませんか。リーダーということについて、若干コメントが必要かなと思っていますので、今井先生、すみませんが一言お願いします。

今井　リーダーの条件というのは、ずいぶんたくさんありますね。先ほど皆さんが言われた中で、例えば織田信長や豊臣秀吉、徳川家康と並んだ時に、3人とも違ったリーダーの形を持っています。織田信長なら「鳴かぬなら殺してしまえホトトギス」、言うことを聞いてもらわなければいけない、俺について来い、そうでない者は殺してしまえというほどの勢いを持っている。おそらく先ほどから出ている、ブッシュとかフセインといった人たちは、そういうリーダーシップを持っていたのかもしれない、それにおいてみんなの信用を勝ち得ていたかもしれない。ところが豊臣秀吉は違いましたね。「鳴かぬなら鳴かせてみせようホトトギス」、自分たちの都合がわからなければそれをリーダーとしてよく説明し、わかってもらってそれに従うようなリーダーシップをとろうというのが、ひとつのパターンでした。では徳川家康はどうであったか。「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス」、わからないなら向こうがわかるまでその人たちと一緒にじっと待ってみよう、その待つ時間を持ってリーダーシップを示してきた。ひとつの問題について、リーダーたちというのはそんないろいろなパターンを持っているだろ

うと思います。その時代時代の中で、しかもこの３人の違ったリーダーは、同時にひとつの志を持っていたと思う。本当に人々が幸福になるような世界をつくっていこうではないか、ということを認めながら、その３人は違ったリーダーシップを発揮しました。

「リーダー」という場合、その人のリーダーシップについて先ほどからたくさん皆さんが並べております。これを透明なものの上に重ねてみるとしましょう。誠実な人、公平な人、先見性がある人、洞察力がある人、バランス感覚がある、社交性がある．．．、これらを全部重ねてみる、そんな人がいるか。それを透かしてみたら何が見えてくるか、神様しか出てこない。「神様」というのは言葉でなくて、「絶対に不可能なものがない」ということの意味でしょう。そんな人は本当はいない。言い換えたら、私たちにはどこかで欠けているものがたくさんある、もしかしたらそのうちの１つか２つしかないかもしれない、しかしそのことについてしっかりしたものを持つ、ということが本当は必要ではないか。

私は明日、まとめをしなければなりませんから、ここであまり言うとしゃべることがなくなっちゃうのではないかと心配しています（笑）。だけど、もっとよく考えてください。昨日の溝田先生のお話の中で、私たちは何を要求されたのか。それは、世界が今曲がり角に来ている、その曲がり角の中であなた方が新しい時代を担っていくためには、いろいろな意味でこういった洞察力を持ってほしい。こんな大きな歴史の曲がり角の中にあるということについて、今日お話された鮎川先生は「千載一遇のチャンスではないか」とおっしゃった。私たちはその時、どんな状況でそこにいて、どういう志を持ってそこを曲がるか、それができる人たちこそ、本当のこれからの時代のリーダーだと言えるのではないか。

今日の鮎川先生のお話の中で、私たちがそのことを考えた時に、実は世界というのはひとつの国のリーダーシップではやっていけないということがわかってまいりました。みんなと一緒に考える時、世界を相手に考えながら、世界の中でよいリーダーになるとはどういうことかを考える時代になりました。今までは、それぞれの国の中のリーダーを考えました。だけどこれからは、「すべての人間」という時には、いろいろ違った条件の中にある人たちと一緒に生きるにはどうするか、それを見出していく努力が必要ではないかというのが、このセミナーのポイントだと考えてみますと、皆さんが一生懸命に考えていただいたリーダーの条件は、ひとつはそういう時代の中で自分たちは何を目指すかという「先見性」と言いますか、「志」と言いますか、皆さんが挙げてくださったいろいろなものが含まれております。そしてそのことのための決意を、皆さんが示してくださった時に、皆さん方は次の時代のリーダーの条件にふさわしいだろうと思います。おめでとうございます。

司会　ありがとうございました。

神戸ＹＭＣＡ顧問・元ＲＩ理事

今井　鎮雄 氏

〈今井　鎮雄氏〉
神戸ＹＭＣＡ顧問。神戸ＹＭＣＡ総主事を21年務め、現在顧問。1920年東京生まれ。クリスチャンホーンに育ち、幼時より福祉の心を育てられる。同志社大学法学部経済学科卒業。関西学院大学大学院で研究。国際ロータリー2000～2001年度100周年祝賀計画アドキック委員。会員増強グループコーディネーター（第３ゾーン）

今年もたいへん良い講師においでいただけましたね。溝田先生のお話は、世界的な視野でいくつかの事象が今、曲がり角にあって東西問題から南北問題へと世界が大きく変わりつつある。その中で私たちはもう一度、地球上の人間の問題を互いに共有しよう、私たちは世界の人とどのように関われるのかといった話がありました。また、鮎川先生のお話は、私もあまり科学の世界を知りませんでしたので、興味深く思いました。お話の中である意味でショックを受けたのは、「科学が技術の部品化されている」。本当はどっちが重要なのか。これまでは科学が進む中で、それを人間のために用いる時に技術が進むのに、この頃は先に技術が進んで、科学そのものが部品化されているということでした。そうした新たな問題を未来のためにはどう取り組んでゆけばいいかという先生のお話は、私にとっては大きな収穫でした。おそらく皆さんもお二人の先生方のお話をうかがって、いろいろなことがわかり、時代の曲がり角を感じられたと思います。

昨日、皆さん方のフォーラムでの発表を伺いながら、皆さんがこのＲＹＬＡのプログラムにある種の期待を持って参加されたこと、このセミナーを通して得られたことなどが感じられて私自身もそのことを感謝しております。

「現代」をどう理解するか

第１日目にも申し上げましたが、現代に生きるということについて、「現代」をどのように理解するのかもう一度考えていただきたい。私たちの周りには、毎日情報があまりに多く溢れすぎています。テレビを視ればイラクの問題も南米の問題についてもわかる。鳥インフルエンザが世界のどこで蔓延しているかということだってすぐわかるんですね。でもそれほどたくさん情報が

あるにもかかわらず、今という時代の中で人々が何をしようとしているのが、必ずしも十分には把握されていない。このことを理解しなければ、次の世代を私たちが担うことはできないではないかと皆さんはお考えだろうと思います。

最近、私は2冊本を読みました。ひとつは『同時代に生きて』という本。これは鶴見俊輔さんという哲学者と、徳島出身の瀬戸内寂聴さん。それからドナルド・キーンさんというアメリカ人ですが日本の近代史についてよく研究されておられ、またたいへんな日本通で、日本の歴史や伝統を世界に発信してくださる学者で、アメリカのコロンビア大学の名誉教授です。この方々は、3人とも1922年生まれなんです。1922年すなわち大正11年生れの82歳の3人の方が鼎談をしました。その内容をまとめた本が、岩波書店から出ています。私とほとんど同世代の方々の話なので、おもしろかった。

3人とも全然違う道を歩んでいますね。鶴見さんは戦前、アメリカの大学で勉強していて、日米開戦後日本に帰された。その時にアメリカの文化や科学、技術を学び、アメリカと戦争をしたら日本は敗けることをよくわかっていたそうです。そしてたいへん苦しい中で日本での生活を始められた。一方、瀬戸内さんは旧制中学、今で言えば高校まで徳島で過ごし、ずっと成績は1番だったそうです。それから東京女子大学に進み、作家になった。その後、出家されたわけですが、彼女は子供の時の生活を思い出しながらいろいろなことを語っています。ドナルド・キーンさんが大学生だった頃、アメリカ海軍は一部の優秀な学生に日本語を勉強させ、戦争後の日本占領政策に生かそうと考えた。彼はそうした将校の一人として、日本人の捕虜と日本語で対話しながら日本の文化を知るうちに、日本という国がすばらしい文化を持っていることに気づき、戦後は日本の近代史研究に費やしました。彼の名著の中に、明治天皇のことが書かれているものがあります。

鼎談の中で、鶴見さんはこう言います。「日本は1905年まではすばらしくて、バイタリティーがあり、将来に向かっての勢いを持っていた。しかしそれ以後は駄目だ」。1905年というのはロータリークラブができた年なんですが、日露戦争が終わった年。その少し前に日本では明治維新という革命が起きて、それは基本的には無血革命で、大政奉還されて1868年に明治になります。

それまでは100以上の藩に分かれていたんですが、それを一つにまとめて日本という国になろうとした。ところが当初は同じ日本人同志が言葉が通じなかった。薩摩弁と東北弁の人が出会っても話ができなかったわけです。そこで標準の日本語を作ろうと苦心してできたのが、今私たちが使っている日本語になっていくわけです。明治になって100以上の藩体制から、1人の天皇を中心とする日本国をつくるためには、何をもってまとめればよいのか。それは「教育」だとして、日本の教育がひとつに統一され、全国津々浦々にまで教育が行き届くようになりました。そうでないと、日本がひとつの国としてまとまることができなかったものですから、明治政府は教育にはたいへん熱心でした。

日本では、もともと江戸時代から、寺子

屋のようなところで教育は熱心に行われていたこともあって識字率は非常に高かった。日露戦争の頃に、ロシアの識字率は18%程度でしたが、日本は既に70%くらいだった。そういった教育の土台もあって、近代日本はめざましい発展をしたにもかかわらず、鶴見さんは「日本の発展はそれまで。日本人が新しい世界を築こうという夢を持っていたという点では、1905年以降は駄目だ」と言うんです。また、瀬戸内さんは「日本という国は、21世紀になったらどうなるかわからない。私たちは早く死にたいね」なんてことをおっしゃっておられる。同時代に生きた人たちが、何か悲観的で夢が持てないようなことを言っているので、私は「それは違う。私も話に加われたなら、もうちょっと違った角度からしゃべるのに」と思いました。

若者の狭い世界に失望

私は戦争に行き、そして上海で終戦を迎えました。終戦までは樺太も千島列島も日本の領土でしたが、当時のソ連に返しました。台湾も、マーシャル群島、朝鮮半島も返還した。そういった所に散らばっていた日本人も、みんな日本に帰ってきました。満州、今の中国東北地方ですが、そこからも日本人が引き揚げてきた。日本は、強大な軍事力で行っていた占領統治を、全部撤収した。さあこれから日本はどうするのか。3人の「死んだ方がまし」というのとは違う観点が、私にはあります。こうして小さくなった国の中では、今私たちは何をしなければならないかと考えました。そこから新しい日本の生き方を模索した。

このようにこのたった100年の間に、昨日の鮎川先生のお話を聞いても溝田先生のお話を聞いても、ずいぶん変遷があることにお気づきになったでしょう。そんな変わり目の中で我々は何を考えるべきだろうか。

もうひとつ読んだ本が、若い作家・綿矢りささんの『蹴りたい背中』。19歳の大学生が書いた本が芥川賞を受賞しました。同時にもう1人、20歳の金原ひとみさんも『蛇にピアス』という本で芥川賞を受賞しました。あまりに若いその二人の本を読んでみましたところ、たしかに芥川賞をもらうだけの文章が書いてありましたが、ある意味では失望しました。彼らが書いているのは、全く狭い世界なんです。綿矢さんの作品は、クラスの友達とやや気持ちが離れている、ある高校生の男女が偶然に仲良くなり、そしていろいろなエピソードがあるというストーリーで、2人の精神的な交流についてはよく書けているのですが、舞台は学校の教室と男の子の家くらい。今のように激しく時代が変化している中で書かれた作品であるにもかかわらず、時代背景への関心はほとんどみられなかった。今の若い人たちはそういう閉じこもった世界で生きているのだろうか。ちなみに金原ひとみさんの作品は、文芸作としての価値は別にして、「時代の中で生きる」という視点でとらえるとこれほど極端に閉塞された世界でみんなが生きているのかと感じて、その意味において失望しました。

これが、今生きている青年たちの現実なんだろうか。だとすると、同時代を生きた82歳の3人が「もう日本は駄目だ、早く死にたい」と言うことと、一緒なのだろうか。

この２つの本を見ても、私たちはこれからどう生きるべきかを問題にしなければならないと思いました。

現代日本が世界に果たす責任

「現代」を理解する手がかりは何か。昨日の鮎川先生からは、世界が「グローバル」から「グローカル」「ローカバル」へと変化しているというお話をうかがいましたね。実は国もそうなのです。冷戦時代は、「パックド・アメリカーナ」すなわちアメリカの自由主義を中心とした世界と、「パックド・コミューナー」すなわち旧ソ連の共産主義的な世界に分かれた、これが東西の構図でした。それから科学や技術が進歩するにしたがって、パックド・コミューナーの方は必ずしも経済的に豊かになっていない、みんなが物質的に相当苦しい生活をしていることに気がつき、片やフリーデモクラシーの方は経済的に豊かになっていった。では、改めて国をつくり直そうではないかと共産国の青年たちや多くの国が言い始めると、問題がいくつか起きました。その象徴的な出来事が、1989年の中国天安門事件。中国の青年たちが新しい時代を考え、今のような共産主義的な考え方だけではうまくいかないという意思表示をした時、中国政府はそれに対して弾圧を加えたという事件でした。しかしこれは大きな歴史の流れであり、その結果、1989年終わりにベルリンの壁が崩壊し、あっという間にソビエト連邦をつぶし、ロシア共和国が新しく生まれ、ほかの国々もそれぞれ独立するという状況になりました。

人々は「これで新しい時代が来る」と思いました。しかし次に起こった現象は自分たちの自由を自分たちで守りたいというグループの規模が、だんだん小さくなってきたことです。これが「ローカルの力」です。昨日のような言葉は、そういう状況の中で生まれてきたわけです。その状況をある人は「新しい中世」と呼んだ。要するに自分の民族や部族を中心として、小さなかたまりを作っていこうではないかという考え方が生まれる一方で、ヨーロッパ共同体が誕生します。新しい世界を構築する時、どのようなまとまりが望ましいのかということが課題になってきました。

そういう課題の中で、私たちが次に考えたことは、情報化が進むと、経済も科学も技術も国境を越えるものであり、グローバルな社会というものを考える必要もあるだろう、その際、都合のいいもの同志は団結しようとするわけで、例えばＥＵが誕生します。するとそれに対して、アメリカがアメリカの連合をつくる。では、日本はどこと連合するのか。本来ならば日本は、アジアの国々と仲良くしたらいいではないかと考えるのが、当然でありましょう。そして世界がひとつになっていくという方向をたどるのも、必須ではないかと考えられます。その意味において二つのベクトルの間で私たちの国も時代も激動しているのです。

その激動の中で、日本という国は世界の中でますます大事な役割を果たさなければならないのではないでしょうか。一方においては先進工業国としての役割があり、もう一方では、経済的なイニシアチブをとることができる。科学的な水準においても、けっして劣っていない。ということである

ならば、一体そのような知識や技術やお金を持っている国の人たちが、これからどうふるまうのかということは、当然世界に対して大きな責任があります。けれど今、日本はそのことについての哲学を十分に持っているとは思えません。

リスク・ソサエティー

さて、近代日本が急激に発展した理由は、「産業社会」が生まれたからです。昨日のお話のように、蒸気機関が発明され、いろいろな産業が生まれると、それまで農業を中心に土地と一緒に生きていた多くの人たちが、工業を中心として生きるようになった。工業社会の発展は、都市化社会を形成します。工業化が進むと、人口は都市に移動してきた。かつて日本は、お父さんやお母さん祖父母と一緒に暮らす「拡張家族」という形態をとっていましたが、第二次大戦以降は工業化が進んで、人々は都市へと集まっていった。今、日本の人口の多くが東京に集まっています。それは東京という都市が、今のような世界の状況の中でひとつの役割を果たすために、多くの人を必要とするからです。これはいわば産業経済が進むにしたがって出てくる「ひとりでの変化」です。

ところが、そうしてひとりでに変化してきた中で、家族の形態は「拡張家族」から「核家族」へ変化した。都会の中にはアパートやマンションができて、２ＬＤＫ、３ＬＤＫという区切られた中に住むようになる。岡山から来た人も篠山の人も小豆島の人も、みんなバラバラに入居しますから、隣の人が誰なのか知らない。その人たちは地域社会をもたず、言い換えたら、人間が集まった時に生まれる互いの協力とか、助け合いといったことがほとんどわからない、孤立化した人間の集まりなんです。

ちょうど余島に来た時、各地から集まった皆さんはお互いを知らなかった、孤立化していました。しかしその中で、私たちが交わりをもち、人間としてお互い同士が理解し合ううちに友情が生れるわけです。日本では都市が発展する時に、そこでの「コミュニティー」、つまり一般的な地域社会という意味ではなく、顔と顔とが見えてお互いが助け合う人間関係が生まれるような「コミュニティー」が十分に育たないままに都市化が進んだわけです。

こんなふうに私たちの世界は進んできて、100年を過ぎて気がついたのは、そこには大きなリスクがあるということです。1986年に、ウルリッヒ・ベッグというドイツの学者が『リスク・ソサエティー』、（日本では『危険社会』と訳されました。）を著わし、工業化の発展の陰で、人間にとっては不幸なリスクが生まれた。このような「危険社会」は20世紀後半から生まれてきた、と警告しました。それは例えば、工場からの廃棄物のせいで熊本の水俣病や、富山のイタイイタイ病、四日市ぜんそくなど、公害病を次々と発生させた。人間の生活は、科学と技術の進歩によって非常に便利になったけれども、その反面、大きなリスクを背負う世界に今なっている。さっき「ここに来たら花粉症が治った」と言われた方がいらっしゃいましたが、花粉症の人は手を挙げてください。その中で子供の時に花粉症だった人は手を挙げてみてください。誰もいな

い。花粉が私たちをいじめているのではなく、近代化で空気が汚れ、排気ガスなど、花粉にまじって飛散するいろいろなものが私たちをいじめているんです。「リスク・ソサエティー」というのは、そのようにいろいろな病気や感染症を持たらしました。昨日もお話がありましたけれど、ＳＡＲＳや鳥インフルエンザなど、これまでと全く違ったものが出てきました。これも現代の特徴です。

20世紀は人類を幸福にしたか

昨年、サルの研究をされている河合雅雄先生がこのＲＹＬＡでお話をしてくださいました。それによると、アフリカのエチオピアあたりに500万年くらい前、人類の祖先が生まれたそうです。その頃はまだ人間は動物ですから、餌を求めてあっちへ行ったりこっちへ行ったりしている。ある者はアフリカに残り、これが「ニグロイド」と呼ばれた。あるグループは北の方へ行き、今のトルコからさらに北へ行った者は「コーカロイド」であり、これは白人の祖先です。もうひとつのグループは、トルコのあたりから東に進路をとってシベリア、あるいはアラスカ、南米あたりまで行き、これが「モンゴロイド」と呼ばれる人たち。こうして人類は、発祥としてはひとつなんですが、気候や栄養の違いによってだんだん違った特徴を持つようになりました。だから今はいろいろな人種が存在しますが、人間の祖先はひとつなんですよ、とお話をされた。

このような中で、人間が知恵を出して「さあ、これからは人間として生きよう」という自覚を持った、要するに文化を持つようになったのは、定住して農耕文明をもった時で、世界各地の考古学者が調査したところでは大体6000年くらい前からだそうです。中国の黄河流域に発達した仰詔文化を今に伝える遺跡が西安に残っています。西安では兵馬俑が有名ですが、これは2300年ほど前のもの、ところが黄河文明の遺跡というのは6000年前の小部落がそのまま残ったものです。

こういうことから、人類の長い歴史から見て、急激に豊かになったのは産業社会、工業社会の誕生以降でした。そして20世紀は、その最たるものとして花を咲かせましたけれども、その反面、今のようなリスクを負う世界が生まれてきました。２年ほど前、京都に各国の学者が集まって、人間が歩んできた道を振り返りました。さて20世紀はどんな時代であったか。「20世紀というものは、人間の欲望を満たすことにはずいぶん貢献をしたけれども、人間が幸福になったかというと、そうではなかったのではないか。人間の欲望を満足させるとは、例えば家の中に電気掃除機があり、冷蔵庫があり、お風呂も洗濯もボタンひとつで、ずいぶん楽になった。だがそれは人間にとって真の幸福だろうか。人間の幸福とは何だろう、それをもう一度考えよう、「公共の哲学」を考え直そうという会でした。そして「20世紀は人類を幸福にしたか」。その際、人間

の欲望を消したし、便利さやモノの豊かさをもたらしてくれたのは事実だけど、そのことが人間の幸福と同じ意味にはならないだろう、ということがみんなの話題になったそうです。私たちはそういった曲がり角に立っています。

もうすでに、経済が国の枠組みを越えて発展していることは事実です。コカコーラはアメリカの会社ですが、世界のどこででもコカコーラは飲めます。あるいはアメリカで視たテレビ画面がきれいだなと思っていたら、それは日本のソニーがつくったテレビで、時間が狂わない時計はセイコーだった。科学や技術の進歩によって私たちは豊かになり、それによってつくられた製品は国境を越えていきます。今、テレビを一番たくさん作っているのは日本ではなく、中国です。もう2～3年すると科学や技術の進んだ中国の製品がどんどん世界へ進出するでしょう。また、コンピュータを上手に扱える人はインドに多いというので、当時の森首相はインドまで技術者を招聘しに行きました。

人間の安全保障

こうして科学や技術は世界を越えていきましたが、しかし人間の安全や人間性を取り戻すことを考える場合、このような状況がよいかどうかと考えると、必ずしもそうではないと思うわけです。経済というのは人間の欲望を満足させるために十分だったけれど、人間の幸福のために十分ではないのではないかと言い出した経済学者がいます。アマルティア・セン教授というインド系イギリス人です。この人は1998年に新しい経済学で人間を中心とする経済効果を考え出し、ノーベル経済学賞を受賞しました。アジア系で経済学賞を受賞しているのはこの人だけです。彼は経済は、人間の幸福に仕えることが大事ではないかと考えた。いつの間にか、経済というひとつの道具のようなものが発達して、人間が経済に使われるのはおかしいのであって、人間を幸福にするために経済は使われなくてはならないのではないかと唱えました。そのことが大きな考え方の転換をもたらして、ノーベル経済学賞を受賞したわけです。

日本でも何人かの学者は気がついて、同様の提言をしております。学問のスーパースターはたくさんおられますが、人類の幸福について、そのためにみんながどう生きるかということについては口を閉ざし、自分の世界に閉じ込もっておられる方がいらっしゃるのは、日本にとって大きな損失だと思わざるを得ません。

ところが、そのことに気がついている人は、いくつかのことを言っています。先日の溝田さんのお話の中に「人間の安全保障」という言葉がありました。それは人類の安全保障ということです。飢えることもない、病気もしない、戦争にも巻き込まれない、平和な世界をつくることによって、人間は幸福に生きることができるのではないかという視点です。それを言い出しのは、日本の小渕首相です。2000年に国連は、どうすれば世界が平和になるかについて考えようと、世界のトップリーダーを集めました。そしてその年の9月7日の国連ミレニアム・サミットで、亡くなった小渕さんに代わって森首相が演説をしました。これはその時

の資料ですが、「新しい世紀を迎えるにあたって、我々は紛争、人権侵害、貧困、感染症、犯罪、環境破壊といった人間一人ひとりの生存、尊厳を侵すような脅威に直面しております」。それから「我々はこれらの問題に対して、人間一人ひとりを大切にするとの観点から、わが国日本は『人間の安全保障』を外交の柱に据えて、21世紀を人間中心の世紀とするために、全力を挙げてまいりたいと考えています」。そしてそのために私たちはお金を出すから、ぜひ世界中の人が安全で健康で、豊かで平和であるような仕組みをつくることを考えようではないか、と演説しました。1999年に日本は5億円を拠出して国連に「人間の安全保障基金」を設立し、その翌年に森首相が国連で演説をした後、66億円を「人間の安全保障基金」に寄付しています。さらに、緒方貞子さんとアマルティア・セン教授を共同議長にして、国連内に「人間の安全保障委員会」をつくりました。緒方さんは、ご存知のようにロータリー財団の第1期奨学生としてアメリカに渡り、政治学を勉強されて学者になりました。そして国連難民高等弁務官事務所の長官を務められた方です。この方々は何度か会議をいたしまして、昨年2月に東京で最後のまとめをして発表しました。日本は「人間の安全保障基金」に総額200億円を拠出して、「すべての人間が仲良くなるようにしようじゃないか」と世界の人たちを集め、アフガン問題にしろイラク問題にしろ、いろいろな形で人間の安全保障について具体的に努力してまいりました。

こうして、緒方貞子さんとアマルティア・セン教授のお二人が2003年2月に小泉総理に最終報告書を提出いたしました。この最終報告書には、国連安全保障会議にもっといろいろな人を加えましょう、常任理事国と同時に非常任理事国の人たちも集めて、みんなが戦争や経済の問題だけでなく、人間の問題を考えることを大事にしようという提言も含まれています。

いわば、「21世紀の新しい世界は人間を中心としよう」という考え方は、日本から発信されたわけです。ですからこれについては私たちは大きな責任を持っています。日本はこの30年、40年の間は何もできなかった。「私たちは何もできなかった。もう死んだ方がましだ」と鶴見さんは言うけれども、あるところではこういうことを一生懸命している人たちがいたということです。しかし、もっと具体的なそれに肉をつけたり、あたたかい血を通わせる仕事というのは誰がするのかというと、ＮＧＯやＮＰＯなどの働きが必要ということで、日本の中にはＮＧＯやＮＰＯがたくさん生まれました。

福祉国家の建設

ちょっと考えてください。総理大臣が外国に向かって提言し、日本の政府が国際組織に200億円ものお金をつぎこんでいる。ところが、あまりそのことは知られていない。新しい世界の流れを、互いに一緒になって考えるような雰囲気が、これまでの日本には足りなかったということを心しておかなければならないのではないか。私たちのＲＹＬＡの仕事のひとつは、若い人たちに、そういう世界状況下での具体的な問題を伝えながら、一緒に考えてもらいたいということなのです。

もうひとつ言いたいことがあります。日本は、第二次大戦が終わると平和な国を作ろうではないか、みんなの暮らしが良くなるようにしようではないかという時に、「福祉国家の建設」という言葉をつかいました。福祉とは、人間の生活の実態です。人間が幸福に生きているかどうかということです。そのために必要な手配はしなければならないし、また必要なものが足りない人たちには、それを与えてあげなければならない。例えば車椅子が必要ならそれを用意する、それを押してあげる人がいるならそのお手伝いをすることが必要です。これは福祉活動のひとつとして認めることができる。しかし、車椅子を押してあげたらその人は幸福になれるか。東野洋子さんは、ダウン症のお友達と一緒に20年以上つきあっていますが、東野さんはあの人たちがかわいそうだからやっているわけではないんですよ。それは彼らが友達だからであり、共に活動している時、ダウン症の人たちが生きている喜びを自分で見つけて、それを楽しんでいるということが、私たちの喜びなんです。

福祉を考える場合、私たちは「福祉国家」というある種の方法論を見出しました。それはイギリスのビバリッジが提唱したもので、国民が幸福に生きるためには、3つのことだけは約束しないといけない。ひとつは健康ということ。医療についてお医者さんたちにいろいろ考えていただいて、私たちの健康を守ってもらおう。感染症が少なくなったおかげで、長生きをする人が増えました。これは医療や技術の進歩のおかげです。ところがこの頃は感染症よりも生活習慣病が問題化しています。アメリカでは今、「肥満は犯罪である」と言われています。また、感染症についても新しい感染症が生まれてきて、それにはこれまでの薬が効かないから、新しい薬をつくらなければならない。いずれにしろ、健康というものが一番大事で、国は人間の健康を守る。2つめは、みんなが経済的に生活が成り立つためには働く場所、「雇用」が必要です。さらに3つめは、その雇用が適正に行われるためには「教育」が必要です。世界には、教育を受けられない人がたくさんいるために、貧困が起き、貧困であるために病気になるという悪循環が起きる場合があるから、この3つをしっかり守ることによって、国民の幸福を考えよう。それを中心に「福祉国家」という概念をつくりましょう。また、私たちの生活を形作る資本主義経済は、必ず成功者と成功しなかった人との間に差が生じます。この差を何とか補って、みんなが同じように幸福を得るようにしようという仕組みが「社会保障」です。

しかしその保障を支えるためには国民は義務を負わなければならない。これが「税金」「年金」です。ところがこの頃、「どうせもらえないかもしれないから、年金保険料を納めるのをやめよう」という人がいます。義務を果たさないで、年寄りになったら保障の権利だけ要求するわけにはいかないですよね。なぜそんな間違った考え方が出てくるのか。それは日本の政治家が「そういう権利を受けるためには国民は義務を果たさなければならないですが、いいですか」ということを国民に訊かなかったからです。経済成長が順調だったときは、日本は国民から税金を余計に徴収しなくても済

みました。子供がたくさんいて高齢者が少ない場合、そして経済が成長している場合には、保障についてあまり気をつけなくても大丈夫だった。しかし、よその国々では国民にはっきり説明しながら社会保障のシステムをつくってきたのに対し、戦後、急激な経済成長が続いた日本では、大企業が国に税金を納めることで国民全てが保障してもらえたから、「保障はタダ」というような勘違いが起きて、福祉国家の基本概念が曖昧になってしまいました。そのために税金をとらなければならないんですが、税金の徴収はたいへんなことでして、福祉国家なんてことを言うと、ますます「国に税金をとられる」と言われるし、それで十分な働きができないから、「福祉国家」とはいわないで、「福祉社会の建設」として地域のみんなで支え合ってくださいとなってきまして、福祉国家構想はある意味では壊れかけてきました。

「公共哲学」の可能性

しかし、やはり福祉国家は必要だという考えが根強くあります。福祉社会国家だから地域の人たちみんなが助け合ってやればいいということで、「在宅ケア」「日本型福祉」といった言葉が使われました。でもそれは困難になってきた。なぜかというと、たとえば家庭が持っている機能が喪失、あるいは変質してしまったからです。昔の家庭だったら、お父さんが働きに出て月給をもらい、お母さんが家で子供を育て、お年寄りの世話をするというのが、家庭の機能のひとつでした。ところが子供の教育は学校に、お年寄りの世話は老人ホームにと、機能が分散され、多くの女性が社会的責任をとるようになってくると、これまでのような家庭の機能が十分果たせなくなってくる。

そういう現実の中で、新しい「福祉国家」が浮上してきたんです。そしてそのためには、もう一度全体的な組み直しをしなければならない。21世紀はそのことについて、もう一度考え直そうとなったわけです。そのポイントのひとつは経済です。資本主義経済構造は危険をはらむ社会であり、反省的に考えなければならないというのがひとつの柱です。2本目の柱は、世界の人と共に生きようとする時には政治的には、あらゆる人たちの権利を認める民主主義を基本に置かなければならない。けっして封建的なやり方では、世界を一緒に考えることができない。そしてもうひとつが福祉、社会保障です。それぞれのバランスをとって、これをやっていくためには、先ほどのアマルティア・セン教授が言ったような「人間の幸福を中心にして、政治も経済も我々の協力の仕方も、もう一度考え直そう」という考え方に至りました。

一昨年頃から「公共哲学」という言葉が叫ばれるようになりました。塩野谷さんという経済学者が3年ほど前に『経済と倫理』という本を書かれたんですが、これには「福祉国家の哲学」という副題がついています。この方は、私たちがどのようによりよい生き方ができるかということを中心に考え、そのためにはよりよい社会をつくらなければならない、それにはさっき言った経済、政治、そこから生まれてくる格差をなるべく少なくし、みんなが平等に生きるための

社会保障を考える、この3つを倫理の見地から組み立て直して社会福祉国家構想をつくらなければならない、という意見でした。そこにはこれまでと全く違ったアイデアがあります。今までは経済という学問、政治という学問は独立しており、倫理はその中に全く入ってなかった。技術の世界においても、人間にとって便利なものを開発すればいいとだけ考えてきたけれど、昨日のお話では「技術が科学を部品化することがもっとも危ないことだ」。科学の世界ではそういう警鐘をならすことができるかもしれないけれども、人間の世界では、それは「倫理」であります。今までと全く違う新しい経済学は、儲けさえすればいいのではなく、それが人間の幸福とつながるのか、社会の幸福とつながるのか、したがって世界の人たちと一緒に幸福になるのか、どういう時代をどうつくるのかということを、経済学者の方々が言い始めたわけです。

仲間として共生する世界

私たちはそのことに気がついているかどうか。日常的な生活の中にいるだけでいいのか。数年前に、私は障害者の抱える問題について海外の学者の方々とパネルディスカッションをしました。その時、今とはかなり状況が違っているものの、耳の痛いことを言われました。「日本という国は、ハンディキャップを持つ子供がいると、養護学校へ行ってくださいと言う。また、動作が少し遅いと、あなたは特別な作業所へ行って仕事をしてくださいと言う。そういうふうに障害者を排除し、健康な人、能力のある人、効率のいい人だけを集めて社会をつくっているのが日本ではないだろうか。お金が儲かると、特別な学校をつくってあげようとか、少し補助をしようと言う。社会というのは強い人も弱い人も一緒に生きているところ、みんなが共に生きる喜びを感じられる社会こそ社会というものではないか」と、あるアメリカ人に指摘されました。

弱い人も強い人も一緒になって生きる社会をつくることを、実は世界が要求している。ところが今まで日本は、弱い人を排除して、健康で仕事ができる人で効率優先の社会をつくり、よその人やよその国のことは「知りません」と言ってきたんです。そして今そのツケが回ってきています。私はインドネシアに行った時に、親しくなったインドネシアの人から「私たちは経済的に豊かではない、いろいろ技術や情報も足りない、その意味でどうしても日本が必要だ。自分たちが生きるために仕方ないから日本人とつきあっている」と、言われました。日本人というものは、その意味においては必ずしも世界の人、特にアジアの人たちに受け入れられているとは思えない。

では、私たちはどんなことができるのか。皆さんに考えていただきたい。ロータリーというのは、実はその意味において、100年の昔から人間の側に立って奉仕をしてきました。そして職業についても、できるだけみんなのためになるかどうかを考えながら仕事をする人々の団体でありました。本当のロータリアンというのは、そのことを考えながらみんなが団結してきたんです。そしてそうやって生きていこうという時に、「若い人も参加して」と呼びかけているんです。ＲＹＬＡに来てくださった人が全員、

ロータリーと協力してくれる、ローターアクトクラブに入ってくれるというわけには、なかなかいかないでしょう。しかし、ロータリーが考えている「命」、それは世界の人々とともに仲間として生きていこうという思いであり、今日こうして皆さんに「こんなに激しく変化する今という時代に、私たちにはこのような責任がある。それを、あなた方も仲間に入って一緒に担っていただけませんか」という私たちロータリーの願いのもとにこのセミナーが開かれているのです。このＲＹＬＡセミナーに参加した結果、あなた方はどう感じておられるでしょうか。考えてみてください、時代の曲がり角にある今日、けっして私たちは仲間となれたことを楽しんでいるわけにはいかない状況なのです。ここに集った一人ひとりが地球社会における何らかの責任を、誰かのことを考えることができるような課題を、自ら課していただけるとありがたいと思います。

あいさつ

国際ロータリー第2680地区
ガバナー 本山 新三

皆さん、あっという間に4日間が過ぎてしまいましたね。その間に、インフォメーションセンター前の桜がチラホラと咲きました。余島の開花宣言をいたします。

本当にこの4日間、いかがだったでしょうか。初日の溝田先生、キャンプファイヤーの今井先生、昨日の鮎川先生、また今の今井先生のお話、本当に感動的なお話を聞かれ、しかも昨日はフォーラムで、あるいは思索の時間をもって、皆さん方には非常に大きなインパクトがあったと思います。皆さんがここに来られるまでは、皆さんの頭の中は非常に透明なブルーで、誠に明哲な頭をされておったと思うんですが、現在の頭の中はモヤモヤと霧がかかったような状態になっていると思います。それでいいと思うんです。それが潜在意識になってしまうんです。

今から世界のために何をするのか、別に結論を急ぐ必要はありません。現在のご家族、学校、会社で、何かあった時に、このＲＹＬＡで習われたことを潜在意識の中でふっと目覚めてくる、それでＲＹＬＡに参加したひとつの効果があったと思うんです。

最後に、昨日の「リーダーとは何か」ということについてのお話をちょっとさせていただきます。リーダーには、ひとつは上下関係がございます。上下関係で一番特徴的なのは軍隊です。これは階級社会ですから、軍隊の場合は独断専行型のリーダーが絶対必要です。私は海軍でしたから軍艦の話をしますと、例えば潜水艦で潜望鏡を見られるのは艦長１人です。艦長が乗員の命をすべて預かっているんです。だから取舵、面舵は艦長の判断ひとつです。それによって乗員の命がどうかなりますから、命令一下、一糸乱れず動く、これが独断専行型です。そうかといって、独断専行型の反対が放任型のリーダーですけれども、この典型が日露戦争の大山元帥です。ただしこのリーダーには、絶対に参謀が必要です。大山元帥には小山源太郎という名参謀がついておりましたので、元帥は毎日のほほんとしていて、日露戦争に勝ちました。

私は今、ガバナーという仕事をしております。ガバナーというのは、全く水平社会のリーダーなんですね。そこで、私がガバナーとしてどういうつもりで務めているかを、皆さんにちょっとお話したいと思います。リーダーとして一番必要なことは、やはり私は「使命感」だと思います。けれど、使命感だけではリーダーは務まりません。これは使命感を持って、明確なメッセージを発することなんです。そのメッセージには、必ず目的と手段を入れなければなりません。何のために、どういう方法でもって、こういうことをやろうじゃないかというのがリーダーなんです。「おい、やれ」というのはボスです。リーダーとしてはそういうつもりで務めております。そして常に、リーダーの条件として心にとめている

のが、「LEADER」という言葉です。LはListen、人の話をよく聞く、次のEはEnergetic、エネルギッシュ、AはAmbitious、野心的であること、DはDrastic、決断、次のEはEnjoy、やはりリーダーは楽しまなければいけない、そしてRはReading、よく勉強すること、これは目標で私にははるかに及びませんけど、常にこれを頭においてガバナーを務めております。

今年のＲＹＬＡは大成功だったと思います。その陰でお世話をされた、両地区の委員長さんをはじめカウンセラーの皆さん、本当にご苦労様でございました。本当にありがとうございました。これをもって閉講式の挨拶とさせていただきます。

国際ロータリー第2670地区
アドバイザー　三宅　洋三

高松ロータリークラブの三宅でございます。この３泊４日のＲＹＬＡ研修、たいへんご苦労様でした。私が一番始めのオープニングパーティーの時に、挨拶をするようにといわれまして、さて何をテーマにしようかと考えたわけです。それで皆さんの顔を拝見しておりまして、そういえば私もちょうど皆さんの年頃にいわゆる「三恵」、天の恵み、地の恵み、人の恵みで人は育てられるということを教えられ、40年経ったなという気がして、あの時三恵のことをご披露申し上げました。あれから40年経って、はたしてあの教えに沿って育ったかな、どうかなということを最近考えます。

その時に「人は育てられる」ということを申しましたが、ちょっと説明が不足したかと思います。「人は育てられる」というのは、何もお金持ちになるとか、立身出世ができるということではなく、人が必要としてくれる人になること。例えば友達も必要としてくれる、世の中でも必要と考えてくれる、そういうような人間に育てられるということです。

ところが翌日の溝田先生のお話、それから昨日の鮎川先生のお話を伺っておりますと、このお二人は完全に三恵のモデルのような人だということに気がつきました。自分の人生を自分で切り開き、自分の活躍する場所を得て、多くの友人に育てられ、たしかにこの日本の社会が必要とされる人だと思いました。私はいつも三恵のことを言いますが、本当に三恵のモデルになっているような人にお会いしたのは、本当に初めてではないかという気がします。

それから翌日のカウンシル・ファイヤーは、私がここに初めて来たのが1995年で今年で10年目なんですけど、その第１回目の時のような感じでした。寒かったです。あの寒かったことが、ひとつは非常に印象に残っています。そして今井先生のお話を伺って、本当に厳粛な時間を持ったということは、私は65年目にして初めてでした。あのカウンシル・ファイヤーに魅かれて、この10年ＲＹＬＡに通っているという気もしております。

最後にもうひとつ、皆さんにお願いしたいことがあります。それは、思い出ということ

であります。「思い出に耽る」というのは何か年寄りくさい感じがしますが、思い出というのは、自分の人生を振り返ってみることではないかという気がしております。昨日、「思索の時間」というのが１時間ありました。皆さんの中では、本当に初めての経験の人も多かったと思いますが、その１時間に何を考えたのかと思いました。「将来俺はこういうことをやる」「昨日喧嘩したのはちょっとまずかったな」など、いろいろな思いがあったと思います。しかし思い出ということは、今日つくられるわけではありません。「今日」は10年経つと思い出になります。だから思い出の習慣をつけるということは、いい思い出を残したい、いい思い出を残すということは、今日一日を悔いのないよう送るということではないか。私はその思い出ということを、最近非常に好きになって気になっております。

いろいろ申し上げましたが、皆さんのこれからの生活において、この３泊４日のＲＹＬＡがいい思い出になりますように、心からお願いいたしましてご挨拶といたします。どうも皆さんお疲れさまでした。

国際ロータリー第2680地区

アドバイザー　米谷　　収

米谷でございます。神戸南ロータリークラブの新世代のアドバイザーということで、1999年からここへ来ております。簡単にご挨拶をいたします。

ちょっと黒板に書かせていただきます。「Enter to learn and go forth to serve.」この標語は、ガバナーをされた方は皆さんご存知だと思いますが、ロサンゼルスの南にあるアナハイムで、全世界のガバナー・エレクトの人が研修を受けます。その時に、入口にこの標語が掛かっているわけです。皆さんがここへ来られた時には、そういうものは掛かっていませんでしたけれども、まさしくこのＲＹＬＡセミナーというのは、ここへ来て短期間で入りきらないくらい勉強されたと思います。その勉強したことが、これから皆さんが自分の場所に帰られて、どういう生かされ方をするのかということは、皆さんがこれから考えてやっていただきたいと思います。この感動が血となり肉となることを期待しております。

それともうひとつは、溝田先生の講演の中に「国際貢献」という言葉が出てきましたが、国際貢献をするために、必ずしも外国へ行く必要はありません。今、この日本にはたくさんの外国の方が勉強しに、また働きに来ておられます。もちろん観光の方もおられます。それから将来、日本は少子化社会ですから、若者はだんだんと減ります。学校経営も大変です。そこで留学生をたくさん迎えようとしています。そういう方たちと、どのような交わりができるのかということも考えていただきたい。何も外へ行くことだけが国際貢献ではないと思います。「ローカル」と「グローカル」「グローバル」という言葉がありましたが、身近なところの国際貢献をひとつ心にとめておいていただきたいということです。

それから実は、５月23日から26日まで、大阪でロータリーの世界大会が行われます。そ

して世界から約４万人の方がそのために来られます。そこで５月24日に「ＲＹＬＡワークショップ」というのがあります。午後１時から５時までの４時間で、いろいろなプログラムがあると思いますが、その国際ＲＹＬＡのコミッティーの１人に私が選ばれております。そしてその際、パネラーとしてＲＹＬＡについての発表をすることになっております。そこで皆さんにお願いですが、今回のＲＹＬＡでどんなことを感じられたかを、できれば私のところにメールかファックスをしていただきたい。全員の方に強制するわけではございません。どなたかのすばらしい感想文がありましたら、この国際ＲＹＬＡワークショップで、我々はこんなすばらしいセミナーをやっているということを発表したいと思います。そしてその出席者が、これだけのすばらしい感想を持って今、活躍をしているということを皆さんに披露したいと思っております。

そういうことでお願いを最後にしましたけれども、本当に今日は、心を満たして各自の持ち場に帰ってください。本当にご苦労様でした。

ディーン　白石　正明

最後になりましたが、私の方からも一言。皆さん本当にありがとうございます。新米のディーンで、ちょっと焦ったところもあったんですけど、この３泊４日で受講生からパワーをいただき、またこれをロータリー活動や仕事にも生かしていきたいと思っております。本当に皆さん、ありがとうございました。

A 班

有末　拓史

今回、ＲＹＬＡに参加できよい経験をさせて頂き、また、よい仲間に出逢う事が出来、３泊４日のセミナーに参加してよかったです。

このセミナーの話を頂いた時は、「とりあえず参加してみようかなぁ」と安易な気持ちで申し込みをして参加して来ましたが、余島に着きロータリーの事などオリエンテーションでロータリアンの方々の話を聞いていっていると「自分は何をしに余島へ来て４日間で何を得ていかないといけない」と考え直しました。

高いレベルの講義を聞かせて頂き、自分が知らない知識や知っているけど理解出来ていなかった事を学ぶ事が出来、自分にとっていい自己啓発になりました。

フォーラムのテーマ〝リーダーの条件〟と発表された時は、今の自分が何故リーダーになったかをグループに言えばいいと思いグループで発表しました。でも、発表し終った時に自分はそれだけのためにリーダーをやっているのか？と考えてしまいました。今、この事を深く考えるべきか分かりませんが、リーダーをやりながらゆっくり考え、よい条件にあったリーダーになっていこうと思います。

大江　哲広

「ライラセミナーについて」

私はライラセミナーで一番学んだことは、人としてという人間の面です。私はＡ班の中で積極的に話し、間違ってることも多々生じたのですが、初めから引かれて話してくれないのではなく、一人一人が自分という物を持っていたから、毎日義論でき良い意味で言い合いをし、Ａ班の14人全員がお互い高め合って、この少ない４日間でしたが、人という面で成長しました。

私はこの余島に来るまでは社会の常識を知りませんでした。私は何でも思ったことは言ってしまう人です。でも、Ａ班で義論して行く内に、多くの私の為になる事を言ってくださいました。私はこの余島という時間を忘れさせてくれる環境があったから、私は３日目の１時間の思索の時間以外で、一人で自らを見つめ直しました。私は多くのこと

を考えましたが、思いやり・言葉の使い方や難しさ・仲間と友の大切さというこの3点が成長できる様に頑張りたいと思っています。暴力は相手を外見的に傷つけるかもしれませんが、言葉は相手の内面である心を傷つけます。心は元に戻ることはなく、その人の人生をも左右するほどの大切で重きを置かなければいけないものを痛感いたしました。

私はこのライラセミナーで学んだことや経験したことなどを、少しでも自分を推薦して下さった姫路南ロータリーや姫路獨協大学ローターアクトクラブの方々に、自分の良い点であると思われる熱い人というのを生かしながら相手の五感で感じてもらうのではなく心に訴え、先程も言いました様に、心には残りますから私の話したことで相手の心にいつまでも残る話をしたいと思っています。最後ですが、A班だったから私は考えることもあり良い仲間と出会えたと思っています。A班のみなさま本当にありがとうございました。

尾上　あさひ

「ライラセミナーに参加して」

今回のライラセミナーで5つの特色を堪能した。素晴らしい講義、自分の思いをぶちまけたキャビンタイム、余島の自然、話を聞いてくれたカウンセラー、最後に自由と規律。　余島に来る前は、リーダーシップをとるための何かを身につけてやるんだと意気込んでいた。自分を変えたい気持ちでいっぱいだった。誰かの役にたてる人になりたいと思っていた。4日間Aチームの一員と生活してきて一人一人の存在の大切さを感じた、Aチームの全員がそろってこそ意味があると思った。一人も欠けてはいけないんだと。そこで気付いたことが誰かのためになろうとか自分を変えたいと意気込む必要なんてないんだということだ。人は互いに影響し合う。その人がいるだけで幸せになれるということもある。自分がここに存在しているということにもっと誇りを持ちたいと思った。リーダーシップを身につけるのはその後の段階でいいと思った。心が安定し、思いが強ければなんでも実現できるんだ。☺

最後に、Aチームのみんな（もちろんカウンセラーも含む）に『ありがとう』が言いたい。この4日間みんなと一緒に成長できた気がして嬉しい。今日からそれぞれ自分の持ち場に戻りまた成長していくんだと思う。私もみんなに負けずがんばるぞっ。

鎌田　亘雄

「「ＲＹＬＡ」参加の感想」

ＲＹＬＡの事を理解せずに参加申し込みをするハメに。実際、当日の船に乗船する迄、不安な気持を払えないまま、余島に入島致しました。今年で34歳の私にとっては、10年ぶり以上になる、他人との共同生活、しかも参加者は、10歳以上も歳下ばかり。ついて行けるの…という気持ちもありました。

しかし、初日の晩から、そんな不安は全く何処かへ飛んでしまい、楽しい生活に変わりました。日常と掛け離れたこの余島で、日常は接する事が無い純粋で前向きで、それぞれの環境で、リーダーを目指す、利害関係の無い仲間と出会えた事に本当に感謝。自分とは違う目標で物を観る彼らの感性は、本当に勉強になったと思う。明日からは通常生活に戻る事になるが、この4日間に感じ取った気持ちは、一生忘れないと思う。来年以降のＲＹＬＡには、20歳代だけでなく、30歳代の社会人も、多数参加してみるべきと思う。私も、自分と同年代の友人に、この4日間の話しを、たっぷりと自信満々にし、多くの友人にも、味わって欲しいと感じた。

カウンセラーのお2人をはじめ、お世話して頂いたロータリーの方々、ＹＭＣＡの方々には心から感謝致します。有難うございました。

鳥野　博志

私は、このＲＹＬＡセミナーに参加して本当に多くのモノを手に入れることができた。　そして、多くのことに気づき、悩み、考えることができた。

それは、このような恵まれた自然の中で、講義やキャビンタイム、思索の時間、バズセッション、フォーラムなどを体験した結果であると考えられる。

最初は、住んでいる地域も年齢も違う人々だったので、緊張もしたし、うまく話すこともできなかったのだが、オープニングパーティー等、様々な活動を通じて、今ではかけがえのない仲間になったと思う。

恐らく、長い人生の中で、このような貴重な経験ができることは、そうはないと思うし、本当に一日一日が、とても充実した日々であったと思う。

講義では、素晴らしい知識を得て、そしてレクリエーションではくたくたになるまで遊び、または、キャンプファイヤーでは様々なことを考え、思索の時間では、もう一度自分という存在を見つめ直し、バズセッションやフォーラムでは討論を交わし、様々な人の意見を聞くことができた。

私は、このセミナーを通じて、自分の視野の狭さを痛感させられた。

人間とは、成長するものだし、自分自身、常に今日の自分よりも明日の自分が成長していることを願っているし、そうなるように努力をしようとしている。

幸い、今回のセミナーでは、ロータリアンを始め、様々な素晴らしい人々がいたので、大変良い刺激になったし、モチベーションも高まりました。

自分は、まだまだ人間的にも未完成ですが、このＲＹＬＡセミナーで得たことを生かしていつか、ロータリアンの方々と肩を並べられるようになるよう頑張っていきたいと思う。

最後に、Ａ班のみなさんを始め、このセミナーにかかわったすべての人に感謝したいと思います。どうもありがとうございました。

斉藤　顕良

「ライラロータリーセミナーについて」

私は、ロータリークラブの事については、名前も初めて聞き全くの０からセミナーをスタートした。１日目は、開講式やオープニングパーティーだったので特に不安等も無く、受講生と親睦を深めた。２日・３日・４日目になると、人間・自然・科学・技術の講義があった。講義の内容は実にハイレベルで、人間自身の心をもっと豊かにしていき、身心共に健康になろうじゃないか。自然も、失う前に自分達が住んでいるこの地球を大切にしていこうよ。科学では、知的欲求・心豊かなくらしを目指し、技術では、より良い生活への欲求、安心、安全なくらし、充足した豊かなくらしに今は慣れてしまっている。と溝田先生、鮎川先生、今井先生が話して下さいました。

私のグループでは、ロータリークラブに加入している人が非常に多く、少しずつ私自身にも興味がわいてきた為、どの様な活動をしているのかを聞いてみると、主に地域清掃や募金、母子寮等に行き、土日祝日等を利用して、野外活動を行ったり、市等に前もって連絡をし、アクションペイントと言った公園にインストラクターも呼んで壁等にペイントをしている様です。自分と同年代の人達が、今自分の出来る等を見つけている事が私は心から素晴らしい人達に出合ったのだと考えた。私は、３泊４日この余島で過ごしてみて本当に他では味わえない貴重な体験をさせて頂きました。これからの、私の人生観が変わるならば、そのきっかけは絶対にライラロータリーセミナーのおかげだと思う。

澁谷　絵美

「ＲＹＬＡに参加して」

３泊４日の日程を終えた今、余島に来て、このセミナーに参加することができて、みなさんに会えてよかった。と心から思っている。

たくさんの自然があふれるこの余島で、普通に生活していたらきっと出会えることのなかった人達と一緒にレクリエーションをしたり、毎晩時間を忘れて話りあったりすることができた。初めて会った人と、ここまで心を聞いて自分のことやいろいろなことを話し合えるなんて以前の私なら想像もできなかった。人見知りをしやすく、自分から話をするのにとても勇気がいる方なので、参加

する前は不安でいっぱいだった。けれどいろいろな活動をしていく中で、いつもは話を聞くだけの自分が、少しずつでも思っていることを話せたり、話したいのにうまく相手に伝えられなくて悔しいと思えるようになった。あっという間の4日間だったけれど、私にとっては充実したかけがえのない時間をすごすごとができたと思う。こんな風に私を変えてくれたみなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。

この余島で感じたこと、学んだことをぜひ明日からの生活の中で、自分なりの方法で生かしていきたいと思う。4日間、本当にありがとうございました。

角田　早都子

「ライラに来て」

私は、バズセッション、フォーラムのテーマ『リーダーの条件』についてはじめは、様々な人の個性を認められる、ということだと考えた。私のように消極的であっても集団のなかに受け入れてくれるような人がリーダーであってほしいと思ったからだ。

しかし、夜のフォーラムで、リーダーを皆でサポートしていくという意見を聞いたとき私は自分の欠点に気づかされた。

私は人見知りを少しでも直そうとライラに参加した。Aチームに入り、たっちゃんがリーダーになった。たっちゃんも人見知りだと言った。最初は、同じような人が参加していたんだなあとうれしかった。でもすぐに気づいた。彼は他人に対して誠実であろうとしすぎて少し疲れてしまうのではないかなとかんじた。私の場合は他人の目を自分で勝手に意識しすぎて、嫌われる、笑われるのをこわがっているだけ。

そしてフォーラムを通して、一人一人がリーダーを支える、自分も責任を持って動く義務があることを教えられた。

ライラで気づいたことはここでなければ気づけなかった事だと思う。楽しい思い出もたくさんできた。参加して本当によかったとおもう。

立谷　晶彦

「ＲＹＬＡセミナーへ参加した感想について」

今回、第26回ＲＹＬＡセミナーへの参加するかどうか正直迷いました。

自分が参加して人に迷惑をかけてしまうのではないか、そうでなくても、人と話すことが苦手なのにＲＹＬＡセミナーに参加してもいいのかという気持ちがありました。

でも、こんな暗い方向ばかりに気持ちを向けていくことを考えずに、一度は、参加したいと思っている気持ちがあるのなら、今、参加しょうと思い、このＲＹＬＡセミナーに参加しました。

このＲＹＬＡセミナーでは、いつの間にかグループリーダーになっていて、まったく何をどうすればいいのかが本当に何も解らず、グループのメンバーに引っ張ってもらい、今日まで何とかやっとこれたと今でも思います。だけど、この短期間の中で、メンバー達と一緒にやってきて、僕には、リーダーつまり人の上に建つようなことはできないけど、人と話して一緒に考え、協力していく事ができる力があると解って、今の自分をすぐに変わることはできないけど、少しずつでいいから色々なことにがんばってやっていきたいと思いました。

そして、本当にＲＹＬＡセミナーの人達にすごく感謝します。決して一人では、何もできないけど、人を信用して活動していくということをグループのメンバー・カウンセラー・このセミナーに参加した人達に教えられました。

本当にありがとうございました。

寺岡　喜丈

「RYLA SEMINAR」

ライラセミナー参加を経験した事で視野が広がり色んな角度から物事を判断出来る様になったと思います。様々な職業や年齢の受講生が共存し、目的、出逢い、自由、時間、自然そして生きる等について学び、お互いを理解し合う為に会話をしたこの素晴らしい経験を糧に生きていきたいと思います。

ライラセミナーには、青少年活動のよき指導者や将来の日本を担う指導者を養成する目的があります。私はこの目的に少し近づけた事を実感しています。たった3泊4日のセミナーではあったが、人は変わろうと思う強い意志があれば、短い時間でも成長し、変わる事が出来るのです。ライラセミナーのプログラムが良かったと言うのが本当の所なんですが、成長したと思える自分も褒めてあげたいと思います。この感想文の後に昼食が待っていると思うと、乱筆乱文・支離滅裂な文章になっていて、素晴らしい経験を上手く表現し、伝えられていないかも知れませんが、私は本当にこのライラセミナーに参加出来た事を誇りに思います。最後になりましたが、この様な素敵なプログラムを催している、ロータリーの方々、このプログラムに携わる人々、この第26回ライラセミナーに参加している52人の友に感謝したい。特に私が所属したA班のカウンセラーのお二人と、どうしようもなく熱く面白い11人の戦友に・・・。本当に本当にありがとうございました。またみんなで集まって遊ぼうゼ！！

廣島　幸子

「26 th RYLA Seminar に参加して」

ＲＹＬＡセミナーに参加して本当によかったです。それは年齢も、出身地域も、職業も全く異なる、たくさんの新しい仲間と同じ時間を共有し、これまで私が全く知りもしなかった価値観、ものの見方に触れ、新しい視点を数多く発見することができたからです。私はＲＹＬＡと同じ26歳ですが、これまでアルバイトを除いては一度も社会に出ることはなく、大学院の研究室にずっと属してきました。大学院の研究室というのは非常に閉鎖的な世界で、専門分野の同じ少人数の学生と教授陣だけから成り立っており、そのグループの中でしか通用しない常識や価値観に私はこれまでどっぷり浸かってきました。今まではその小さな世界の制度に守られ居心地よく生きてきましたが、今回のセミナーに参加して、これから社会に出てもっと広い世界と接していくためには、今までの自分では全然足りないということに改めて気づかされました。これまで自分は研究室という狭い世界で、自分の仕事や興味だけに一生懸命になって生きてきました。もちろん他人のことを全く考えないで生きてきたわけではありませんが、このセミナーのグループ活動を通して、仲間と連帯感、自分の周囲のことを常に意識し他人の為に自分は何ができるかを考えることが、幅広い世界で活動していくには、当たり前のことだけど非常に重要であると、身をもって体験することができました。また今回のセミナーの講義を聴き、世界での共生を考える時、自らが属する集団内だけでなく、常に周りの世界がどう動いているのかをじっくり見つめ、時代感覚を持った人間にならなければならないということを強く感じました。たった一つの領域だけに目を向けるのでなく、他の領域のことも視野に入れ、それをうまく融合させていくこと、つまり、あらゆる状況において、その時その場所で何が求められているのか、どういう目標に向かっていくのがベストなのかについて的確な判断をし、柔軟な対応ができるということが大切なのだと再認識しました。今回のセミナーは、社会に出て自分が何かしたい、何かを変えたいと思ったとき、その目標を達成するために、自分が仲間と連帯し共同していくこと、そして自分がいつでもそのリーダーになれる資質を養っていくべきだということを私に教えてくれ、そのためのヒントを数多く提供してくれたと思います。このＲＹＬＡセミナーを出発点に、これから社会に出て様々な人たちのために頑張って生きていきたいと思っています。ＲＹＬＡに参加された皆様、本当にありがとうございました。

平松　真悟

「第26回ライラセミナーを終えて」

私がこのセミナーを通して得た事は主に３点ある。

まずは幅広い人々と関わりあうことの重要性である。私は今までの人生で特にきっかけがなかった、いや自分で機会を作る必要性を感じていなかっ

たため、今回のような大勢の方と一緒に3日3晩生活を共にしたことはなかった。しかし、実際に集団で多業種の方と深く交われたことは、自分の見識を広める意味においても、他人を理解する意味においても大変有意義な時間となった。特に、毎日寝ずに、もしくは睡眠時間をぎりぎりにまで削って討議した事は良き思い出となった。

次に、継続することの重要性である。人間は誰しも意識をしなければ自分を良くするためとは言え、苦しい事や辛い事からはすぐに逃げようとする。しかし、苦しい事から逃げていたのでは急速な成長は見込めない。自らが何事も永続的に継続させる意思、これがその人の成長スピードを早めるのではないかと感じた。実際、今回講義をいただいた先生方は、日々勉強をされているようで、その知識の豊富さと意思の強さというものが話からも伝わって来た。

最後に感じた事が奉仕の精神である。私は今まで他人のために働きたいという意識はあったが、本当にそれが全うできているのかという疑問があった。プライベートにしろ職場にしろ、相手の心を思う気持ちを大切にし、その輪を広げていくことにより、より快適な環境がおとずれるのではないかと思う。一つ一つの小さな積み重ねという言葉は、何事においても共通する最も大きな言葉であると、私は強くこのセミナーを終えて思った。

A班カウンセラー　岡野　和枝

出会い、そして多くの交わりの時に感謝です。

人が人である為には、共に語りあえる、共感できる仲間の必要性をあらためて深く考える事のできた4日間でした。

時代の大きな曲り角に、「私達一人一人が何をしなければならないのか」、このとても大切な課題を、日々の中でどう実践していくべきなのかと考える時、この余島での4日間はとても大きなきっかけになると確信しています。

一人一人がちがうということを認めあった上で、共に力を出しあえる、そんな場所づくりに力を注いでいきたいと思います。

A班カウンセラー　植松　慶太

「'04ライラにて」

今回は2年振り2回めのカウンセラーとして参加させて頂きました。やはり今回も前回と同様に1泊4日の行程となりました。私にとってこのライラではどうしたものか班のメンバーにいつも恵まれます。と言いますのも、年齢、出身、職業（学校）など、ほとんどバラバラの条件の中から無作為に抽出されたはずなのに不思議と問題児とか、班内でのグループ内グループというのができず、常に一体として行動できるのです。今回のA班では初日、自己紹介から雑談への移行時期に、話題の切間にシーンとする場面は見られました。こんな場合、カウンセラーとしては何か共通で語れる話のタネを振り皆の気持ちを一つの方向へ向かせようとしたり、ゲームなどの同一体験をさせ、気持ちの一体化を図るべきなのですが、すぐには対応せず、少し放っておいて様子をみていると、誰となく場の雰囲気を修復しようとするムードメーカーが現れ、又、話が連なっていきます。このパターンは班内のメンバー個人個人のキャラクターによる役割分担の始まりとして、観察者のカウンセラーにとって非常に興味深いところです。この頃がグルーピングの峠と言えるのではないでしょうか。そして通常、この部分で脱落者が出てくることもあるのですが、このライラでは、全くないのです。不思議としか言えないのです。ライラではキャビンタイム以外でも班の行動というのは密度の濃いものとなっているので、単に「適当に合わす」ということはまず考えられないのです。1日め2日め3日めと日を重ねる度に一体化してゆく様は正に余島の不思議、ライラの不思議としか思えないのです。ライラ・シンドローム（症候群）としか言えません。

（追伸）

フォーラムの時、A班が提案したプログラム「親子ライラ」ですが、そのままではないにしても、各地区で議論の場に上げてみて下さい。主旨は、1～26回のライラの同窓会的連合体のプログラムということです。ライラリアンのつながりが、各

回毎に区切られているように思えますので、全体を通してのプログラム開発ということです。
そうでなければ、フォーラムサブテーマ「併せてロータリーとの共働」を出しておいて、意見を求めるだけというのは、受講生にとって失礼であり、ロータリーのおごりです。

B 班

阿部　奈津子

「ＲＹＬＡセミナー」

今、プログラムを終えまず伝えたいことはＲＹＬＡセミナーで出会った全ての人への感謝です。「本当にありがとうございました。」そもそも私がこのセミナーに参加する最初のきっかけは昨年の夏にローターアクトに入会したことです。半年余りの間にたくさんの出会いがありました。入会していなければきっと出会うことのなかったであろう人達です。性別、年齢、職業、考え方は違えども皆それぞれ前向きに何かやりたいという気持ちを持っている人達でした。そしてその中で国際ロータリー第2670地区と第2680地区が主催する指導者育成という目的のＲＹＬＡセミナーを知りました。このセミナーに参加する以前はリーダーというものは周りの人を引っぱっていける人で私は決してなれないものだと思っていました。ただ何か自分にとってプラスになることを得られるのではという思いがあり参加するかどうかとても迷いました。そんな時ある方が新しいこと良いように思えることにチャレンジすることは大事だということ、そして教養を得るだけではダメで外に向けて伝えていくことが必要だということを教えていただき背中を押してもらい、余島にやってきました。かたい雰囲気の中始まった開講式。初めて出会った人達とグループを作りました。一歩進んだ自分を４日後に見てみたいそう思いました。キャンプファイヤー、講義、思索の時間、バズセッション、フォーラムを通して普段話さないことを語り合い、考えました。プログラム説明の中で言われた「１泊４日」という嘘みたいな言葉は真実でした。私達は

それぞれの活動の場に戻ります。これから何をするかが大事だと思っています。溝田先生がおっしゃられた「HOW to DO!」こうしたい、ああしたいという伝えたい前向きなエネルギーを活かす。それは決して一人で頑張るものではないということ。いい時いい場所での人との出会いを大切にし、皆で協力してやっていけばよいということ。また、今まで国際貢献なんてちっぽけな私には無理だと思い目を心を閉ざして見ようとしなかったことも広い世界に目を向け教養を得、一つの志を持てば必らず同じ志を持つ人はいて協力しあえばできないことはないのではと思うようになりました。もちろん私は大きいことをやるだけが全てではないと思います。見近な人の幸せを心から願える人になりたいです。

太田　絵美

「ＲＹＬＡで得たもの」

昨日のフォーラムでもお話させてもらいましたが、私には国際公務員になりたい、という大きな夢があります。その夢に向かう時に自分にリーダーシップがないということを痛感し、それを手に入れたくてこのセミナーに参加しました。初日のキャビンタイムで班の皆にそう伝えると、じゃあＢ班のリーダーをしてもらおう、ということになりました。全く自信はありませんでしたが、皆がずっと「リーダー」と呼んでくれて、あたたかく受け取め、支えてくれて、何より、私のことを信頼し認めてくれたことが自信につながりました。失敗するのは当たり前なので、とにかく自分でできることを一生懸命やり通したつもりです。まだまだ自分の理想のリーダー像には遠いけど、皆に背中を押してもらって、大きな一歩を踏み出すことができました。Ｂ班の皆には本当に感謝しています。それは、リーダーとしての何かを教えてくれただけではなく、レクリエーションやキャビンタイムを通して、仲間として皆で楽しい時間を過ごせたことが単純に嬉しい、ということもあります。かけがえのない人たちに出会うことができたと思っています。

また、キャンプファイヤーや講義のお話、東野さんのお話をお聞きすることができ、とても沢山のことを考えさせられました。自分の夢とリンクする話もありました。今回で得られた自信を活かし、自分なりの答えを見つけて動き出そうと思います。

今回ＲＹＬＡに参加できたのは、何らかの必然によって導かれたことのような気がします。全ての人に感謝し、感じたことを忘れず、今度皆に会う時も胸を張って会うことができるように、一つ一つのことを大切に、一歩一歩前進して行きます。最後に私の大好きな言葉を書きます。

Keep your smiling & be happy!

大谷　將之

「「第26回ＲＹＬＡセミナー」に参加して」

今回このセミナーに参加させて頂けてとても感謝しています。最初は全然知らない人達と３泊４日もどうしたらいいのか等いろいろ考えてしまい不安になっていました。３月25日不安や期待でいっぱいになりながら余島までやって来ました。余島はとてもきれいな所で自然ゆたかな所でした。開講式の後班のふり分けでＢ班に決まりました。全然知らない人達とどう接すればいいのかわかりませんでしたが話をする内にすぐ仲良くなれて、自分の考えや悩み等を話し合うことで相手の事を少しずつ理解できすごく楽しい時間を過ごすことができました。セミナー中Ｂ班のみなさんといろいろなことで自分の考えや気持ちを語り合いました。またレクリエーションではカヌーに乗ったりサッカーをしたり広場でダルマさんが転んだ等をしすごく盛り上がる事ができました。最初は３泊４日は長いなーとか嫌な事しか考えていませんでしたが意識が変わるとすごくあっとゆうまに過ぎてしまいました。今回このセミナーに参加して大切だと思うことをいっぱい経験できました。人と人とのつながりや出会いの大切さ、自分だけの考えだけにとらわれず人の意見に耳をかし受け入れる事、全然違う職種の人の話や考え方、年配の方の人生経験等をきいているうちにこれからの自分の生き

方を決める上ですごく参考になりました。そしてこの中で一番大切だと思う事はB班との出会いだと思います。この4日間ですごくいい友人ができてとても嬉しく思っています。できればこれで終りではなくこれからもB班の仲間と集まれればいいなと思っています。このセミナーを受けて自分から何か新しい事をしたいと心から思いました。4日間ありがとうございました。

嶋田　由紀

「第26回ライラセミナーを受講して
　人間　自然　科学技術について」

余島の自然の中で、それぞれの想いを抱いた勇士達との4日間は大変充実する日々を過ごす事ができました。

私達の班は20歳から38歳までの総勢14名。衣食住を共にする中で、各個人についての情報を得、各自の強い想いを感じる事もできました。このライラセミナーの目的でもある、「指導者を養成する」という事、私が大変感銘を受けたのは、20歳の受講者が「自分がリーダーになる」「自分が住んでいる町を変える」という強い意思を抱いている事でした。

私自身は班の中でも中腹の立場であり、その言葉を耳にした時、彼女、彼らを応援したい、又自分より年配の方がどの様に動くのか興味が湧きましたが、彼らもまた私と同じ気持ちで、この若い彼らに全てを託す事と致しました。若い彼らは一生懸命でしたが、彼らの下にいる私達も押しつけでない、自然と班全体で彼らをサポートしておりました。3日目のバズセッションでもありましたように、リーダーとしての条件（信頼・判断力・決断力・協力他）は自然と備え付けられていたと思います。リーダーとしての条件は必ずしも必要なものであり、又、それらの能力がある者のみがリーダーになれる訳ではなく、私もどの立場の者でもリーダーにはなれると思います。

この4日間、本当に高度な講義が受講する事ができた事は幸せに思い、このチャンスを与えて下さった国際ロータリの皆様と、大きい心で私達を観て下さっておりました山田父、福武母に厚くお礼申し上げます。

私はこのセミナーを受講して、次の世代へ背中を押せる者でありたいと思う気持ちが、生まれました。この気持ちを大切に社会への貢献を目指したいと思っております。

竹内　育代

「ＲＹＬＡセミナーから学んだこと」

こんなに多くの感動と教訓、人間の暖かさに出会えたことを、今私は心の底から感謝しています。本当にありがとうございました。

私は会社の研修の一環として軽い気持ちでセミナーに参加しましたが、まず開講式で白石ディーンに言われたことが「1泊4日間の研修を覚悟して下さい。」ということで、「ついていけるだろうか？」と不安でした。

1日目は、以後B班の集合場所となる103号室で簡単な自己紹介をし、皆どのような人物かあまり掴めないまま解散しました。

2日目、溝田先生の「今後は人間と人間が向きあった社会を作り、その中で自分がどのような貢献ができるのか？」という講義の中で、大きな視点から物事を見て、今その中で自分ができることを探る重要性に気付きました。この夜、1日目とは違い、自らの悩みや思いを語り合いました。とりわけ、私たちB班のリーダーの悩みである「リーダーシップを取れるようになりたい」ということについて私たちは深く考え、3日目のフォーラム『リーダーの条件』で最終的な結論になる「リーダーは皆がリーダーになれるのであり、自分ができない場合は他の人がフォローしてくれる。理想は各自あっても、それが絶対ではない。」という考えに到り着きました。

3日目、鮎川先生の「エネルギーは有限であるから、そのために私たちは考えなければいけない」という話では私は携帯会社に勤めているため、リサイクルやもっと寿命の長い携帯電話を作るために組織に訴える必要性、世界への責任を感じました。この晩、フォーラムではリーダーシップにつ

いて討論があり、その中でB班のリーダーが自ら手を挙げ自分の夢を涙ながらに語ったことは大変感動的で、私はこの時、B班が一つの本当の家族のように心の底で結ばれていることに気付きました。私は会社で働いていますが、世の中には、東野洋子さんのように、ダウン症の友達たちと一緒に音楽をして、世界中の人々に感動を与えている人、今井先生のように80歳を過ぎても世界が平和で豊かになるために次のリーダーを育てようとするカリスマ性を持った志高い指導者、他にもこのセミナーに参加した様々な経歴の将来の世界を考えて、自分のできることをとにかくやってみようとするその仲間たちに出会えたことに本当に感謝します。私はこのセミナーで何度泣いてしまったことかわかりませんが、私が今できること、それは空缶のプルタブを集めて車イスをもらう運動に参加したり、一方で自社の携帯電話の行く末が自然破壊に網がらないようにどうにか考えてみたいです。

毎日の仕事の忙しさの中で忘れかけていた『熱くなること』を、今回出会った仲間たちが思い出させてくれました。B班のお父さん、お母さん、みんな本当にありがとうございました。志を持って前に進もうと思います。

田中　祐史

「ライラセミナーに参加して」

「すべては感動から始まる」まさにこの事が実感できるセミナーであったと感じる。真の感動は、なかなか得られるものではない。自己の志と、他の志の違いがあり、その違いを互いに認め合い共有し、一つの目的に向い進む過程の中に生れるものであり、後に育むものであろう。違い昔に忘れていた、急がしさ由忘れかけていた自己の原点を思い出させたこの時間。人生の約半分を概に過して来た自分にとって大きな岐路となるだろう。迷った時の原点と言うべき地となるだろう。

志を高く、情熱を持って行動することをこの地において誓う。

最後にお世話になったロータリーの方々、カウンセラーのお二人に感謝申し上げます。　また、共に過ごしたチームの皆に、心から「ありがとう」と言いたい。

東條　零司

「ライラセミナーに参加して」

僕がこのライラに参加した動機は自己成長をしたいと思ったからです。高レベルの講義と討論と書いてあり、普段では経験できないことができることもあり、予定をキャンセルしてでも参加しました。就職活動で忙しい毎日ですが、来てよかったと思いました。

やはり社会で生きて行く上では経験が大事です。百聞は一見にしかず、いくら本を読んで勉強をしても経験した人にはかないません。まず実践、まず行動、わからないことがあればすぐにやってみることです。ライラセミナーに行く前は不安だったけど、おもいきって行動してみたらいい結果を得る事ができました。

具体的に何がここで得ることができたのかというと、まず自分をもう一度見つめ直すことができたということ、1つのテーマで知らない人同士チームにわかれて高レベルの議論をしあったこと、表面上の友達でなく、3泊4日、寝食を共にした友をつくれたということ、などさまざまなことを得ました。

この余島で学んだことを忘れずに地元の徳島に帰っていろんな人にフィードバックしたいと思っています。

こういうセミナーを開催してくれたロータリアンの皆様にも感謝をしたいと思います。3泊4日あまり何もできなかった僕に時には優しく時には厳しく接してくれたB班の仲間にも感謝したいと思います。これからもこの仲間のネットワークを保ち続け、一生の宝物にしていきたいです。

中野　仁美

「ＲＹＬＡに参加して」

このセミナーに参加できてとても良かったと思

います。

私は一人で活動をおこすことはあまり得意でなく、何かをする時は大概友達と一緒でした。けれど自分の中で、それを変えなくてはいけない。いつまでも２個１のコンビでは駄目だと考えていました。「リーダーの条件」をテーマにバズセッションをした時に、あがってきた内容を見て、コンビで活動していた理由と自分に足りなかったものが見えてきました。それがわかった事も良かったのですが、もう一つ良かったと思う点があります。それは、素敵な班のメンバーです。今まで一緒にいた友達に話したこともないような話をし、様々な貴重な意見を聞くことができました。人に意見を伝えることの大切さを知ることができました。私の中にあった自分を変えたいと思っていた部分を変えるきっかけにもなりました。

先輩やロータリアンの方が勉強になるし、おもしろいから行っといで。と言っていたことがよくわかりました。ここで感じたこと、知ったことを自分の身につけることができるよう頑張りたいと思います。

最後に。カウンセラーのお父さんとお母さんはじめ班メンバー。ロータリアンの方々、ありがとうございました。

福本　真悟

「第26回ＲＹＬＡセミナーに参加して」

今回、私はこのＲＹＬＡセミナーに参加して、とても良い経験となりました。私は、ボランティアキャンプのリーダー等は、普段からしているので、今回のＲＹＬＡセミナーでは、私の考え、クラブのリーダーに対しての考え以外の色んな人の色んな考え方やリーダーとしての考え方を吸収できたら。と思い、不安な面も沢山ありましたが、今回、ＲＹＬＡセミナーに参加しました。ＲＹＬＡが始まり、私の班は、非常にバランスのとれた、私的には、この班になれて本当に良かった。と言える班でした。今、思い返して見てもやっぱり、班のみんなで、色々な物事を出来た事、例えば、２日目の外で、レクリエーションをした時も、童心に帰って、本当に楽しい時でした。そして、３日目のバズセッションやフォーラムでは、班のみんなの色々な意見をぶつけて、討論した事。色んな視点から見る、さまざまな、リーダーとしての考え、時には、私の掲げる理想のリーダー像とは、全く逆の意見の人も居たり、しかしそれが新鮮で、これからの自分の考え方の幅が広がったと私は、この時に思いました。そして、夜は、夜で、班内での友情を深めるために、色んな話をしました。時には、何でもないような話で、バカ騒ぎをしたり、真剣に今、自分が思う悩みなどを、心をひらき、腹をわって、ストレートに熱く語り合ったり、とても有意義な時間でした。１日、２日終わる頃には、ＲＹＬＡに来る前の自分が嘘の様に、ＲＹＬＡセミナーを心の底から楽しんでる自分がいました。素晴しい先生方のためになる講義を聞き、班のみんなと、色んな事で語り合う。とても、シンプルでは、あるがとても、有意義で、ＲＹＬＡの開講式でもおっしゃられていた、「無駄で有意義な時間」とおっしゃられていた事が、ＲＹＬＡが終わる今になって、よくわかりました。本当にみんな！ありがとう。

前田　豊

今回ライラに参加して率直に思うことは「リーダー」に関することです。当初、このセミナーに参加することへ強い抵抗がありました。その根底には自分がボランティアなんて単なる偽善活動で、自分の体面を保つとか自身の優越感に浸るとかいうことがその裏にあるのだと思っていたことや、ライラセミナーの目的が青少年のリーダーを育成することにあると聞いて自分なんかリーダーにもなれないし、なりたくもないと思っていたことがありました。しかし、実際に参加してみると学校の修学旅行のような感じで夜は酒飲んでたわいもない事を語り合ったり、腕立て勝負とかして初めの不安を忘れるぐらい楽しく過ぎていきました。もちろん講義も素晴らしく新しい知見を得ることができましたが、このプログラムの中で一番心に残ったことは３日目のバズセッションとフォーラ

ムだと思います。「リーダーの条件」と「ロータリーと協同してできること」の２つについて班毎に議論し、フォーラムの場で発表、パネルディスカッションをしたのですが、パネルディスカッションの場で同じ班のリーダーが涙を流しました。班で議論しているときも、自分は極力客観的に、言い換えると「リーダー」という物を観察して意見を発言していたのですが、あの涙を見て「リーダー」を客体化するだけでは得られない何かがあるのではないかと思うようになりました。その後の討論で「リーダー」には素質が必要かという問題に対して応答した人全て、全員なれるという答えでした。そこで、「リーダー」とは「～である」という存在ではなく、「リーダー」であることが「リーダー」になることであるのだと自分なりに解釈しました。そして、そのリーダーの役割を全うすることで得られる感涙するまでの何かがあるのだと思いました。今後、リーダーになる機会があるか分からないけど、もし、そういう機会があるのならば、今日勉強したことを生かしてその感涙するほどの何かを得られるようにがんばりたいと思います。

正岡　俊広

「ライラセミナーに参加して」

私が、このセミナーに参加したのは、昨年妹が参加し、人生観が変わった。というのを聞いたからです。

毎日、仕事に行くだけの生活の中で、私は、多くの不安を感じていました。このまま、ただただ生きるだけで良いのだろうか？と。

26年間生きてきた中で、私は私なりの生き方を見つけました。私の周りの人を、大切にするという生き方を。

しかし最近、本当にそれで良いのだろうか？と思うようになりました。

そこで私は、このセミナーに参加しようと思ったのです。多くの不安を抱えながら。

私の班には、私より若い人が多くいました。私は、彼らと同じ目線で物を見て、彼らに負けないようにこの数日を送ろうと決意しました。

正直、彼らのパワーには威圧されました。毎日、高レベルの講義にも関わらず、部屋に戻ってからのレベルの高い話し合い。

私は、このセミナーに参加して良かったと思います。心の底から語り合える友を得ましたし、知らなかった外国の情報や、多くの人の熱く戦った過去を知る事ができたからです。

私は、このセミナーに参加する事によって、今までよりもっと積極的に生きようと思いました。きちんと情報を把握し、適切な判断をしたいと思いました。

これから私は、もっと広い分野に目を向け多くの情報を収集し、多くの人の役に立てる人間になりたいと思いました。

向井　祐樹

「「第26回ＲＹＬＡセミナー」に参加して」

今回初めてＲＹＬＡセミナーに参加して、たくさんの事を学びました。その中でも一番印象に残っているのは、自分が持っていた知識や考えが非常に乏しいことを痛感させられたことです。私は昨年の５月にローターアクトクラブに入り、社会奉仕・クラブ奉仕共にいろいろな活動をしてきました。そしてその活動を通して、いろいろな事を吸収してきました。ですからＲＹＬＡセミナーでディスカッションする上で、ある程度は自分の意見を言うことができるのではないか―と思っていました。しかし実際にＲＹＬＡセミナーに来てみると、しっかりと自分の意見を持っていて、しかもそれをちゃんとした言葉で話すことができる人が想像以上に多いことに驚きを隠せませんでした。そのため、私はディスカッションにおいて聞き手に回ることが多くなってしまった気がします。自分の意見を言おうとしても、ボキャブラリーが少ないために「何て言ったらいいんだろう…」と思ったことが多々ありました。ただ今回のセミナーでも講義をはじめ、たくさんのお話を聞き、自分なりに吸収できたのではないかと思います。

私は当初ＲＹＬＡセミナーに乗り気ではありませんでした。余島に到着したときも、正直「早く

終わらないかなあ」と思っていました。ですが実際に3泊4日の日程を過ごしてみると、あっという間であった気がします。それは班の仲間のおかげだと思います。一緒にレクリエーションをしたり、バズセッションをしたり、ご飯を食べたり、お酒を飲んだり—とにかく一緒に過ごすだけで、楽しいと思えました。私は、余島でB班の仲間達に会えたことを誇りに思います。そして、この4日間で学び、吸収したことを、今後の生活全てに生かすことによって、よりよい充実した人生を送っていけたらと思います。

山本　武司

「第26回ＲＹＬＡセミナーに参加して」

今回のセミナーに参加して、すごく楽しい思い出をつくらせていただくことができました。最近、「感動」のカウンターが振れるチャンスが少なかったのですが、余島の自然と受講生、カウンセラー、ロータリアン、余島キャンプの皆さんとの出会い、交流により、感動メーターはフル回転しています。そしてこれらの感動を原動力に、周りの皆を巻き込んで、情熱のうねりを作っていけると思います。最も印象に残っているのは、キャビンタイムでの討議、語らいでした。本音の部分、言いたいことを皆の前で出すことができないことがありましたが、議論を交わし、語り合った皆さんのお陰で、積極的に話をすることができました。これからは、もっと勇気を持って、自分の想いを表現して行きます。また、思索の時間では、余島のにおいを感じながらこれまで意識することが少なかった「リーダーの条件」、「ロータリーとの協働」について考えることができました。それを踏まえたバズセッションでは皆の意見が集約されましたが、セミナー時に一人一人のリーダー像に対するエピソード等を知ることができました。「リーダーは誰でもなれる」という意見がありましたが、誰もがリーダーたる強い志を持って行動していくような組織になるよう、余島を離れても感動を忘れずに、周りに影響を与えていきます。

さらに、今回「時間」について意識することがありました。「寝る間を惜しんで」朝日を眺めるまで共に過ごした時間、「1つのことに集中して」意見をまとめたバズセッションや「だるまさんがころんだ」、最後の最後で約束の時間を守れなかったこと。いずれにしても、充実した4日間を過ごすことができました。

素晴しい環境に甘んじることなく、これからも行動して行きます。有難うございました。

脇坂　剛

「第26回ＲＹＬＡセミナー」

最近泣いた事がない…。感動したのはいつだったか…。日々の業務に追われ、育児の楽しさより、喜びより、辛さ、苦しさのみが重くのしかかり、本当に心から笑ったことも、この頃あったのだろうか？

もっと怖いのは、それでもいいやって思ってた自分。そう思うことにいつしか慣れてしまって、考える事もやめていた自分がいるという事…。

このセミナーで一番充実した時間は、まさしく〝思索の時間〟であった。一人砂浜に腰をおろし、海を見ていた。おだやかな陽の光と心地よい潮風は、この上なくぜいたくなシチュエーションだった。海に浮かぶ遠い島々や行きかう船。あたかも時が止まったような心地よい目まいにも似た、自然との一体感を体全体で感じることができた。

家族のことが最初にうかんできた。それは決して特別な場面でなく、本当に日常的なシーンばかりが…。朝「おはよう」といって起きてきた長男。幼稚園の制服を泥だらけにして土団子をこねている次男。おふろに入るのをいやがり、オムツをぬがずに逃げ回る三男。そんな当たり前の、どこにでもある、何でもないような事を思い出しているうち…。涙が出た。感動した。

現在私は幸せなんだと実感した。ずっと幸せだったのに、気づかず、何かに追われ、あせり、とまどっていていた事に気づいた。この〝思索の時間〟は自分というものを、あるがままの自然がやさしく教えてくれた、まさしく貴重な素晴らしい時間であった。

最後になりましたが、このセミナーに携った全ての皆様に感謝をいたします。今後自分のできる事、進む方向をしっかりと、ゆっくりと考えていきたいと思います。

終わりの言葉はありません。私にとってこのセミナーは始まったばかりだから。

B班カウンセラー　福武　信子

春はもうほんのそこの角まで来ていて、その気配が余島で実際に目で見られる貴重な時にここに居られる幸運、しかもとても良い天気にめぐまれ、本当に幸せでした。カウンセラーも3回を重ね、やっと、平常心で臨めるようになった気がします。はじめての時、集合場所で今井先生にお声をかけていただき、普通にお話をしながらも、この方は、「ただ者ではない」という気がして、後に、本当に「ただ者ではなかった！」と思い、なんで普通の人のふりをしておられるのかと思ったあの頃の自分を、本当に、なつかしく思い出します。カウンセラーとして出会えた班の人達は、お互いに紹介が終り、班の一員として決まった瞬間から私にとっては、「受講生」から、一人一人の仲間になりました。皆のことが、とても気になります。家に残して来た家族よりも、目の前の皆の方に気持ちが集中してしまいます。余島に来るまでは、家の事に集中して、ここでのことは何も考えず、何も心配しません。気にしてもしかたがないからです。その時その場にならないとわからない事は、その時その場でしか解沢出来ませんから。その点、私は、溝田先生の講義の中にありましたように、現場主義、人材の活用主義です。ただ、これは、私の役割が、カウンセラーであるからで、ＲＹＬＡ委員の方々の想像を越えたいろいろな準備のおかげがなくては、とても実現は出来ません。本当にいつも心から感謝致して居ります。若い人達の中で生活が出来た事が、そして、いろいろ話せた事が、私の芯の深い所を浄化してくれた気が、とてもします。物事を真摯にとらえ、深い思考の後にその事に向って進んでいこうとする姿勢にいつも心を打たれました。これからの長い人生を、そのやさしい気持ちと共に、いつまでも持ちつづけ、くじけそうな時にはここで過ごし熱く語った仲間との日々を思い出してほしいと思います。

B班カウンセラー　山田　武史

今回初参加、しかもいきなりカウンセラーとして出席致しました。4日間を通じて全てが始めての連続であり、自分自身の事で精一杯でした。特に福武カウンセラーにフォロー頂き、無事受講生共々元気にセミナーを終える事が出来ました。

幸い初日以外は天候にも恵まれ、4日目には桜が一部咲く程の陽気となり、非常に高いテンションの状態で帰る事が出来ました。

セミナーを振り返ってみますと、終始反省だらけでしたが、メンバーにも恵まれ、真面目で優しい環境で過ごせました。

講義のレベルとして、丁度自分の最も興味がある内容でしたので大変満足しております。特に溝田先生にはゆっくりもっと時間を頂き講演して欲しいと思う内容が何点かありました。受講生と寝食共に過ごして、改めて若い年代層の方々からパワーを頂くと共に、様々な悩み、夢、希望等、キャビニタイムで話しが深夜まで聞いた事で、これから我々が何を成すべきかがはっきりとした形でつかみ取れた感じが致します。

出会いと、そこで得られた人間対人間の本当の絆が今後有り得る様々な障害や困難を乗り越えて行く心の支えとなる事、間違いありません。又、自ら進んでカウンセラーを引き受けた私自身、評価し誉めてあげたいと思います。緊張の連続と1泊4日？のスケジュールでしたが、得られたものはとてつも無く大きく、非常に満足しております。

カウンセラーとしては多々反省する事がありますが、素晴らしい仲間に出会えた事が一番の幸せではないでしょうか。

最後になりましたが、講師の先生方を始め、ガバナー、各ロータリアンの皆様、余島のスタッフの皆様にお礼申しあげます。

4日間お世話になり、ありがとうございました。

C 班

金尾　嘉子

「ＲＹＬＡセミナーに参加して」

ＲＹＬＡの事を全く知らないまま受講生になり、一体セミナーでどの様な事をするのだろうと不安と楽しみとが入り混じった状態で余島に着きました。残念な天気でしたが、島の清んだ空気でとても気分が良かったです。２日目には、班の皆と一緒にカヌーをしたりアーチェリーをしたり、余島と小豆島が干潮時に連なる所まで歩きました。本当に思いっきり余島の自然とふれ合う事ができて良かったです。そして、幻想的なカンシルファイヤは、初めての体験でした。途中一言もしゃべらず、ローソクの火で所々に照らされたテーマの案内、ファイヤー場での今井先生のお話松ぼっくりを投げ入れる度に勢いつく火はとても印象に残っています。

セミナーの４日間で最も印象に残ったのはフォーラムです。毎晩、１つの部屋に集合し雑談から、自然と話し合いになって班員が、お互いに言いたい事を言えたと思います。「リーダー」についてバズセッションをして「信頼」という言葉が自然に皆の口から出ました。報告の仕方も、発表を聞く人の立場になって、絵を中心に字を少なく書こうという案も飛び出す程、班皆で一つの物を作り上げました。フォーラムは、言葉で伝えにくいもどかしさがありましたが、班関係なくセミナー受講生の意見１つ１つにとても納得しました。「リーダー」は誰にでもできます。ただフォローする立場であり、フォローされる立場であるので、決して一人ではリーダーにはなれません。必ず仲間があり、そこに信頼があるからこそ安心してチームが前に進めるのだからと私は思います。

３泊４日は本当に、あっという間でした。楽しい思い出をありがとうございました。

篠原　泰子

「ＲＹＬＡセミナーを終えて」

３泊４日間のセミナーを終えた今、まだ言葉にならないような思いが頭の中でぐるぐるとまわっている。このわずかな期間で学んだことはここには書ききれないほどあるが、最も印象に残ったのは３日目のバズセッションとフォーラムである。「リーダーの条件」というシンプルではあるが難しいテーマを与えられた我々は、まず４人ずつのグループに分かれてぽつりぽつりと意見を出し始めた。小学生から現在の大学院生に至るまで、先生方、学級委員、部活の部長等、多くのリーダーと接し、時には自分自身もリーダーとしての役割をまかされたこともあったが、リーダーとは何かということをここまで真剣に考えたことはなかった。４人それぞれで頭をしぼった後、グループ全体で集まり、皆の意見を照らし合わせ、時間に追われながらも皆一生懸命に多様な意見をまとめる努力をした。フォーラムではＡ班からＤ班まで全てのグループの意見をきくことができた。その間、ひたすらリーダーの条件について考えていた私は東野陽子先生の「誰でもリーダーになれるのでは」という発想にはっとさせられた。パレスチナ問題、北朝鮮の孤立、環境汚染等、今、我々の目の前で起きている深刻な状況を解決するためには長期的な取り組みが必要である。そのためには私たち一人一人が志を持ち、問題解決に向けてリーダー的な役割を果たす義務があるのだ。

高校生の時、カナダに留学したこともあり、これまでも国際人としての意識は持っていたつもりだが、このセミナーではその重要性を再認識することができた。現在、宝塚市のデイサービスセンターで週数時間のボランティア活動をしているが近い将来、このようなローカルな活動をグローバルな活動へと拡げて行けたらと思う。

竹田　裕美

「教育者として」

大学時代よりいつも私の行動の規範となる言葉がある。

“Mastery for Service.”

どうすればこの「奉仕のための練達」を実践できるのか、いつもそれが課題であった。

このＲＹＬＡセミナーで学びたいと思うことがあった。それは、後人の育成である。インターアクトクラブの顧問として、そして教育の現場に立つ者として、私に課せられた使命は、この混迷の世の中にあって次世代の若者たちを育成することであると考えている。世に様々なリーダー達がいる。しかし、私共のような立場にある者が「メンバーの代表者・トップ」というようなリーダーであってはならないと思う。あらゆる学校生活での経験を通じて、子どもたちが「世界を見つめる〈目〉」を持つこと、世界のあらゆる諸問題に対峙し臆することなくその困難を解決しようという勇気を備えた人間を育成していくこと、それが教育者たる者の使命ではなかろうか。私はそのような意味での「リーダー」を育てたい。むしろ、これからの時代、「リーダー」は求められないのではないだろうか。これからの世界、どの国が先頭に立って、リーダーになって、というようなことはもはや求められない。１つひとつの国が、一人ひとりの人間がそれぞれ「世界」を見つめ「世界」を変えていくべきであると思う。そうせねば、「世界」は救えない。そのような意味において、「だれでも『リーダー』になれる」のではなく「だれもが『リーダー』であらねばならない」のではなかろうか。

今、私には“Mastery for Service.”のための一つの方向性が見えた。インターアクター達を育てていくこと、次世代の「リーダー」達を育てていくこと、それが私の“Mastery for Service.”である。

田能　良雄

「第26回ＲＹＬＡセミナーに参加して」

この４日間、講義にレクリエーション、キャビンタイムと、大変充実した時間をすごす事ができました。初対面の方々との共同生活は、非日常的で、いろいろな事に気づかされ大変良い経験とな

りました。

この間に学んだ事、考え気付かされた事は自分の目標を持つ事、それを実現しようと行動する事、周りに同じ目標を持った人がいなくても、自分の中にもう一人の自分（リーダー）を作ると行動にうつしやすい事であり、その目標を達成する過程において自分が輝ける事、周りの人々の笑顔によってさらに輝ける存在になれる事の喜びを実感できる。また、実感したいためにそれを継続していく事なのかなと思います。

私は今の仕事を通して、来院される患者さんや地域の方々に笑顔を広めていこうと、思っています。

ありがとうございました。

二川　大治郎

「ＲＹＬＡセミナーを終えて」

４日間のライラセミナーを終えての感想は、「やっと終わった」や「まだ終わりたくない」等の未練や安堵感を表現する様なものでなく「ちょうど終わったな」と予定通りに行事を消化出来たなという淡々としたものです。

これは、別にこの行事に感情移入をしていない様な表現に見えますが、感情移入が出来なかった訳ではありません。

セミナーは非常に内容が濃く、私の中に色々な思い出を作ってくれました。

だからこのセミナーが終わるのが、切ない、悲しいのではなく、非常に清々しい気持ちでいっぱいです。

話は変わりますが、次にこの４日間で自分の中で変わった事について書きたいと思います。

４日間という時間で人はどれだけ変われるのかと言うと、４日間で爪は１ミリぐらいしか伸びませんし、髭も２ミリぐらいしか伸びませんでした。外見はあまり変わっていませんが、４日間のセミナーを終えて、今私の内面は確実に変わったと思います。

共同生活をする事で協調性の大切さを知りました。

レベルの高い人の講義で、「人間、自然、科学技術」というテーマに沿った物事の考え方の指針を示してもらい、身につきました。

そして何より、このセミナーに参加した仲間と討論、生活をして、親睦を深めかけがえのない仲間を得る事によって、人と人とのつながりの大切さ、ありがたさを知る事が出来ました。

実際に、知識や経験、仲間を得る事は非常に嬉しい事なのですが、私が一番嬉しかったのは、自分の中で、言葉では言い表せない熱い思いを得る事が出来た事です。

セミナーは、もう終わり、せっかく出会えた仲間ともなかなか会えなくなりますが、この熱い思いは生涯片時も離れる事のない物だと思います。このセミナーに関わった人全てに本当に感謝します。ありがとうございました。

松井　志郎

「ロータリー、ライラに触れて」

ロータリーとの関わりは国際親善奨学金を通してはじまった。その説明会で、「ＲＹＬＡ」を知り、キャンプということとロータリーについて詳しく知りたいと思い応募した。　船に乗り、島に着く。そこには一生会うこともなかっただろう、多種多様な職業、年齢の人々がいた。余島の自然は美しく静かだった。まず驚いたのがカギを部屋にかけないこと。そこには絶対的信頼があるからと説明されていたが、逆にカギをかけないから信頼が生まれたように今では思う。

飯はおいしかった。ここで自分の中に生まれたのは、国際貢献や未来の在り方をみんな混じり合って考えようという姿勢であり思い出したのは青年らしき清々しさ、純粋な熱意だった。ヒントを下さったのは講師の方々やスタッフの方々、そして私たちＣ班のカウンセラーズだった。講義で印象に残ったのは「曲がり角にある現在に生きていることのやりがいを感じ幸せに思う」こと。手を貸し合い人としての幸福を目指していく未来は私たち一人一人がつくっていくのだという言葉は胸に驚いた。カウンセラーの永松先生とかおる母さん

は温かくおもしろかった。その２人の下に集まったＣ班のメンバーでの討論やフォーラムに向けての団結を通し、価値感の違う様々な人々との交流の大切さや楽しさを学んだ。ホテル、病院勤務の人から学校の先生、大学生までが本音をぶつけ合える環境がここにはあった。

夜は星がきれいだった。楽しかったキャンプの場は安らぎの場であったと同時に再スタートの場。美しい島を見ながらチーム３人でこいだカヌーの上でふとそんなことを感じた。

松ヶ迫　順雅

「ライラセミナーに参加して」

今回５回目、８年ぶりの余島に来て、私は人として今まで自分に欠けていたものが得られました。この余島に来ると、いつも何かを得て帰るのですが、今回が一番有意義なものであると思います。班のメンバーを始めとする人との出合い、講義やカンシルファイヤー、キャビンタイムなどの時間、レクリエーションでの体験、初めてすごす春の余島等、どれもが実家や大学では味わうことのできないすばらしいものでした。また、今回のバズセッション、フォーラムの議題であった「リーダーの条件」についても、私達は短い時間で内容の濃い論議ができてすばらしかったと思います。私は今回、満を持しての最年少での参加です。周りの方々の素晴らしさに圧倒されながらも、自分の考え、できることを精一杯やってきました。その結果、いつのまにか周りには、笑顔のみんなが手を出して「よくやったね。」と言ってくれるのです。私はこの時みんなの心の小さなリーダーになっているんだと思いました。こうやって少しずつ、いろんな人が感じることで一つの心が、リーダーが完成するのではないかと考えます。

ライラセミナーは、感動することばかりでした。ここで得たこと、学んだことを今後の自分の成長そして周りの成長に生かしてゆきたいと思います。昔から推薦して下さっていた林眞紀さん、今回の好機を与えてくださり本当にありがとうございました。私が今ここで成長できるのは、すまうら文庫でお世話をさせて頂いた体験があったからです。私は事実上ここを巣立ってしまいましたが、私の心のリーダーは、いつまでも貴女です。

三木　崇弘

「出会い、つながり、拡がる」

「人と出会いたい」私は、そんな思いでこのセミナーに参加しました。

私は人と人とのつながり、輪というものにとても魅力を感じ、これまでもいろいろと動いてきました。大学や部活の仲間達と集い、あちこち飛びまわっていたのですが、その一方で、新しい出会いに興味を示さない友人たちもたくさんいました。興味がないという表現は適切ではないかもしれません。ただ、その人たちは今まできっかけがなかったのです。今回の参加者の中にも、ご自分から積極的にやって来られた訳ではない方もいらっしゃるようでしたが、皆さん最後にはすごくいい表情をしてらっしゃったように思います。ライラに「出会った」ことで新しい自分を発見できたのでしょうか。

ひとたび出会えば、次は「つながり」です。今回出会えた人たちとこれからもつながっていくことで、人の輪も広がりますし、そこから新しい可能性も生まれます。そのためにも「また会いたい」と思ってもらえるような人間でありたいと思います。今回の講義では、普段ならとてもお話を伺えないような生先に教えを請うことができました。こういった機会を無駄にすることなく、さらにステップアップしていきたいと思っています。

人と出会うことで生まれるつながり、そしてそのつながりから生まれる可能性は、ほんとうに限りがないでしょう。だからこそ、魅力的に思えるのかもしれません。一人でできないことは仲間でやればいい。仲間でできないことはみんなでやればいいと、思わせてくれる４日間でした。

最後に、人が集う夜は、酒を呑み大いに語らうのもやぶさかではない、ということをつけ加えて終わりとさせて頂きます。

三谷　孝志

「第26回ＲＹＬＡセミナーを受講して」

今までいろんなセミナーを受講してきたがこのＲＹＬＡは様子が違って楽しくすごせました。思っていたよりも自由だし自分のやりたい事ができるのが他のセミナーとの違いだと思います。自由にできる分自分をきちんと管理し他に迷惑をかけないようにと考えて動く自分に変われたと思います。又メンバーが年齢職業が違うし考え方も違います。その中で年齢が高い私がうまくやれるのか不安であったがすごく人の良いメンバーに恵まれました。年若い人達にいろんな事を学び助けられたのが年長者としては反省し、仲間としては感謝しきれない程うれしい事でした。ここのメンバーとはこのセミナーに来なければ一生会う事がなかったと思います。この出会いだけでも来たかいがあったなあと思います。このセミナーが終わってそれぞれの場に戻ると仕事や学校の都合などで会う事は少ないと思います。これからこのメンバーで集うことはないだろうと思いますが、このセミナーを受講して学んだ事を語り合った事を心の中で大切にしてがんばっていれば会えなくても心は一つだと、常に会っているのと同じような物だと思います。若い子が多い班であっただけに私もその子達に負けない気持ちと行動でがんばりたいと思います。きっとこの班の人達ならすごいがつやくをされると思います。いつか大きな仕事をなしとげて又みんなと出会い語り合う事を楽しみに今後がんばっていきたいと思います。

ありがとうございました。

安福　佑太

「ＲＹＬＡセミナーを終えて」

今回、はじめてＲＹＬＡセミナーに参加しました。参加して余島についた時には他の参加者の顔などを見ていると何か不安になってきました。やはりセミナー参加者だけあってしっかりしていて僕なんかとはまったくちがうなぁーと思っていました。実際、班わけしてキャビンタイムなどで話していてもちゃんと自分の意見をしっかりもっていて、一人一人がすごいリーダーシップをもっていました。他の人たちを見て僕も少しはリーダーとして成長して帰ったるねんっと思いみんなのリーダーぶりを観察しテクニックを学ぼうと考えていましたが、意外とリーダーシップをとっている人は自分がリーダーだと思っていないことがわかりました。リーダーとはなろうとしてなっているものでなく他の人に信頼されて、知らないうちにその人のまわりにあつまってくるんだとわかりました。

今回のＲＹＬＡセミナーで一番あつくなれたものは３日目のフォーラムだったと思います。〝リーダーの条件〟と題してＡ～Ｄ班で討論しあって互いの知識を深めあい、互いをほめあう、時には涙が出そうにいい話もありました。〝誰でもリーダーになれる〟という言葉には何かジーンとくるものを感じました。リーダーには条件がたくさんあげられましたが、それには他人の信頼を得なければリーダーとしてやっていけないこともわかりました。だから、リーダーになるために何をしなければいけないのか…など、すごく勉強になりました。今、ＲＹＬＡセミナーに参加できたことに感謝しています。たくさんの友ができ、たくさんの話ができました。これからこのＲＹＬＡで学び話し合ったことを胸に志を持って生きていきたいと思います。最後になりましたが、このようなすばらしいセミナーを企画していただき、ありがとうございました。

山本　祐子

「ライラセミナーを終えて」

今回、３泊４日というわずかな時間で、新しい価値観との出会いがありました。と同時に新しい自分を発見することもでき、見える世界が広がったような気がします。

様々な分野の専門家の先生方の話を聞き、遠い地球の裏側で起こっていることや私たちのいる日本で起こっている深い問題を知りました。そのような問題に対して、いまの私にできることは何な

のか、これからどうすべきなのかということを真剣に考えることができました。普段の生活では、このような問題と向き合う時間をなかなかとれずにいましたが、余島の自然の中に身を置くと、心の奥で眠っていた思いがどんどんとこみあげてきました。今までは無意識のうちに、もしくは意識的に時間をつくろうとしなかったのかもしれません。こんな自分を恥ずかしく思い、反省しました。

このセミナーで得た知識や感じたことを一人でも多くの人に伝えなければと痛感しました。

そして一人でも多くの人が様々な問題に意識的に取り組むことによって、優しい世の中が生まれるのではないでしょうか。

李　宙鎭

「神の豊かなる恵み in 余島」

神様ありがと！まずはじめにこの言葉を言わずにいられない。全ては神の完全なる計画の中でのすばらしい、一生の思い出に残るキャンプセミナーとなった。長いようにも見えた3泊4日は今改めて考えると1泊2日のように思える。それほどライラのプログラムは充実していた。雄大な余島の自然と太陽の光を反射して照りかがやく青々しい海は私を魅了するに十分だった。みんなで島を探検し、カヌーをこいで海を横切り、アーチェリーやテニスなどのレクリエーションは非常に感銘深い青春と思い出になったに違いないだろう！そして何よりも普通のキャンプやセミナーなどにはない超ハイレベルな方々や講師をお招きして議論やディスカッションを提供して下さったスタッフのみなさまには本当に深い感謝の辞を申し上げたい。またそれらを積極的な姿勢をもって受け入れた自分を誇らしく思う。世界を旅し、韓国やアメリカで滞在してきた私は早い時期から“国際化”や“国際貢献”について考えてきた。真の経験豊かな国際人になるためにはいかなることをすべきか？まさに自分を切り開きチャレンジ精神をもってこういう有意義なキャンプセミナーに参加することではないだろうか？人間は弱くもろく、みじめな存在である。だからこそ私は全ての未来と希望を主なる神に委ね、神が私を世界に必要とされるリーダーとしての肉づけをして下さるのを信じている。神の中で、神の私に対する計画の中で私は最善を尽くすのであり、個人の力や知識・能力に依存する気はまったくない。ローマ人への手紙8：28には「神に愛される者は全ての事象が善として結合し、その人に益をもたらす」と。今回のライラセミナーのテーマは言うまでもなく人間・自然・科学・技術である。これらのトピックには今一度世の中の深刻な現状と自分の立場について考えさせられた。この世はこれからもどんどんひどく苦しい場を迎えると考える、結局人間の限度をこえた科学や技術は環境を破壊し、自然を破壊し、今となってはタネをまいた私たち人間にそのことがフィードバックされようとしている。その様な中、私は誠にこの世の光と塩のリーダーとして役立ちたい！私の場合はクリスチャンである。だから国際人として必要とされるリーダーシップと神の「福音」！この神の御言葉をもってただ単に世界で奉仕活動をするだけでなく福音という生きる道をとおして世界に貢献したい。そのためにはリーダーとしての条件を満たすことは当たり前なこととなるだろう。したがって私は日々謙尊な態度をもって自分自身を磨き、器の広い本当に人間性・社会性豊かな人間となるよう邁進するであろう。何よりもこういう恵まれた環境で毎日の生活を育ませて下さる神にさらなる感謝の気持を持つべきであると考える。

最後になったが私がこのような貴重な場に参加できることは神が与えて下さったロータリークラブとの“出会いの祝福”であろう！人生を大きく左右するかもしれないこのすばらしいキャンプをロータリーのみなさまのおかげでタダで参加することができた。私はこの様な恩をどのように返していけばいいのだろうか？どのように感謝の気持ちを伝えればよいのだろうか？そう、思えば去年の3月からのロータリーとの出会いは神が与えて下さった最大の“出会い”であろう。決してこのような恩を忘れない、そして裏切らない！必ず目に見える形でロータリーには恩返しをしていくだろう。私はロータリークラブを心から敬い尊敬し、

何よりも誇りに思う。そしてそのロータリーに参加してる自分も誇りに思い、偉大なる神の祝福がロータリークラブにあるように祈る。
Tkanks God you Almighty!

C班カウンセラー　武田　薫

「ライラセミナー」

3泊4日の春の恒例行事、ライラセミナーが終了しました。私はとっては、3度目のカウンセラーでした。

今回も、前途有望な受講生の皆さんと寝食を共にし、楽しい時間を過ごさせて頂きました。

最初は不安そうな表情で、受付に立った彼らも、最後には笑顔満面で、記念撮影に臨めたこと、カウンセラーとしてホッとひと安心です。

長いようで短かかった4日間に、彼らはたくさんのことに気づき、確かめあい、成長できたことと思います。彼らの人生にとって、この余島でのひとコマひとコマが、1粒のダイヤのように輝いてくれたら、本当に嬉しいことです。私にとっても、日常から離れることのできたこの4日間は、貴重な宝物になっていくと思います。今、私の心の中には、C班の皆さんの笑顔でいっぱいです。どうか、全員がそれぞれの環境の中で、いきいきと、幸せに人生を歩んでいってほしいと願うばかりです。

最後に、講師の先生、スタッフの皆さん、本当にお世話になりました。

10年くらいたって、50代になったときにもう1度、カウンセラーをさせて頂けたらなあなんて、今は、思っています。

ありがとうございました。

C班カウンセラー　永松　潔和

26年前に第1回ライラに参加させて頂き第19回からはスタッフとしてライラに係わってまいりました。26年前の感動があったことで今だにライラへの思いいれは相当なものです。このたび3回目のカウンセラーをさせていただきましたが久しぶりに又、感動をもらいました。4日には私の係わっておりますインターアクトの新しいクラブの創立式に出席するのですが、そこの高校生の生徒のひとりに私が第1回ライラで同じグループだった方の娘さんがおられます。これも何かのつながりだと思い、今回のライラセミナーのC班のメンバーひとりひとり何年たっても話しのできることを希望いたします。又ここで学ばれた方が何年か後にロータリアンになられた時はぜひこのライラにスタッフとしてもどってこられることを願っております。その時はいっしょにライラを作っていきましょう。ライラはあと1回参加できます。何年後でも又来てください。たぶん私はライラで何かしていると思います。その時は又いっしょに感動しましょう。

今年又ライラに来てよかった。この感動をくれたCグループのみんなに感謝いたします。

D　班

奥谷　静江

「〝リーダーシップ〟」

現代社会の中から隔離されるかの様に、たどり着いた余島の地。ただ海の音の大きさと恵まれた自然に囲まれ過ごした4日間。高レベルの講義と討論、静かで穏やかな気持ちになった思索の時間、太陽の下でのバズセッション。プロセスの重要性を再確認したフォーラム。そして何よりも素晴らしい仲間と素晴らしい2人のカウンセラーとの出会い、共に過ごした時間の重みを深く感じ、今回のセミナーに参加出来た事を心から感謝します。

「人間・自然・科学技術」という今回のテーマから、世界的レベルで今、私達の立っている位置、状況、問題点に触れた事で自分の視野が広がりました。またその上でフォーラムの〝リーダーの条件〟について討論し合い、世界中で起こっている事全ては、客観的な事でなく自分達の事なんだと

認識しました。

多くの情報の中で、どれを選び何をして、次を新しく考えるか。現代という目まぐるしい変化の中でどう生きていくか。そんな事を深く考えさせられました。

また、年齢、性別、職種の全く違うグループが一つの目標に向かうという行動の中で、大切な事を沢山学び、感じました。またそれがどうして、どうしたら可能なのかも。

この４日は、本当に私の人生の中で大きな意味を持つモノとなりました。カウンセラーであり、常に私達に知識と知恵、勇気を与え方向性を示してくれた安行パパ。常に私達の気持ちになって時には代弁し、涙を流してくれた永田ママ。そして素晴らしい時間を共に過ごし、認め合い受け入れ合ってくれたＤ班の仲間全員！！本当にありがとうございました。次会う日まで、それぞれの地でこの気持ちの伝授をしつつ、より一層あたためていけたらと思います。

最後になりましたが、こんな素晴らしいセミナー参加へのチャンスを下さった国際ロータリー、ＲＹＬＡセミナー運営委員会、津名ロータリークラブ、他、関係者の皆様本当にありがとうございました。

葛西　智子

私は、今すごくライラに参加できたこと、そしてＤ班のアドバイザー安行パパと恵子ママ、世代を超えた多くの仲間に出逢えたことに心から感謝している。

ライラに参加するに充って、積極的に人にぶつかっていこうというのが私の決意だった。

チーム編成、私はＤ班。正直、最初は周りを見渡すと今まで、深く関わったことのない世代の人々、不安だった。しかし、その不安はすぐにこれから、Ｄ班で自分が得られるものへの期待へと変わった。

アドバイザーのパパ、ママにはバカ話から人との接し方、国際事情などまじめな話まで言い尽くせないほどたくさんのことを教わった。そして言い尽くせないほどの思い出もできた。

私は、この４日間、たった４日間で安心できる信頼できる、弱みを見せられる仲間に出逢えた。本当に不思議だ。パパが言うには、それは、利害関係のない間柄だから、お互い言いたいことを言い合い認め合えるからだと。そして、人は誰かに必要とされることで自分を見い出せると。確かに私にとってＤ班のキャビンは駆け足で帰りたくなる家でした。パパがいてママがいて、そして仲間

達…

３日目、バズセッション、フォーラムを終えＤ班みんなで成し遂げた充実感と質の高い仲間意識、パネラーを終え一歩踏み出せた自分への自信を確かに感じていた。バズセッションで意見を言い言われ、すごく楽しくて時間を忘れチームで話し合ったこと、フォーラムでみんなに助けられながらパネラーをやれたこと、これは本当に宝物だ。

「出逢いがあれば考え方が変わり、行動も変わり、出逢いも変わり、人生が変わる。」この言葉はパパが１日目、私達に教えてくれた言葉。今、まさにこれです。パパ＆ママ、Ｄ班の仲間達との出逢いは、私にいろいろな刺激をくれ、私の考え方の幅を何倍にもしてくれました。これは人生を変える出逢いです。絶対Ｄ班はまた集まる。私たちの出逢いはここ余島だ。本当に参加してよかった。ありがとうございました。

加藤　智啓

「ＲＹＬＡに参加してみて」

私は、今回このＲＹＬＡセミナーに参加して本当に良かったと思います。参加する前は、初めて出会う人達と４日間一緒に共同生活を送ることができるのだろうかという不安がありましたが、初日に班分け後、初めてＤ班のメンバーと接してみてすぐに不安は消え去りました。皆とても話しやすく年齢に関係なく一人の仲間として僕を受け入れてくれました。キャビンタイムでは様々な議論を交わし、自分の考え方とは違う新しい発想をいろいろ吸収することができましたし、レクリエーションタイムではスポーツを通して楽しい時間を共有することができました。

そして今回のセミナーの中で一番思い出深いのがフォーラムです。長い時間かけて皆で議論をして、その発表を私がやらせて頂いたのですが、いざ発表となると緊張して皆でまとめた内容を満足に伝えることができませんでした。私は大変申し訳なく思っていたのですが、終了後、皆が「がんばった」「ありがとう」と声をかけてくれて私はその時本当にＤ班でよかったと思いました。

最後に、今回カウンセラーをして頂いた安行お父さん、恵子お母さんに本当にありがとうございましたと言いたいと思います。４日間に渡って全ての面で支えてもらいました。二人がカウンセラーで私は本当に幸せだったと思います。

Ｄ班のメンバー、お父さん、お母さんと別れるのは辛いですが、また今度皆で集まって楽しく話せるのを心待ちにしながら今回のセミナーの思い出を大切に心の中にしまっておきたいと思います。

坂口　智彦

「ＲＹＬＡセミナーに参加して」

私がこのＲＹＬＡセミナーに参加させていただいて、一番率直に学んだこと。それは、この世に生を受けた一人の人間として自分が果たせる、果たすべき役割を考える意義。

３名の先生方のハイレベルな講義は、私に物事をグローバルな視点で見つめること、世界で生じているあらゆる不均衡の認識を考えさせて下さいました。それにより生を授かったこの世界での自分の座標軸を確認できたように思います。グローバルな視点に立ち、自分の起こす行動や役割が、どんな意味をもつのか。初体験となった思索の時間には自分のアイデンティティーを探求することができました。自分の活動は直結ではないが、繋がっている。そんな自信と勇気を持つことができました。

そして何よりの収護はＤ班というファミリーを築けたこと。本音で語れて、本音で受け入れられる。そこには言葉にしがたい温かみと安らぎがありました。みんなのがんばりや意志が全員に伝わり、この人の為に自分がどうあるべきか思索できる場所。この短期間でこれだけの関係を築けたことは、私にとってとても大きな驚きと喜びでした。がんばっているみんなと本気で議論して、刺激を与え合う関係でいられたこと、カウンセラーのお父さんの言葉に涙が溢れたことは偽りない、この４日間の成果だと思います。

次に私が果たすべき役割。それはこのセミナーで学んだこと、もらった熱意を地域に持ち帰り、

ＲＹＬＡのくさのねを広げること。私にこれだけの感動を与えてくれたロータリアンの方々、参加者の方々、そしてＤ班のみんな。こんな素敵な関係を自分の足元から創り出して、みんなが温かい気持ちに包まれる世界づくりへ。今一歩歩みを進めます。

セミナーの裏方に撤し、私達を導いて下さったロータリアンの皆様ありがとうございました。

坂本　怜

「ＲＹＬＡに参加してみて」

今回、ＲＹＬＡに参加させていただけるように手配して下さった高松東ＲＣのみなさんには大変感謝しております。また、ＲＹＬＡが何事もなく無事に、そして円滑に進むために準備や司会進行をして下さったロータリアンや野外活動センターのスタッフの方々に厚くお礼申し上げます。

このＲＹＬＡでの４日間の大半を班で過ごすと聞いた時、同じ班のメンバー以外の方ともお知り合いになりたいと感じましたが、時が経つに連れて、その思いはむしろ交流の機会が主に班員とだけで良かったと思うようになりました。なぜならば狭く深く対人関係を築けると考えたからです。もし、班編成をしなかったらおそらく一人一人と話せる機会は激減し、広く浅くの関係になってしまっていたと思います。

カウンセラーの安行さん（以後お父さんと呼ぶ）が初日に、将来、班のメンバーが素晴らしい仲間となるでしょうとおっしゃっていました。その意味が４日目の今、よく分かってきました。

講演、バズセッション、キャンプファイヤー等この４日間、非常に実りある密な時間が過ごせました。何と言っても、一番実りあると感じたのはＤ班で集まり何かしらのことをする時でした。そう感じさせてくれた源は、やはりお父さんとお母さん（永田さん）だと思います。Ｄ班でなければここまで素晴らしい時間は過ごせなかったと思います。私はＤ班のメンバー一人一人に対し感謝の気持ちでいっぱいです。心からありがとうと言いたいです。この素晴らしい仲間14人とこれからずっと歩んでいきたいです。

３夜とも、この素晴らしい人材と話をしなければもったいないと、必死でずっと起きていようとしました。誰かが起きている時には入浴もしませんでした。早朝に入っていました。その理由もやはり、もったいないからです。しかし、３夜とも誰よりも早く床に着いてしまっていました。就寝してしまったがために、誰よりも対話する時間が少しだけ短かった私でも素晴らしい仲間と思えるのです。

機会を与えて下さった皆様に本当に感謝しています。

佐々木　宣夫

「第26回ライラセミナーに参加して」

春のすがすがしい空の下、皆そろって終了の日を迎えることができた。このセミナーで、他では味わえない体験をすることができ、他では得られないものを得ることができた。

私の参加のきっかけは、現在籍を置く大学院研究科の、ある教授からの誘いであった。地区のロータリアンの方から話を伺ったものの即答しかね、１日考えた後、何か学生ならではの経験ができるのではないか、と考えて参加の意思をお伝えした。ロータリアンの方からは「人生が変わるよ。」と言われていたものの、この齢で自身の変様が得られるとは思えず、ただ、学生として過ごせるこの時間の一つの過ごし方程度にしか考えてはいなかった。

昔の高松築港の面影など、全く留めぬ程に様変わりした高松港を離れ、フェリーに揺られること１時間、「二十四の瞳」の舞台でもある小豆島は、一度足を運びたい地でもあった。

初日、入所式を迎えて、３泊４日を共に過ごす仲間たちと出会ったが、私と同年代の方も何名かおられ、やや安心の感があった。班分けの際、研修者の名を呼び捨てにするカウンセラーの方に不快感を覚えながら、我が班のカウンセラーの方が「さん」付で呼名されたことに安心した。現職中は高校生を引率する立場であったが、逆の立場で

あることに、心地良ささえ感じることができた。

さて、今回の研修活動には、3回の講演、講話、レクリエーション、キャンプファイヤー、思索の時間、バズセッション、フォーラム、記念行事といったものがあったが、余島の豊かな自然の中で、ゆとりある時間を満喫することができた。静けさと寒さの中、しかし、心は暖かいものを味わわせて頂いたキャンプファイヤー、自身の体力を忘れ、日頃の運動不足を悔いたレクリエーション。潮風の香りと野鳥のさえずりに抱かれ、心洗われた思索の時間。班の全員が、それぞれの心にあるものをぶつけ合ったバズセッション。何度も協議して、時間の限り完成度を練り上げて臨んだフォーラム等、どれも満足の行くものであった。ただ、講演、講話について、講師、受講者が非常に近い位置にあったものの、質問、意見交換の機会が得られなかったこと。各班が完成度の高い資料を持ち寄ったにも係わらず、意見を戦わせるまでの盛り上がりを見なかったことは、残念であった。

我がD班は、実に豊かな人生を歩んで来た人たちばかりであった。全体を束ねるリーダーを立てることなく、全員がそれぞれの持ち味を発揮して、万事すすんだのであり、お互いが自然理に、お互いを認め合い、フォローし合える関係を築いたのであった。カウンセラーのお二人を「父」、「母」と自然に呼び、班の全員が、お互いを身内と感じながら過ごすことができた。カウンセラーのお二人は、常に輝き、そして自分らしく振る舞われており、およそカウンセラーらしからぬ方であったが、御自分のお気持ちを我々班員に対して素直に表現される方であったからこそ、我々全員も充実した語らいの時間を持つことができたと感ずる。

自分の中で、何かが変わった。それは、若返りであり、着飾らぬ自分であり、一人の人間の再発見でもあったように思う。素晴らしい出合いと、素晴らしい時間に心から感謝する。

チェン　ユーエン

あっという間にライラセミナーの終了式になりました。3泊4日間でいろいろ素晴らしい思い出を作りました。ライラセミナーに参加して、とてもよかったと思います。

また、自分と違う分野の人々との出会いができて自分にとって非常に大きな意味を持つものとなりました。特に、話し合うチャンスの中で、皆様から多くのアイディアをいただきました。いつも驚き、自分と違う方向で考えていても、最後に必ずまとめるようになりよい結果が出ました。

今回のセミナーのテーマは、〝人間・自然・科学技術〟でした。人間は、何のために、生まれてきたか、恵まれた自然に囲まれて、どういうふうに生きていけばよいのか、また、科学と技術の進歩により、人間は、どう適応していけばよいのかなどを考えさせられました。

溝田先生の講義で、グローバルな物事の捉え方を、身の回りから、地域社会と日本の国の現状・動向、国際社会の変化、「人間の安全保障」を目指したGO／NGO協力、科学の可能性に拡大してみることを今後から、私もそう実行していきたいと思います。

富田　明廣

「自分自身への土産物」

『3泊4日で人生観が変わる』

開講式でこの言葉を聞いたとき、私は『人生観など、そう簡単に変わるものではないだろう』と思っていました。同時に、自分とは異なる年齢、立場、考え方の受講生と意見を『戦わせる』のであろうと思っていたセミナーに対し、不安が先に立っていました。

班分け直後のミーティングで、カウンセラーのお二人の言葉、『他の人を認めることから始まるんだよ』を聞いたときに、自分の不安が全て消えてしまいました。それ以降の全てのプログラムは、自分にとって新鮮であり、感動を覚えるものでした。班員のお互いが、それぞれの個性ある意見を述べる、意見を戦わせるのではなく個性や考え方を認め合う、その上で一つの目的に向かって全員が納得し進んでいく。このプロセスはとても楽しく、また有意義なものでした。

そして、セミナーを支えている方々の素晴らしさにも感動しました。キャンプファイヤーでの今井鎮雄先生のお話。論すでもなく、ただ語るのでもなく、想いが直接伝わってくるお話。感動でした。東野洋子さんのお話。衝撃でした。ただの優しさではない、とてつもない想いを秘めた雰囲気と説得力に、ただ驚くばかりでした。このような方々と出会い、言葉を交すことが出来ただけでも、とても有意義なセミナーであったと思います。

そして、このセミナーに参加して、何よりの大きな収穫、3泊4日で14人の友人ができました。年齢や立場を越えて、お互いに認めあった友人達です。『お父さん』、『お母さん』と呼べる暖かな雰囲気を創り、自然に皆を導いて下さったカウンセラーのお二人、心から認め合い、一つのものを造り上げていった受講生の仲間達、私にとってかけがえのない存在を得ることができた喜び。4日間という期間で、これほど大切なものを得たことは、これまでに経験したことがありません。一生の友人を得ることができたと思います。

このセミナーで体験したことで、無駄なものは、私には一切ありませんでした。セミナーで得たことを、今後の自分の人生に、そして、これから私に関わる全ての人々のために使っていきたいと思います。

本当に有難うございました。

中塚　雅登

「ＲＹＬＡセミナーを終えて」

今、私が思っている事は、今日でセミナーが終わってしまう事が残念で少しさみしいという事です。この4日間は本当に楽しかった。D班は皆が前向きで積極的で初日から全員が何でも自分の思う事を話せていた。雑談から真剣な話題までいろいろなテーマについて考え、自分の意見をまとめ話す。また他人の意見を聞いて、人によって違う価値感がある事に気づき、互いに相手の意見を尊重し認め合う間柄になれました。ほぼ全員が初対面であり、日常の生活から離れたこの余島という自然の中で、利害関係が一切ないテーマについて話し合う事によって、本当に相手を理解しようという姿勢になれました。それに、もっとカウンセラーの安行お父さん、永田お母さんと話がしたい、話を聞かせてもらいたいと思っています。だから今日でセミナーが終わってしまうのが少し残念です。

私はこれからの生活の中で「あなたがいてくれて良かった」と思ってもらえるようになりたいと考えています。そう言われる事が一番嬉しい事です。自分が社会のために出来る事は？何で貢献できるのか、まだ答えは見つかっていませんが、これからも考えていきたいと思います。このセミナーであらゆる物事について考える習慣がついたので、きっと答えは見つけられると思います。

最後になりましたが、このようなセミナーに参加できた事を嬉しく思います。推薦して頂いてこのような機会を与えて頂けた事に対して感謝します。また、青年の為にこのような機会をつくられたロータリークラブの方々にも感謝します。ありがとうございました。

中屋　理奈

私は、医療機関にてソーシャルワーカーとして勤務していますが、今回のライラセミナーの参加については職場の方から紹介があり参加させて頂くことになりました。渡されたパンフレットの参加条件の所に、「リーダーを志す者」、「リーダーになるべき者として認められる者」という風な感じで表記されていて、正直とまどいました。「リーダーって何？私はリーダーではないけれどいいのかな…。」と。そんな不安と、「どんな人達に会えるのかな。」という期待を抱きながら、余島に足を下ろしました。

受講生は、様々な職種の方、又は学生達で、本当に普段経験できない環境において4日間過ごすことができたと思います。私のいたD班のメンバーも、それぞれに個性がすばらしくて、討論の時などは熱く語るけど、その一人一人の持ってるものが、例えぶつかったとしてもみんなで少しずつ補足をつけ足しながらすすめると、気がつけばどん

どんいいものできあがっていき、そんな「冷静さ」がとても心地よく感じました。又、メンバーの感受性の豊かさには本当に圧倒されました。一人で過ごした「思索の時間」はそんなことを考えながら、少し自分を情けなくも感じました。「私って何だろう…。みんなあんなに活発に意見が言えてすごいな。今まで私は、自分について、口には出さないけど実は心の中で色々考えている人間だと思ってばかりいたな。でもみんなの様な考えをとても思いつかないし、やっぱり私って本当は何も考えてないのかな。」と。だからお父さんが、「みんな思ってることや言いたいことはあるけど、上手く言えないだけなんだよ。」と話してくれた時は、本当に嬉しかった。こんな自分でも受け止めてあげたいと思いました。そしてそれ以上に嬉しかったのは、こんな私をみんなが受け入れてくれたことでした。それが私の勇気になり自信になりました。みんなが受け入れてくれた私だからこそ、自分でもそんな自分を受け取めれたと思います。そして、お父さん、お母さん、みんなを温かく見守り支え続けてくれてありがとう。うまく言葉にはできなかったけれど…この思いが通じますように☆またお酒飲みながらゆっくり話しましょう。

今私は、1日目に抱いていた気持ちとは違う気持ちでいる自分を確信しています。みんなと出会えたこと、余島のことをこれから帰って、私を待ってくれている私の大切な人達に早く話したいです。

こんなすばらしい「機会」を与えて下さり、本当に心から感謝します。ありがとうございました。

原田　啓行

「ＲＹＬＡセミナーを経験して」

今回、私がライラセミナーに参加する事ができた理由は、以前、経験された方々からの感想を聞いたり、強く進めて頂いたりした事からです。

そして、何より自分自身がそのような話を聞いていく内に、『充実した人生を送る為の術を少しでもいいから身につけたい。』と言う欲求にかられたのが大きかったからだと思います。

この余島という、日常とはかけ離れた場所で日常とはまた違う規律の中で、さまざまな人達と講義を聞き、生活していくと言う事は、充分魅力がある事だと思いましたし、滅多に無い緊張感を感じずにはいられませんでした。

開講式が始まる前に４つの班に分けられ私はＤ班に属する事となったのですが、キャビンにて、雑談をしている内に、談笑となりすぐに打ちとける事ができました。

１日目、２日目の講義では、昨日、一緒に談笑していた友達が、真剣に講義を聞き入っている様子を目のあたりにして、正直失礼かもしれませんが、講義の内容より、刺激を受けたように思います。

しかし『リーダーになる条件』という題目で行なわれたバズセッションでは、皆一丸となり、討論や提案、プレゼンテーションを共同作業で行ないました。

その作業での、皆の真剣さ、勤勉さ、志の高さを知り、自分の無知さを知る事となったのですが、決して自分に対して、批判的にはならず、精進していこうという気持ちが養なわれたのではないかと感じました。フォーラムしかり、みなさんの積極性には大変感心しました。

そして、何より、カウンセラーのお二方すばらしい人間性にふれられたのが良かったと思います。

私にライラセミナーを進めてくれた方々、スポンサーの方々には本当にかけがえのない経験をさせて頂いたと感謝しています。

ありがとうございました。

永友　久雄

「ライラセミナー」

今回、このライラセミナーを終えて得た感想、それは圧倒です。

私が一番このセミナーで印象に残ったのは夜の語らいの時間です。正直、この時間にはレクリエーション的要素ばかりの、単なる親しくなるだけの時間かと思っていました。しかし、私たちＤ班はそうではなく、確かに、バカな話もしたのですが、様々な年齢の方から、そして、自分とは違った経

験をした方から、その人の心の内にある考え、心いきなどを聞かせてもらいました。私は20歳という最低年齢で参加したのですが、やはり、自分より年上の方は経験が自分より豊富なせいか、また、就職している、つまりプロの道を歩んでいるせいか、話に芯があり、自分の意思を積極的に発言しつつも、私の話も聞きつつアドバイスもしてくれました。実際、自分がその年齢になってあのようになれるかどうかとなると、自信がありません。

驚いたことには、自分と同年代の子が、自分の意思をしっかり持ち、発言しているということでした。私は、確かに自分の意見は一応持ってはいるけど、発言しない、もとい、発言できない。これほどまでに皆が自分の意見を持ち、積極的に発言している場にきたのは、もう数年ぶりです。やられたってかんじです。

ここで一つ目標ができました。自分に足りないのは、積極的な発言力だとわかりました。自分の目標に一つでも気づかせてくれたこのセミナーに感謝です。一歩大きくなります。

D班カウンセラー　永田　恵子

「第26回ＲＹＬＡセミナーに参加して」

今、３泊４日の緊張が余々にほぐれ、心地よい疲れを感じながら、この４日の出来事を思いおこしています。

年令も、立場もちがうＤ班の皆様と初めて出合った時から、なぜか旧知の友に再会した時の様な安ど感がありました。

初日のキャビンタイムでは、なる程、皆さんそれぞれの場でリーダーシップを取ってやってこられ、又この様な機会を得て何かさらに自分を高めて帰ろうと思われる静かながら力強い意志がひしひしと伝わって来ます。

ある時には自然に数人に分かれ、討論が始まり、それを持って全員が共に考え、そして又自然の成り行きで又ちがった仲間と討論が始まる。時に熱く、又なごやかに、そして深く浅くゆったりと、とその状況は色々であっても、常に真けんで外の問題を自分の内のものとして消化し時間の経過と共にそれぞれ皆、自分を練りあげていく様を目の前で体験できました事は、私が又、私と向き合って、社会の中の一員としてよりよい自分を形成していく為にも本当に良い体験でありました。

諸先生方の講話も広く深く暖かいものでありました。ご縁があって、こんなにぜいたくで高いレベルのセミナーに参加させていただきました事、多くのよき出合いをいただきました事に心より感謝申し上げます。

来ました日にはまだつぼみでありました桜が、今日初めてチラホラ咲き始めました。

この経験が単に自分のものとして留めておくだけではなく、それぞれの日じょうの場に持ち帰って、学びを実践にそして継承へと花咲かせていければ良いと思います。

目の前に広くすんだ青い海がゆったりと広がっています。

心地良い疲れが、今あたたかい気持ちと、いくばくかの満足感でいやされていく様です。

〈第26回ＲＹＬＡセミナー運営委員会〉

ガバナー	本山新三	(第2680地区　篠山ＲＣ)
	桑原信義	(第2670地区　徳島南ＲＣ)
顧問	今井鎮雄	(第2680地区　神戸南ＲＣ)
	深川純一	(第2680地区　伊丹ＲＣ)
	安平和彦	(第2680地区　姫路ＲＣ)
アドバイザー	米谷　収	(第2680地区　神戸南ＲＣ)
	三宅洋三	(第2670地区　高松ＲＣ)
ディーン	白石正明	(第2670地区　高松グリーンＲＣ)
副ディーン	秋山紀史	(第2680地区　洲本ＲＣ)

■第2680地区

新世代委員長	秋山紀史	(神崎ＲＣ)
ライラ委員長	空地顕一	(姫路ＲＣ)
ライラ委員	赤穂　哲	(姫路南)
	井奥寛泰	(姫路南)
	大森英夫	(伊丹)
	徳梅明彦	(あわじ中央)
	内藤吉子	(尼崎南)
	三木　明	(姫路)
	三木且視	(龍野)
	山口　徹	(神戸)

■第2670地区

新世代委員長	宮崎　満	(松山東)
ライラ委員長	猪野恵一郎	(松山南)
ライラ委員	植松慶太	(高松中央)
	柿本五月	(大洲)
	佐伯直治	(小豆島)
	篠原成行	(北条)
	白石正明	(高松グリーン)
	高岡政次	(松山南)
	長田　昭	(徳島東)
	別役重具	(高知東)
	松崎和博	(高松グリーン)
	山田武史	(御所)

主催
ＲＩ第2670地区
ＲＩ第2680地区
ＲＹＬＡ運営委員会